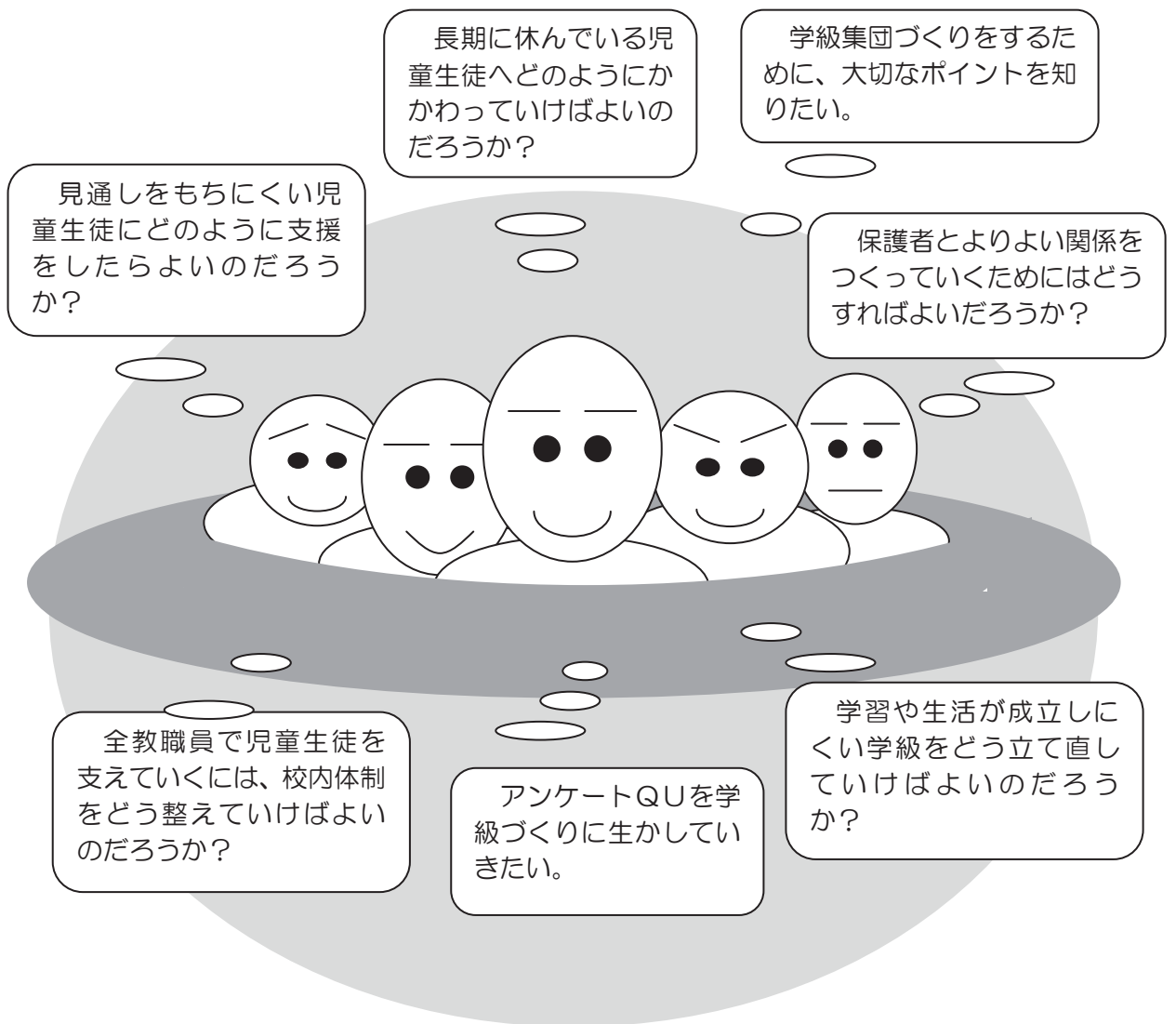


生徒指導・学級経営上の課題への取組

～県内の公立小・中・高等学校の実践に学ぶ事例集第二集～



平成24年3月

島根県教育センター

はじめに

平成22年3月に、「生徒指導・学級経営上の課題への取組～県内の公立小・中学校の実践に学ぶ」と題した事例集（第一集）を発売してから、2年が過ぎました。おかげさまで、この第一集は、島根県の生徒指導実践研修や各地の生徒指導研修会、管理職研修、初任者研修等の演習において活用していただき、事例のもつ力に学ぶものが大きいとっていただきました。

その声を受け、島根県内で日々紡がれているたくさんの優れた実践を再び集めようと考え、できたのが今回の事例集第二集です。第一集同様、今回の事例集も、ぜひお手にとっていただいて、これらの実践を島根県共有の財産とし、明日からの皆様の実践の一助としていただきたいと思います。

作成について・活用にあたって

○ 事例の内容について

平成20年度に島根県内の公立小・中学校（全体の4分の1の校数）に「生徒指導・学級経営上の課題への今年度の取組」というアンケートを行い、その回答の中から、「対応に難しさを感じた課題」として挙げられた課題をもとにして取り上げています。〈第一集巻末資料参照〉

○ 事例の選定にあたって

島根県教育庁義務教育課生徒指導推進室や各教育事務所生徒指導専任主事等からも情報を集め、広く全県から事例（小学校8校、中学校7校、高等学校7校）を集めました。事例によっては、複数の方から聞き取りを行い、いろいろな立場の方からの取組を紹介しています。

〈第二集p4参照〉

○ 事例を見える形にすることについて

事例は、「聞き取り」をさせていただいた内容を中心にまとめました。その際、取組の事実と共に、その取組を生み出している、実践者の「思い」も丁寧にお聴きするようにし、まとめに生かすようにしました。また、事例の最後に取組のポイントを整理して、【考察】を加えました。

○ 個人情報の保護について

学校や個人が特定できないような表現を用いています。そのため、残念ながら、貴重なご実践を提供してくださった先生方のお名前は学校名はふせさせていただきます。

○ 第二集の特徴

- ・第一集は、小・中学校の実践のみ掲載しましたが、第二集では、高等学校の実践も紹介しています。
- ・平成23年度から、県の事業として「アンケートQU」が各校で実施されています。第二集では、この「アンケートQU」を生かした実践を紹介しています。
- ・学級経営が、安定した学校生活を送り、学力を伸ばしていく基盤となることから「学級集団づくりの実践」を数多く集めました。
- ・「不登校児童生徒への対応」「感情のコントロールが難しく、場に応じた言動がとりにくい児童生徒への対応」「校内体制を整えて生徒指導にあたっている実践」では、現在の子どもがもつ課題に正面から向き合い、どのような力をつけていったらよいか、具体的に継続的に支援していった事例が多く見られました。

○ エキスを読み取っていただきたいこと

学校によって、地域・規模・教職員の状況等、全く異なります。事例集に掲載している取組と全く同じ取組を行うことは不可能だと思います。しかし、それぞれの取組がめざすものや工夫のあり方、エキスになるところを読み取り、ご自分の実践に生かしていただければと思います。

も く じ

- はじめに 1
- もくじ 2
- 各事例のポイントについて（読む事例を選ぶヒント） 4
- 各事例（**小**→小学校 **中**→中学校 **高**→高等学校の事例）

1 「不登校児童生徒への対応、休みがちな児童生徒への対応」

- (1) **小**「その子と保護者の不安に寄り添いながら、教室へと戻していく」 -- 5
～複数の教職員がチームとなって支える～
- (2) **小**「校内で連携し、その子の歩みを大切にして学校や教室へ向かわせる」 9
～少しずつ少しずつできることを増やしていく～
- (3) **中**「小学校以来長期に休んでいる生徒への対応」 12
～登校するための種をみんなでまき続けていく～
- (4) **高**「つながり続け、少しずつハードルを上げて登校へ向かわせる」 17
～校内の支え、スクールカウンセラーとの連携～

2 「感情のコントロールが難しく、場に応じた言動がとりにくい児童生徒への対応」

- (1) **小**「不安が強く、集団の中でパニックになってしまう児童へのかかわり」 20
～子どもたちを愛おしみ、大切に丁寧に育てることが紡ぎ出すもの～
- (2) **小**「見通しをもちにくい子どもへのかかわり」 25
～保護者との連携、学級づくりを通して～
- (3) **高**「あらかじめ特性を理解し、きめ細やかな対応を行う」 29
～子どもが安心できる方法を考え、居場所をつくる～

※2-(1)(2)は、学級集団づくりの実践でもあります。

3 「学級集団づくりの実践」

3-(1)「学習や生活が成立しにくい学級への対応」

- (1) ① **小**「信頼感を基盤にして学級を立て直していく」 32
～授業づくりを柱にして～
- ② **中**「安心感のある学級づくりを求めて」 36
～学級の基盤を整える・生徒たちに語らせる～

3-(2)「アンケートQUを活用した学級集団づくり」

- (2) ① 小「ルールの定着やトラブルの解決を通して集団を育てる」 ----- 40
～アンケートQUをきっかけに子どもたちの実態を見つめて～
- ② 小「一人一人の声を大切に聴く」 ----- 45
～アンケートQUが教えてくれたこと～
- ③ 中「子どもたちとつながって、集団と個の力を高めていく」 ----- 48
～アンケートQUで見た子どもたちの世界をきっかけとして～

3-(3)「学級集団づくり・学年経営で大切にしていること」

- (3) ① 中「中学校1年生を中学生として育てていく」 ----- 52
- ② 中「少人数の学級をもった時に～新しい良さを見つけていく～」 ----- 53
- ③ 高「普通高校で過ごす子どもたちと細やかにつながっていく」 ----- 54
- ④ 高「3年間クラス替えのない子どもたちをつなぐ」 ----- 56
- ⑤ 高「クラスの状態を判断し、子どもたちに考えさせていく」 ----- 58
- ⑥ 小「学年の力で学級を支える～小学校での学年経営～」 ----- 60
- ⑦ 高「生徒たちをみんなでみる～普通高校での学年経営～」 ----- 61

4 「校内体制を整えて生徒指導にあたっている実践」

- (1) 中「全教職員で子どもたちを支えていくために」 ----- 62
～丁寧に着実に取組をつなげ、組織を活性化していく～
- (2) 中「生徒指導に学び合いを生かし、子どもを成長させていく」 ----- 66
～かかわる前よりもよい関係になることを目指して～

5 「保護者との関係づくりの工夫」

- (1) 高「自らも動き、何度も言葉を交わして、心を通わせる」 ----- 70
～人を大切に^{おの}する姿勢は必ずから伝わり、信頼感を生む～
- 課題に対応する際に支えとなること ----- 72
～多くの実践の中で大切にされていたこと～
- 事例を自分の取組に生かす ----- 75
～事例集を活用した自己研修・校内研修のプログラムの提案～
- 〈巻末資料〉 ----- 79
～事例集の中で使われているアンケートQUの用語について～

各事例のポイントについて ～どの事例を読もうかと思われた時に～

各事例にはたくさんの方が、いろいろな立場でかかわっておられました。そこで、各事例の取組に主にかかわった方がわかるように下記にまとめました。ただし、聞き取りをしたのは取組の一部ですので、下記に示した以外の方のお力も課題の解決には当然支えとなったことと思います。そこで、ここでは、「主にかかわった」という視点でまとめています。

また、取組のポイントは、各事例の題名（もくじ参照）でもわかるようにしました。

どの事例を読もうかと思われた時に下記の表や題名を手がかりにしてみてください。



事例の番号	主にかかわった方等	ページ
1 「不登校児童生徒への対応、休みがちな児童生徒への対応」		
1－(1) 小学校	管理職、担任、養護教諭、支援員等、他機関	5
1－(2) 小学校	管理職、担任、相談室担当、他機関	9
1－(3) 中学校	担任、養護教諭、スクールカウンセラー、支援員等、校内体制	12
1－(4) 高等学校	管理職、担任、スクールカウンセラー、校内体制	17
2 「感情のコントロールが難しく、場に応じた言動がとりにくい児童生徒の対応」		
2－(1) 小学校	担任、支援員等、校内体制	20
2－(2) 小学校	担任、他機関	25
2－(3) 高等学校	担任	29
3 「学級集団づくりの実践」		
3－(1)「学習や生活が成立しにくい学級への対応」		
3－(1) ①小学校	担任	32
3－(1) ②中学校	担任	36
3－(2)「アンケートQUを活用した学級集団づくり」		
3－(2) ①小学校	担任	40
3－(2) ②小学校	担任	45
3－(2) ③中学校	管理職、担任、生徒指導主事、校内体制	48
3－(3)「学級集団づくり・学年経営で大切にしていること」		
3－(3) ①中学校	担任	52
3－(3) ②中学校	担任	53
3－(3) ③高等学校	担任	54
3－(3) ④高等学校	担任	56
3－(3) ⑤高等学校	担任	58
3－(3) ⑥小学校	学年主任	60
3－(3) ⑦高等学校	学年主任	61
4 「校内体制を整えて生徒指導にあたっている実践」		
4－(1) 中学校	管理職、生徒指導主事、教育相談担当、養護教諭、支援員等、校内体制	62
4－(2) 中学校	管理職、生徒指導主事、校内体制	66
5 「保護者との関係づくりの工夫」		
5－(1) 高等学校	管理職	70

1 「不登校児童生徒への対応、 休みがちな児童生徒への対応」

事 例 名
1－(1) 小学校 「その子と保護者の不安に寄り添いながら、教室へと戻していく」 ～複数の教職員がチームとなって支える～
1－(2) 小学校 「校内で連携し、その子の歩みを大切にして学校や教室へ向かわせる」 ～少しずつ少しずつできることを増やしていく～
1－(3) 中学校 「小学校以来長期に休んでいる生徒への対応」 ～登校するための種をみんなでまき続けていく～
1－(4) 高等学校 「つながり続け、少しずつハードルを上げて登校へ向かわせる」 ～校内の支え、スクールカウンセラーとの連携～



「その子と保護者の不安に寄り添いながら、教室へと戻していく」 ～複数の教職員がチームとなって支える～

【事例の概要】

Aさんは、小学校3年生の学年末から登校できなくなり、そのまま4年生へと進級した。そのAさんに複数の教職員でかわわり、教室復帰につなげていった事例。

【取組の実際】

※以下は、進級後4年生時の担任の先生、支援員の先生、校長先生からの聞き取りを中心にまとめている。

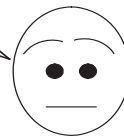
1 休み始めたAさん

(1) すぐにみんなでの支援が始まる

Aさんは3年生の学年末に、友だちとの関係に強く不安を感じ、また、自分自身のことでも気にかかることが出てきて、登校できなくなった。家でも不安で落ち着かないAさんの様子に、保護者は「何かあるのだろうか、せめて外出させたい、何かしないといけない」と思った。学校はすぐにそんな保護者の不安を受けとめ、その不安を軽減する一つとして、外部の相談機関や医療機関を紹介し、保護者も積極的に動いた。

この学校では、普段から気にかかる子どもがいたら、すぐに「この子はどんなことに困っているか」「今、誰がかかわっているか」「どことつながってるか」等の簡単な記録を作り、それを複数の教職員で共有するようにしていた。その流れがあったので、Aさんの場合もすぐに支援のための動きが生まれた。

すぐに動きが生まれたのは、いつも何かあったら関係のある教職員が、ぱっと集まる雰囲気があったからだと思う。基本姿勢はみんなが考えていいと思ったらやろう。だめだったらまたみんなで考えよう。とにかく一歩を出す。（校長）



Aさんは登校できないものの、相談機関には通うことができた。この状態が、4年生に進級しても一学期前半くらいまで続いた。この間、学校は養護教諭が中心となって、相談機関に度々連絡をとり、Aさんの様子や変化をとらえた。

(2) 保護者を支える

保護者には、「いつでも学校に来てください、話を聞かせてください」と伝え続け、母親も度々話しに来た。また、母親が、一人でAさんのことを抱えて苦しくならないように、他の家族にも「話を聞かせてくださいね」と伝え続けた。

校長先生が、「いつでも来てくださいね。校長室でもいいですよ」とみんなで受け入れる雰囲気をつくってくれていた。学校とのつながりが切れることはなかった。（支援員）



家庭訪問では、おばあさんの話も聞いた。ひきこもらせてはいけないと強く思っておられた。おばあさんもすごく思いがあって、一生懸命だった。（担任）



お父さんに「お忙しいでしょうから、時間はあわせませす。いつでもいいから来てくださいね」「一緒に頑張らせてくださいね」と言い続けていた。（校長）



2 相談室登校を始めたAさん～変化をとらえながら少しずつ～

(1) 保健室登校から

Aさんには「保健室登校から始めませんか」と伝えてあった。そして、4年生の一学期の半ば、Aさんは母親についてもらって保健室登校を始めた。はじめは、他の児童に会うのを嫌がり、短時間保健室で過ごしては帰っていった。

養護教諭、担任、相談室担当の支援員は、放課後になると「今日はどうだった」とAさんの様子について、たくさん話した。話す中で「次はこうしてみよう、ああしてみよう」と対応が見つかっていった。また、支援員は保健室のAさんに顔を見せては、少しずつ距離を縮めていった。そうして、Aさんは他の児童もいる相談室への登校へと移っていった。

養護の先生、支援員の先生とAさんのことをとにかく話した。それで行き詰まると人数を集めてケース会をしてもらった。みなさんのお知恵を拝借。みなさん忙しくても嫌な顔をせずに集まって、この子のためにと考えてくださった。(担任)



(2) 相談室登校を支える

① 母の願いを聴く

相談室登校には、母親もついてきた。母は、「相談室まで来れるようになったのだから、学習を進めてほしい」と願っていた。Aさんもそれに応じて、学習する素振りは見せたが、いつも表情が硬かった。母の願いに応えていくのは、まだ難しいように思われた。

支援員は、まずはAさんの気持ちをほぐしたいと思っていた。学校でほっとできる場所や時間を味わうことが、学級で過ごすための安心感につながると考えていた。

しかし、母の学習に対する不安や願いもよくわかったので、母の話を否定することなくひたすら聴くようにした。

相談室は、教室と家庭の間にあるような場所。教室への中継地点。ほっとする場所。でも、Aさんはあの頃ものすごく硬い顔をしていた。

(支援員)

② Aさんの思いを感じていく

支援員はAさんの表情を見ながら、母の願いとは別に本当は何がしたいのかなあと考えた。他の子どもたちと一緒に過ごすことに、興味を示しているように見えた時には、他の教職員に頼んでAさんを連れて行ってもらったり、他の子と一緒に体育館に行かせたりと母から離れても過ごせる機会をもつようにした。

Aさんも折り紙やボール遊び等がうまくできた時に、他の児童から「すごい」と言ってもらえて、自信が出てきた。そうして、相談室登校が定着していった。



お母さんは、せっかく相談室まで来ることができるようになったのに後戻りはしたくないと一生懸命だった。だから、「大丈夫、大丈夫、一緒に考えるから」とずっと言い続けていた。(支援員)

3 夏休みのAさん～2学期に向けて自分の歩みで～

(1) 夏休みの過ごし方をAさんが決める

相談室登校が定着した一学期の終わり、母親から「夏休み中に勉強を見てほしい」と担任にお願いがあった。この頃、担任はAさんの成長を感じていた。そこで、Aさんの力を信じるという意味もこめて、「本人に決めさせませんか」と母に言ってみた。それに対して、母は「そうですね。大切なことですね」と応じてくれた。

そろそろ自分の力でやらせてあげたいと思っていました。でも、お母さんの一生懸命さや不安もわかるし。でも、この時は思いきって言ってみた。そうするとお母さんもわかっておられたみたいで、「そうですね」と言ってくれました。(担任)



(2) 教室復帰に向けて安心感を高める

この後、担任はAさんと話し合っ、夏休みに登校する日にちを決め、その日に担任と二人で勉強をした。Aさんははじめは、なんだか落ち着かない様子で、じっとしていることが難しかった。そこで、担任は好きなマンガの話につきあったり、バランスボールに座りながら勉強をさせてみた。Aさんはそれらのことが気に入ったようで、約束した日には登校し、そして、だんだんと落ち着いて机に向かって勉強するようになっていった。

また、夏休みも相談室で勉強をしていたが、担任は「教室に行ってみる？」と声をかけ、Aさんが了解すると教室に行き、また別の日に「自分の席に座ってみる？」と声をかけ、またAさんがそれに応じた。夏休み中に数回、Aさんは自分の席に座って、教室の中の自分の場所を確かめた。

自分の場所がわかっていると安心かなと思って席に座ってもらった。本人に「どうする？」と聞いてダメだったら、その日はやめて。本人に確認して、無理はしなかった。(担任)



(3) お父さんの思いを引き出す

夏休みの終わり、初めて父親が話し合いに来てくれた。学校は、父親の都合のつく時間にあわせて場を設定した。その時に母親は、二学期に向けての不安やこれまでの苦しさを正直に話した。担任や支援員は、母が頑張ってくここまでAさんを学校につなげてくれたことに感謝した。

父親は「母親が一生懸命にやってくれていることはわかっている」と認める言葉を母に伝えた。そして、父親は「本人が二学期になったら頑張ると言っている。今はそれを信じて見ておいてやろう」と言った。母親は、その言葉にほっとしたようにその場にいた。

それまでに、担任、支援員、養護教諭、みんなが母ががんばっていたことを認めていた。だから、お母さんもお父さんの前で本音を話された。それをお父さんが受けとめてくれたことが大きかった。お母さんの不安が減った。それが本人にはとてもいいことだった。お母さんが泣ける場が学校にあったことは大きいと思っている。(校長)



4 教室に復帰したAさん

夏休みを経て、いよいよ二学期の初日、Aさんはみんなと同じように教室に座っていた。担任は、友だちとの関係に不安を感じているAさんと周りの子どもたちをつないでいくことも大切にしたいと考えていた。

(1) 周囲の子の思いも受けとめる

低学年の頃からAさんとの間にわかまりをもっている子が、数名いた。この子たちは表面的には何も言わなかったが、担任は、Aさんが休んだ日に「本当はどう思っているのか教えて」と聞いてみた。その時、子どもたちはたくさんのことを語り、担任はその子たちの気持ちを受けとめるように聴いた。そして、「あなたたちが嫌な思いをしたのはわかった。でも、これからのAさんを見てあげて。そのためにもどうすればいいかを考えてもらえるかな」と伝えた。子どもたちは「わかりました」と言ってくれた。

子どもたちは吐き出すように正直に話してくれた。

あの子たちも傷ついていたと思う。Aさんだけがケアされるのではなくて、他の子たちもケアしてあげないといけないと思った。

(担任)

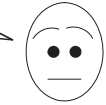
(2) Aさんと向き合う～力を信じる・高める～

2学期の終わり頃、Aさんは周りとの人間関係につまずき始めた。担任は、Aさん本人にも努力してほしいことがあるように思った。そこで、Aさんに「これまで友だちとの関係で苦しんできたよね。今のままではまた苦労すると思うから、あなたの行動をこんな風に変えてみない？」と伝えた。Aさんは、「わかりました」と言い、担任が伝えたように自分を変えていく努力をしていった。

Aさんと話す時すごくどきどきした。傷ついて休んだらどうしようかと思った。でも、言ってあげた方がいいと思った。今ならきっとわかってくれる。成長できると思って伝えた。勝負だった。(担任)



担任のことを味方だとちゃんとわかっていた。そんな人が言ったから伝わったと思う。(校長)



また、担任はAさんが欠席することなく、登校するようになって、連絡帳に毎日「今日はこんなことを頑張りました」と書いた。母親もその連絡帳を欠かさず見てくれた。

そして、Aさんは二学期に登校を再開してから、ほとんど欠席をすることなく、進級していった。

5 取組を支えたこと



- みなさんとよく話した。思いも共有しながらだから、頑張れたと思う。困った時に一人で抱え込まなくていいという安心感があった。どの教職員もよく保健室に立ち寄る。そこで子どもたちの様子をよく聞かせてもらっている。(担任)
- 一人で抱え込まなくてもいい。チームでやれたと思っている。(支援員)
- 全員では無理だけれど何人かできるとにかくかかわろうと。そのためには、集まれる人で集まって、時を逃さず、情報の共有、整理がいると思う。子どもたちのことをよく知っておくことが大切。普段からわいわいと職員室で子どものことを語ることが大切。(校長)

【考 察】

○ チームで動くことで、児童理解を深める、教職員に安心感を生み出す

「何かあったらみんなで動こう、チームでやろう」という雰囲気、教職員の間根づいている。また、「ちょっと集まっては話す」という雰囲気が、児童理解を広げたり、深めたりしており、その時々にあった柔軟な支援を生みだしている。そして、これらの雰囲気が、教職員自身の取組に向けての安心感につながっていた。

これらの雰囲気が根づいているのは、管理職が「みんなでやっぴいこう。子どものことをわいわい話そう」と日々教職員に声をかけ、発信していることが大きいと思われる。

○ 担任の姿勢から学ぶこと

担任は、時にAさんや保護者と対峙しながら、伝えるべきことを伝えている。そのことが、Aさんの力を高めていくことにつながっていた。これは、担任が、支援員や養護教諭と連携しながら、Aさんやその保護者の不安を受けとめて関係をつくっていたこと、Aさんの状態、成長の様子を的確にとらえていたことが基盤にあったことだと思われる。信頼できる大人の言葉は、時に厳しいものであっても子どもたちに響いていく。

また、担任は、Aさんや他の子どもたちへの伝え方、夏休みのAさんへの学習支援等、その子たちにあわせてよく練った上で、実践に移していつている。

○ 保護者の力を引き出す～支えるだけでなく、共に子どもを支援する仲間として～

保護者の不安や思いを丁寧に聴き、学校が保護者にとって安心できる場所となっていた。また、保護者にあわせて時間を設定して話し合い、母を支える父の思いを引き出している。これらのことが、Aさんを学校と保護者と連携して支えていくことにつながっていた。

また、保護者に「一緒に頑張らせてくださいね」と伝え続けている。共に子どもたちを支える仲間としてとらえている。この姿勢に学ぶことは大きいと思われる。

「校内で連携し、その子の歩みを大切にして学校や教室へ向かわせる」
～少しずつ少しずつできることを増やしていく～

【事例の概要】

小学校1年生の2学期から1年間登校しなかったAさん。担任のB先生と相談室担当のC先生が連携してAさんに働きかけ、保護者の付き添いも得ながら、Aさんが少しずつ学校や教室で学べるようになっていった事例。

【取組の実際】

※以下はAさんの担任のB先生からの聞き取りを中心にまとめている。

1 Aさんの状況

Aさんは、幼稚園の時から母親と離れにくかったり、行事の前には行きしぶったりすることがあった。小学校に入学してから数ヶ月間は欠席することなく登校。しかし、2学期、3学期、2年生の1学期と一日も登校しなかった。

この間は、1年生の時の担任が毎日家庭訪問をしていたが、全く出てこようとしなかった。3学期に本人の不安な気持ちが少なくなったので、仲のよい友だちのDさんが手紙を届けたところ、それを機に、その子となら遊べるようになった。そして、次第に外へも出られるようになった。

家庭の中でも、保護者への暴力や暴言があった時期もあった。学校に行けないことについて自分への否定感を口にすることもあった。

2 登校していない間に

(1) 保護者は専門機関で相談を受ける

Aさんが学校を休み始めた頃から、保護者は、月1回、専門機関での教育相談を受け始めた。ここのアドバイスを受けながら子どもへの対応をしていった。

家庭で荒れた様子を見せていたAさんも、家族が協力して支えていき、少しずつ落ち着いてきた。

(2) 学校は保護者とつながる

Aさんが登校していない間も、月に1回、管理職と担任が保護者と会う時間を設けていた。また、保護者の承諾を得て、保護者が相談している専門機関で学校での対応について数回話を聞いていた。

(3) 学校からの働きかけ

休み始めた年の次の年度になり、「休んでいても勉強ができるように」という専門機関でのアドバイスを受けて、保護者が授業の様子をビデオに撮らせてほしいと提案した。B先生は、まず1教科の授業をビデオに撮った。Aさんは、最初のうちはビデオを届けても見なかったが、保護者が家族と一緒に見ようと誘い、また、B先生は楽しそうな授業になるように工夫してビデオ撮影をして数回届け、Aさんはそれらのビデオを見るようになり、また、それを見て勉強するようになってきた。それを受けて、B先生は他の教科もと考えたが、あまり好まない教科のビデオにはAさんは関心を示さなかった。

3 登校へ

(1) 友だちと一緒に校舎内へ

Aさんには、とても仲のよいEさんがいた。趣味や関心事が同じで、2年生の夏休みには毎日一緒に遊んでいた。そのEさんが、遊びの中で「(学校に)来てよ～」というような声かけをしていた。

夕方、校庭で遊んでいたAさんとEさんを相談室担当のC先生が見つかり、「奉仕作業をした子どもにはジュースがあるよ、一緒に草取りをしよう」と声をかけた。2人はその呼びかけに応じ、草

取りをした。そして、C先生が「相談室にAさんの大好きなパズルがあるから見に来ない？」と誘うと、Aさんは校舎内に入ってパズルをして遊び、また、教室にも行って、自分の机を確認することができた。1年ぶりの登校であった。

(2) 相談室を拠点(居場所)にして登校へ

次の日から、Eさんが誘いに行き、保護者も付き添って相談室への登校が始まった。Aさんは、給食が苦手だったので、Eさんも一緒に、Aさんが安心できる相談室で食べた。この日から、登校が毎日続くようになった。

(3) 少しずつ学級の活動へ

B先生は、Aさんの登校が始まって10日ほど経って、Aさんの好きな教科の楽しそうな内容の授業に誘ってみた。1回目は、教室には行ったが、板書をノートに写すこともできなくて、体が固まってしまった。2回目は、涙は出たが、初めて教室で過ごすことができた。

参加できる授業は、手や体を動かす活動的な内容のものであった。

自分一人では教室に行くことはできないが、C先生に「行っておいで」と送り出してもらい、B先生も「おいでおいで」と誘って、保護者も一緒に教室に行き、何とか1時間を過ごして相談室に帰っていった。

だんだん入れる授業が増え、教室のそうじもできるようになっていった。本当に少しずつ少しずついろいろなことができるようになってきた。

ただ、安心できたり、自分がよく活動できると思えたりする場所や時間では、保護者と離れることができたが、安心できない場所では保護者と離れることはできなかった。

教室での授業や活動に行くかどうかを決めるのは、Aさん自身とした。C先生が朝必ず「どうする？」と聞いた。ただ、全く任せるのではなく、Aさんの様子を見ながら、C先生が「大丈夫、行ってみたら！」と押したり、B先生が「おいで」と誘ったり、学級の子どもが迎えに行ったりした。Aさんは、自分で決めたことは実行できた。

また、Aさんは、登校が始まったころ、自分が苦手と思うことを口にして表現することはできなかったが、次第に言葉で自分がいやだと感じるようになってきた。その間、B先生は、何かの活動に対して拒絶するような反応が見られたら、それ以上その活動に誘うのをやめたり、「それはやめたら」と提案したりした。そして、繰り返し話しかけたり、深追いしたりすることはやめていた。

(4) 様々な取組

① 記録をつける

Aさんの1日のスケジュール表を作り、その日の動きを毎日B先生とC先生で書き合った。その記録がAさんの変化を捉えることに役立ち、また、その変化を喜び合うことにつながった。そして、それを、時々管理職に見せ、Aさんの様子を報告した。

② 保護者とのつながり続ける

月末には、保護者、管理職、担任、相談室担当教員、養護教諭で面談をしていた。

また、毎週末には、担任が保護者と面談をし、Aさんの1週間の様子を確認したり、家での様子を話してもらったりしていた。毎日の連絡帳でのやりとりも大切にしていた。

1週間の間でも、少しずつでもできるようになった部分がたくさんあり、それを保護者とB先生で確認し合って喜び合った。

4 学級へ

(1) 自分で決めて

2年生の間は、ずっと相談室が主な居場所であったが、それが変わったのが、Aさんが3年生に

なった時だった。Aさんが教室へと向かったのである。Aさん本人が「年度が変わったら教室へ行く」と決めていたのだと思われた。

その後、日直、スピーチ、授業参観、スポーツテストなど、今まで抵抗のあったことに取り組めるようになっていった。また、失敗しても再度挑戦するようになっていった。

Aさんは、自分の気持ちを文字にすることが苦手で、全く書かなかったが、日記を書くことにも少しずつ取り組むようになった。最初は、保護者に書き方を教えてもらい、その通りに書いていたが、次第に「自分が書くから」と言い始めた。

Aさんのこんな言葉を聞くと、Aさんは成長の途上というか、登り坂の途中にいるんだなという気がします。



(2) 授業での工夫

Aさんは、突然指名すると答えられないので、学級全員に答えてほしい時は、そのことを予告し、Aさんを最後に答えさせるようにした。

感想を言う時は、短くてもよしとした。

スピーチでつまった時は、B先生が質問形式にしてAさんに問いかけ、それに答えることで最後まで話すことができた。

経験のない活動をするときは、Aさんが安心できる先生についてきてもらって、その先生とチームプレイで入れるようにした。一度経験すると、「楽しかった」ということがわかり、再度その活動に取り組もうとするようになった。

(3) 保護者の付き添いについて

校内で子どもについて現状を報告したり対応について意見を交換し合ったりする会があり、その中で管理職が「家庭との信頼関係が鍵」と言った。保護者がAさんに付き添うことに関して、校内で様々な意見が出たこともあったが、B先生は、保護者のAさんへの適切な対応とAさんの行動を見ていて、いつの日かAさんが一人で登校するということを決めてそう動くのではと考えていた。

(4) 複数の教職員でかかわる

教室で過ごすようになった今も、Aさんの大好きな教科の担当のF先生が、Aさんと一緒に給食を食べるなど、校内の教職員が担任と共にAさんの登校を支えている。

【考 察】

○ 保護者との信頼関係をつくり、つながり続ける

この学校では、Aさんが学校を休んでいる間も、管理職と担任が保護者と会う時間を持ち続け、つながりを絶やさないようにした。また、Aさんが登校するようになってから、週に1回の面談を継続し、保護者と担任でAさんの小さな変化を見つけていった。このような学校の姿勢が、保護者との信頼関係をつくり、Aさんと保護者を支えることになっていった。

○ 本人の不安感を受けとめながらかわり、本人の決定を大事にする

Aさんには苦手なことや抵抗のあることがあった。一人で教室で過ごすことへの不安感も大きかった。B先生は、その不安感をしっかり受けとめ、基本的には無理をさせないようにした。しかし、Aさんの気持ちが動くようなかかわりをし、そこで本人が決めて動くことを大切にした。そのことが、3年生になったときに、本人が自ら決めて教室へ向かうという行動につながっていった。

○ 学習に向かう工夫、教室につなげる工夫をする

B先生は、Aさんの好きな教科の授業のビデオを撮って届けること、指名での配慮をすること等、Aさんが安心して教室や学習に向かえるような工夫を行った。休んでいる子どもにとって、また、登校し始めた子どもにとって、教室や授業の様子がわかることは安心につながる大切な要素であると思われる。

○ 複数の教職員が連携してかわり、支える

相談室担当のC先生や、Aさんの大好きな教科のF先生が、Aさんに適切にかかわり、B先生と共にAさんの登校を支えた。管理職も、保護者との面談を継続するなど、学校全体でAさんを支えている。

「小学校以来長期に休んでいる生徒への対応」 ～登校するための種をみんなでまき続けていく～

【事例の概要】

小学校の中学年より不登校傾向にあったAさん。中学校に入学しても登校することはほとんどなかったが、複数の教職員が家庭訪問を通してAさんにかかわり続け、中学校3年生の半ばになると登校する回数が増えてきた。そして、Aさんの関心を引き出しながら、学習にも少しずつ向かわせていき、高校進学へとつなげていった事例。

【取組の実際】

※以下は、担任の先生、養護教諭の先生、支援員の先生、スクールカウンセラー等からの聞き取りを中心にまとめている。

1 みんなでつないでいく、みんながかかわる

(1) みんなで家庭訪問を続けていく

3年生になってAさんの担任となったB先生は、Aさんについて「家庭訪問をしてもいつもパソコンをされていて会話ができない。」と聞いた。しかし、1、2年の担任や入学時からかかわっている支援員が、それでも家庭訪問を続けていたことを知り、自分も週に一回は家庭訪問をすることにした。

とにかく顔を見に行く感じ。玄関から入るとパソコンがすぐあって、顔は見える。でも、本人は見てくれない。目は合わない。それが一学期の間ずっと続いた。でも逃げたりはしない。パソコンをのぞこうとすると隠す。(担任)



他にも管理職、養護教諭、スクールカウンセラー等、複数の教職員が時をとらえては、Aさんの家庭訪問を続けていた。ローテーションがあったわけではなく、それぞれの持ち味でAさんにつながる術を探し続け、家庭訪問は行われていた。

(2) 登校するための種をまき続ける

① つながりを求め続ける

i) 関心を寄せていく、心を揺らしていく

保護者は、Aさんについて、小学校の中学年頃から、「何も話してくれない、表情も変わらないので何を思っているのかわからない」と悩んでいた。そんなAさんが、どんなことで心を動かしてくれるのか、何になら興味を示すのか、教職員みんなで「これならどう、あれならどう」と相談しては、家庭訪問の際に投げかけてみた。

言葉を出さないの、興味を示したらそれを拾っては先生方に伝えた。なんとかパソコンから目を離さないかなと思った。お笑いビデオを見せたり、手紙をわざと開けにくくしてみたり、いらっとでもいいからせんかなあと思った。ばかみたいなことでもした。“大まじ”だった。不登校の経験のある若い男性の支援員さんに行ってもらったこともある。ちょっとでもAさんの表情がくずれるとうれしかった。(支援員)



ii) 同年代の他者をつなげていく

親にも何も話さない、そんなAさんと誰ならつながれるのかと考えた時、近所の上級生Cさんが思い浮かんだ。Cさんの気持ちや負担を確認し、Cさんの保護者にも了解を得て、家庭訪問に行く際にCさんが同行してAさんとのつなぎをしてくれたり、朝が苦手なAさんを起こしに行ってくれ

たりもした。

Cさんに必要以上に負担を感じさせないようにはした。そこでCさんの役立ち感を引き出していると思った。「助かる」といろんな人が伝えた。CさんもAさんのいいところを見つけては伝えてくれた。Cさんが高校に行ってから、高校の先生に「Cさんに助けられています」と伝えた。高校の先生も「お前いいことしているなあ」と言ってくれた。(担任)



② 情報をつないでいく、変化を見つけていく

複数でかかわっているだけに情報をつないでいくことが大切であった。そこで、1年の時から、養護教諭が日程の調整をして、担任、生徒指導主事、養護教諭、支援員が集まったの支援会議を継続して行っていた。その会では、家庭訪問時の様子、保護者の思いを共有するようにしていた。

家庭訪問が拒まれていないことが記録を見るとわかった。だから、みんなで支えていこうと思えた。(養護教諭)

また、家庭訪問の様子は共有のファイルに記録され、誰が家庭訪問をしても前回の様子ができるようになっていた。

そして、これらの取組がAさんのわずかな変化、成長を見逃さないことにつながっていった。



3年の8月の初めに家庭訪問をした時に印象が違った。たまたま視線が動く程度だったのに、話しかけてもうなずくし、変化を感じた。何か気持ち的にあった。校長先生が行かれた時も明るかったと記録にあった。(養護教諭)

このような変化をとらえて2学期に登校のチャンスになるのではと考え、夏休みに専門機関も交えてのケース会を行い、みんなでAさんの理解を深め、夏休み中のかかわりを考えた。

実際に3年の2学期あけてすぐの運動会の日に登校してきた。

2 登校を定着させるために～耕し続ける～

(1) 受けいれる雰囲気をつくっておく

3年の運動会の直前、同級生たちが「最後だから一緒にやろう」と伝えに行っていた。また、担任のB先生は、Aさんが写真を撮ることが好きだと知り、行事の時には写真を撮りに来てと伝えていた。

家庭訪問で話した時は反応がなかったけれど楽しみにしていたみたいで。徹夜で来た。寝ると来れないので。打ち上げにも参加した。会話はなくても笑顔で、その時に初めて笑顔を見た。(担任)

① Aさんもこの学級の一人と伝え続ける

1年の時からどの担任も、Aさんについて学級でよく話していた。また同時に、子どもたちとAさんがつながるような活動もしかけていた。例えば2年時の担任は、係が決まるとそのメンバーにAさんのところに行かせ、係の仕事を伝えさせた。Aさんの保護者に了解を得て、係会はAさんの家でするようなこともあった。

また、3年の担任は、Aさんの席だけはずっと入り口の近いところにしていて、その意図を子どもたちに説明していた。

いつ来ても入りやすくしておきたいのでAさんの席は入り口の近くにしてほしいと子どもたちには言った。文化祭、運動会の時も子どもたちの方から、足を運んでくれた。(担任)

② 全員参加の野外活動の実施

Aさんは、秋の文化祭にも同級生たちの発表を見にやって来た。そして、その翌日子どもたちが、「せっかくAさんが来ていたのに自分たちの発表の後に呼べなかった。最前列で見ていたのに。せっかくだから全員で何かできないか」と言ってきた。保護者とも話し合っ、全員参加ならやるということで、野外活動を実施した。PTAの役員が後押しをしてくれて、全員が参加した。Aさんも楽しく参加ができた。



本人にはみんなが君を待っているよと伝わる機会になったのかも。(担任)

(2) 別室での登校を支援する

① みんなでAさんにかかわる

夏休みの家庭訪問等でAさんの変化に気づき、それにあわせて上級生のCさんがつなぎをしてくれたり、そして、いくつかの行事等の参加体験を経て、3年の秋には別室登校が定着してきた。

その時に、やはり教職員が意識したのは、家庭訪問でつながりを求め続けた時と同様に「みんなでかかわる」「情報を共有し、Aさんを理解する、変化を見逃さない」ということであった。登校してきたAさんの一日の様子を一時間ごとに記録し、次の時間の担当に渡し、最後に担任と生徒指導主事が見るようにした。

② Aさんの不安を理解する、Aさんの思いを引き出す

教職員のこれまでの観察や記録の共有から、Aさんは、集団の中でトイレに行くことや食事をすることに不安をもっていることがわかってきた。そこから、本人が集団の中で過ごすことの大変さに思いを寄せ、どうかかわれば不安を軽減できるのか、どう本人の思いを引き出していけるのかをそれぞれに考えていった。

i) 心をほぐす

心がけたことは、心をほぐす。あまり反応はなかったけれど積極的に話しかけて、Aさんのことを知ろうとする姿勢で対応するというか。自分のことも知ってもらうようにして。そうすると話してくれるようになっていった。(養護教諭)



ii) 自分で決める体験をさせる～次へのステップを生む～

学校に来ることが定着してきた頃、次のステップとして何を頑張ってもらおうかと考えた。本人に聞いてみるのが一番だと思い、いくつか並べて点数をつけてもらった。意外とこれって難易度低いんだとわかって、これからやってみると自分で決めることができた。(スクールカウンセラー)



- 〈Aさんに難易度をつけたもらった事柄〉
次の○の事柄を
100点…一番難しい、0点…一番簡単
として点数化する
- 制服を着て登校
 - お昼までに登校
 - 教室で授業を受ける
(何の教科でも、1時間でも)
 - 下駄箱で靴を履き替える
 - 相談室で給食を食べる

これらの事柄がいくつかできると次の事柄を提案し、難易度の点数をつけてもらった。周りが無理だろうと思っていることでも、本人はできると思っていることがわかったりした。そうして、難易度を確かめながらAさんに決めさせていくことでステップアップをしていった。

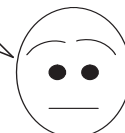
③ 進路に向かわせていくために

i) みんなで学習を支援する

教職員と言葉を交わしながら別室で過ごすことが定着した頃、担任のB先生は、学習をすることをAさんに提案した。それまでは、Aさんが来ると空いている人に対応をお願いしていたが、学習をするようになってからは、たくさんの教職員に担当の割り当てをお願いした。また、B先生は終礼として別室のAさんのところに行き、明日はどうかを一緒に決めておくようにした。

そして、学習を始めて1か月くらい過ぎたころ、本人から高校に行きたいけれどどうしたらいいかと聞いてきた。

自分や保護者は、通信制がいいかと思ったが、本人は全日制の高校がいいと言った。まずは本人の希望に沿ってやってみよう、それでだめだったらまた考えようということになった。(担任)



国語、英語、数学を中心に個別学習を行った。英語と数学は、プリントを用意してもらい、割り当てた担当と一緒に学習をした。国語は、パソコンで文章を書くということを行った。

小5から勉強をしていないので、英語と数学は難しかった。200枚プリントができたところで賞状を渡した。先生方に見てもらった。2回渡した。400枚はした。賞状なんてもらったことがなかったみたい。(担任)



ii) 自分をみつめる場をつくる

学校に来ない間ずっと向かっていたパソコンを国語の学習として使ったことが、Aさんが自分を振り返る機会にもなった。学校に来ると1日の様子をパソコンで打ち込んでいった。その中で、Aさんはあの時はあんな気持ちだったと記していたりもした。

本人には内緒でお母さんに見せて。コミュニケーションがとれなかった5年間のことがわかって泣かれた。あの時、本人はこんなことを考えていたんだって。(担任)



こうして、Aさんは、希望した高校へと進学していった。

3 保護者とつながり続ける、支え続ける

本人が何も語らず、Aさんの保護者は不安を募らせながらも、なんとかしていきたいという思いをずっともち続けていた。そんな不安や思いにこたえていくためにAさんが1年の時から、学校は、保護者と話す機会をたくさんもち、とにかくつながることをめざした。その中心となったのは毎学年の担任と3年間Aさんにかかわった支援員であった。

家庭訪問の仕方、プリントや通知票の渡し方等に、学校は配慮や意図をもって取り組んでいた。しかし、保護者には保護者の願いがあり、時に両者の思いがすれ違ってしまふことがあった。そこで、保護者にはきちんと説明することを心がけた。後からこんなつもりだったと言っただけでは、不信感をもたれてしまうので、何かを本人に提案する時等は、担任が本人に、支援員が保護者に同時進行で説明することもあった。

1年の時に担任と自分と保護者で正直に話し合おうと場をもったことがある。行き違っても始まらない。保護者は学校に対する不満や不安を腹の底から言われた。ずっと学校に行っていないことに不安を大きくしておられた。一生懸命に聴くしかなかった。そうすると学校の話も聞いてもらえた。この時から、学校は誠実にやろうとしてくれていると、保護者に思ってもらえた。後から言ってもだめ。その都度ちゃんと説明をしてわかってもらうことが大切だった。(支援員)



【考 察】

○ 本人との関係づくりの工夫

～わかりたい、育てたいという思いから～粘る・継続していくこと～

かかわる際にどの教職員も「この子はどんな思いでパソコンばかりを見ているのだろう」「表情を変えないけれど苦しくないのだろうか」いつもAさんのことをわかりたいと思っていた。また、かかわりの糸口が見いだせない時でも、教職員はAさんのところに通い続けて、変わらずに「あなたに関心があるよ」と粘り強く伝えている。

これらのことは、Aさんが学校には信頼できる人がいる、安心な場所かもしれないと思えることにつながったと思われる。登校に向けての大きな基盤となったと思われる。

また、語らず、表情を崩さないAさんに対して、心を動かしてやりたいと思って次々と生み出されたかかわりは、Aさんの心を揺らし、感情を育てることにもなったであろう。その耕しが、パソコンで言葉をつづりながら自分の内面を見つめていくという作業も支えたであろう。そして、高校に行きたいという思いを確かにするにもなったと思われる。

○ 支援の記録、情報の共有から、支援がつながっていった

家庭訪問時の様子、別室登校での様子が記録されており、それを教職員みんなが見ることができるようになっていった。Aさんの変化を細やかにとらえていくことができ、対応もAさんのその時に即したものが生まれていったのであろう。

また、動きが見えないAさんを担任が一人で支えていくことは難しい。そこで、複数の教職員が、それぞれの持ち味でかかわっていったことは、支援を途切れさせないことにつながったと思われる。そこには、記録等をとおしての共通理解が大きな働きをしたと思われる。

○ 登校を支える工夫～継続して、少しずつ子どもの力を高めていくこと～

学習から長期に離れていたAさんを学習へと向かわせ、また、ステップアップさせていくためにいくつかの工夫がされている。

Aさんの得意なことを生かした学習の仕方を提案する、学習意欲を高めるために賞状を渡す、緊張感をほぐす、自分にとっての難易度を踏まえて行動を選ばせる等、登校を支えるための工夫が継続して行われていた。

○ 保護者を大切にしている

家庭訪問では保護者が大変協力的であった。それは、学校が保護者の不安や願いを時間と回数をかけて聴き、関係づくりをしていたことが大きいと思われる。

○ 学級の一員であると伝え続ける

毎年の担任が、「Aさんは学級の一員」と伝え続け、また、子どもたちに担任の願いや思いをきちんと説明している。担任の正直な思いに子どもたちは、自分たちを信頼してくれていると思えたであろう。そのことが、Aさんを受け入れる気持ちにつながったと思われる。また、学級がオープンにされており、そのことも保護者が一緒にできることを探してくれる雰囲気につながったのではないだろうか。

「つながり続け、少しずつハードルを上げて登校へ向かわせる」 ～校内の支え、スクールカウンセラーとの連携～

【事例の概要】

中山間地の高校に入学して1ヶ月後から学校を休み始めたAさん。休みが長期になり、Aさんは、再度1年生から高校生活を始めることを選択した。担任がスクールカウンセラーと連携しながら、Aさんを少しずつ学校に近づけていった事例。

【取組の実際】

※以下はAさんの担任のB先生からの聞き取りを中心にまとめている。

1 Aさんの状況

Aさんは、中学校時代、運動部に所属して活動も続け、生徒会の役員もしていた。中学校3年生の2学期初めから休みがちになっていた。高校として、その情報は得ていたが、入学してから1ヶ月は登校していたため、うまくやっていけそうだと考え、少し手を離れたところから休みが始まったように思われた。

2 休み始めてからのかかわり

(1) 毎日の家庭訪問

学校に来なかった日は、B先生が家庭訪問を行った。登校しなくなってからは毎日家庭訪問をしている状況だった。

家庭訪問は、Aさんの負担にならないように、できるだけ短時間にした。しかし、関係がきちんと続くように、毎日顔を見せて関係をつないだ。Aさんは、家に行くと顔を見せてくれた。

学級のメンバーからの休んでいるAさんにあてた手紙を持っていった時は嬉しそうだった。

(2) 友だちにサポートを依頼

B先生は、Aさんの仲のよい生徒数人に、Aさんの家に行ってみてと声をかけた。どの生徒も快く引き受けてくれた。今日学校でどんなことがあったかということと、次の日の時間割を伝えてもらった。

この子どもたちがいてくれたことで、学校へ行っても受け入れてもらえるとうAさんが感じる状況があったと思われた。

(3) スクールカウンセラーにつなぐ

保護者からの電話で、Aさんの様子がわかった。登校させようとするとう、涙が出るとうのことであり、B先生は、「ああ、無理させてはいけないな」と思った。制服に着替えようとするとう体調が悪くなるとう。運動能力の高いAさんなので、高校入学後に入った部活動でも期待をされてい、それもプレッシャーになったのではとうことも考えた。

B先生は、保護者に少しでも楽になってもらいたいとう考え、スクールカウンセラーによるカウンセリングの予約を入れた。

(4) 少しずつハードルを上げて

B先生とスクールカウンセラーは、Aさんにどのようにかかわっていこうか話し合った。その中で、Aさんを段階的に学校に近づけていこうとう方針をたてた。

まず、家から100メートル先にある店の前で会うこととした。Aさんは、1回目は来ることができなかったが、2回目には来ることができた。次は、より学校の近くで会うこととした。それができたら、次はもう少し学校の近くで会うようにした。

本当に少しずつ少しずつ、Aさんが学校に近づいてくることができるようにした。

Aさんも、スクールカウンセラーの面接を受けたが、それも、まずは学校外の場所で会い、それから学校の相談室にした。人の目が気になるAさんだったが、この相談室に何とか入れ、スクールカウンセラーと面談することができた。その翌日から相談室で自習ができるようになった。

2週間に一度という登校が、連続して午前中登校できるようになり、今度は学校の滞在時間を少しずつ延ばすようにした。

しばらくして、Aさんは、初めて弁当を持って登校した。その日から、弁当はB先生と二人で食べた。先生は、自分の家族のことなど何でも話すようにし、Aさんはそれをにこにこして聞いていた。

3人の友だちと一緒に食べられるようになるまで3ヶ月ほどかかった。

スクールカウンセラーからは、「日中の生活がしっかりできるように。人との交流を多くするように。休み明けは、休む前にできていたことが継続できるように」というアドバイスももらった。

学校は、子どもたちの成長の場だと思っています。Aさんが学校に来て何らかの成長の手助けをしてやりたいと思っていました。

欠席している時、何とか学校とつながっていることを意識させたかったし、むりやり来させることでAさんが不安にならないようにと思っていました。安心安全な場を提供できるようにと思い、「無理に教室にあげることはないから出ておいで」と話していました。（担任）



また、Aさんは、朝は学校に行くことに対して葛藤する時間があり、その時体調が悪くなることを訴えていたので、乗り越えなければいけないその時間に、B先生に電話をかけさせるようにした。電話をかけることによって一山越えてくれればという思いだった。これは、教頭先生と、Aさんの対応を話し合っていたときに出てきた考えだった。電話があった時は、「調子がよかったら出ておいで」という声かけを常に心がけていた。

教頭先生とB先生は、専門機関にAさんの対応について相談し、この電話のことや家庭訪問のこと、学級のメンバーからAさんに手紙を書くことについてアドバイスももらった。

（5）Aさんと学級にお互いのことを伝える

B先生は、Aさんが学校を休んでいる時も、教室で折に触れAさんの現在の状況を話していた。

また、Aさんに学校とつながっているという気持ちをもってもらおうと考え、教室の様子や球技大会、学園祭の様子を伝えて、Aさんに学校のことがわかる状況をつくっていった。

（6）記録をとる

B先生は、家庭訪問をした日や時間、Aさんが相談室に登校した日や時間等を、記録していった。その記録を見ると、Aさんの状況や気持ちの理解ができ、ここで無理をさせてはいけないなどの判断ができた。

3 次の年度に向けて

（1）進級について話す

Aさんは、学校に来るようになっていたが、最終的に進級はできなかった。B先生は、いつそのことをAさんに話したらよいか考えた上で時期を決め、Aさんに話した。

Aさんには高校卒業後の進路の希望があったので、高校は卒業したいという目標があった。B先生は、それを受けて、他の学校に移ることも含め、現在の学校に通うための条件の提示や選択肢を示した。どの進路を選択するか、Aさんが自分で決める事が大事だと考えていた。

Aさんは、進級できないということを知り、一度は気持ちが落ちたが、スクールカウンセラーのカウンセリングがすぐにあったこともあり、気持ちを立て直し、前を向いて1学年下に下がってでもがんばってみようという気持ちになった。Aさんが自分で決めたことだった。そして、相談室で自習をしながら春休みを迎えた。

(2) 教室に行く

B先生は、春休みの最初の日、Aさんを誰もいない教室に誘ってみた。教室に入ったAさんは、「入れますねえ」と言った。その言葉から、Aさんは、教室に入ることに對して恐れや不安をもっていたことがわかった。しかし、新学期を迎える前に教室に入ることができ、Aさんは安堵感と自信を感じたようであった。

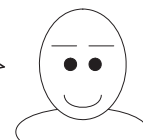
そして、次の年度、1年生として、もう一度高校生活を始めた。

4 担任を支える校内体制

(1) 管理職の支え

B先生は、Aさんについてどう対応したらよいかということを経頭先生によく相談していた。家庭訪問をしたいと言うと、「行ってきたら」と温かく声をかけ、送り出してくれた。

「こうだと思うんですがどうでしょうか」と尋ねると、「いいんじゃない」と肯定的な意見を返してくださることが多かったので、自分でやって試してみようと思えたのだと思います。(担任)



(2) ケース会議・校内委員会の実施

少人数でまずケース会議をして、どんな支援をしていこうか話し合った。できることをやってみよう、何かいいかわりはないかと考えた。

また、特別な支援を受けるためには、校内委員会で審議することが必要であり、今後の支援を検討して実施した。

【考 察】

○ つながること・関係を切らさないことを大切に～学校を安心・安全な場に

B先生は、学校を休んでいるAさんに、毎日家庭訪問をしている。その家庭訪問は、Aさんを登校させるという意図のもとに行われたのではなく、Aさんの気持ちの負担にならないように、しかし関係が続くこと大切に行われていた。また、Aさんが休んでいる間も、学級でAさんの状況を話したり、Aさんにも学校の様子を伝えたりして、Aさんと学校のつながりを切らさないようにした。このことは、不登校の子どもへの対応の基盤となることであり、関係のない中で登校だけを促しても子どもの登校には結びつきにくいと思われる。

また、B先生は、Aさんの登校に関して無理をさせることはしないようにしていた。Aさんが「学校は安心できる場所」と感じられるようにしたことが登校への出発点になっていた。

○ 学校に近づける工夫をする～しっかり寄り添いながら少しずつハードルを上げる

B先生は、スクールカウンセラーと連携し、Aさんを学校に近づける工夫をしていった。家から学校まで、Aさんが動く距離を少しずつ伸ばし、自信を得させてからその距離を伸ばして、学校まで来ることができるようにした。学校にいる時間も、少しずつ増やしていった。そして、そのプロセスに、B先生が精神的にも時間的にもしっかりと寄り添い、Aさんの歩みを確実なものにしている。スクールカウンセラーの面談も大きな力となっている。

そのような歩みがあったからこそ、Aさんは、進級できない事実を受け入れ、自分で次年度に向かうことを決めることができたと思われる。

○ 担任を支える学校体制がある

B先生は、Aさんの対応について、教頭先生によく相談したり、校内のケース会や校内委員会で話し合ったりしていた。不登校の子どもを担当する先生を校内で支える姿勢や体制があった。

2 「感情のコントロールが難しく、 場に応じた言動がとりにくい 児童生徒への対応」

事 例 名
2－（１） 小学校 「不安が強く、集団の中でパニックになってしまう児童へのかかわり」 ～子どもたちを愛おしみ、大切に丁寧に育てることが紡ぎ出すもの～
2－（２） 小学校 「見通しをもちにくい子どもへのかかわり」 ～保護者との連携、学級づくりを通して～
2－（３） 高等学校 「あらかじめ特性を理解し、きめ細やかな対応を行う」 ～子どもが安心できる方法を考え、居場所をつくる～

※2－（１）（２）は、学級集団づくりの実践でもあります。



「不安が強く、集団の中でパニックになってしまう児童へのかかわり」 ～子どもたちを愛おしみ、大切に丁寧に育てることが紡ぎ出すもの～

【事例の概要】

保育園通園時の様子から集団に適応しにくいのではと思われたAさん。やはり小学校入学時より集団から外れた行動や友人とのトラブルが見られた。担任となったB先生は、入学時より支援員のC先生と協力してAさんにかかわり、Aさんは、集団で活動することにも楽しんで参加できるようになった。また、Aさんと他の児童をつなぐ中で、低学年の集団を育てていく工夫も見つけていった事例。

【取組の実際】

※以下は、担任の先生(B先生)、支援員の先生(C先生)等からの聞き取りを中心にまとめている。

1 入学当初のAさんの姿

(1) 入学当初の姿

Aさんについて、保育園との連絡会議の時から、「集団行動ができない、表情がない、席に着けない」等と様子を聞いていた。小学校としては、Aさんの入学にあわせて、支援員のC先生についてもらい、B先生と二人体制で1年生を受けもっていくこととした。

Aさんは入学して2日目から、保育園の先生が言うような姿を見せるようになった。

席に着けないし、右というわざと左を向く。大人が言うことをわざとしない。好きな勉強は算数、嫌いなのは国語、道徳。その時になると席に着けなくなるし。「わからない、知らない。書かない。必要ない」と言う。床にごろごろ寝ころんでばかりで。(B先生)



(2) 担任としてのあせり、周囲の子どもたちの反応

Aさんは指示したことに従わず必要がないと言ったりするので、B先生は、自分のこれまでのやり方を否定されているような感じさえたと言う。

また、周りの子どもたちは、幼い頃から一緒に過ごしているので、「Aちゃんはやさしい」と思っており、Aさんに本気でかかわっていくことはなかった。B先生はそんな姿を仕方ないと思いつつも寂しく感じていた。

担任として、あせりを覚えた。怒ることが増えて。校外活動では、道路を引きずるように連れて行った。三百メートルが何キロにも思えてつらかった。(B先生)

(3) 5月にケース会を実施～方針を見つける～

5月になって、B先生は校内の教職員にお願いしてケース会を開いてもらった。

その場に出てきたのは、「無表情なAさんはしんどいだろうね」という声だった。そして、「できないことばかり言われる保護者もつらいだろう」という声だった。

そして、ケース会で確認されたのは、「まずは保護者とつながろう、そのためにはAさんのよいところをたくさん見つけて、保護者に伝えていこう」ということであった。

また、B先生は、AさんがC先生といると落ち着いていくことを感じていた。

4月は本当にしんどくて。私がいしんどくてケース会を開いてもらいたかった。(B先生)



C先生はいつも笑顔。待つでできたなら認めてあげる、それをずっと繰り返しておられた。ちょっとできたなら本当にほめておられた。ちょっとできると「できる、できる」「大丈夫、大丈夫」と言っておられた。これはAさんだけでなく、他の子どもたちにも同じようにしてくださっていた。(B先生)

B先生は、C先生のかかわりを見ながら、怒ることよりもAさんができていることを見つけて、それを認めながら伸ばしていくことを優先しようと考えた。

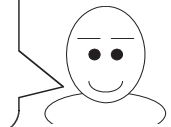


2 Aさんを育てていく

(1) 保護者とつながっていく

5月には家庭訪問があった。B先生はケース会で確認したとおり、悪いことは伝えず、Aさんのよいところをたくさん伝えた。

家庭訪問の時、嫌な顔をしてドアを開けられた。何を言われるんだろうと思っておられた。でも、笑顔でよいところを伝えた。そうすると中に入れてもらえた。お母さんは、「うちの子がそんなことができるの」と言われたけれど、途中からは自分の方から「こんなことがうまい」と言ってきた。あの子はキャラクターを描いたりするのがうまい。それはお母さんが教えてくれた。(B先生)



家庭訪問以降もB先生は、連絡帳にAさんのよいところをいっぱい書くようにした。するとお母さんも日々の生活の中で、こんなことができたと書いてくれるようになっていった。そうするとAさんの得意なこともわかってきた。

(2) Aさんのしんどさを理解する

B先生とC先生は、Aさんのしんどさはどんなところにあるのかと二人で話しては考えた。その中で考えたことは、次のようなことであった。

- ・ 相手の立場に立って考えられないので、トラブルが起きてしまうこと
- ・ トラブルがあっても無表情のまま、絶対に泣かないでぐっと我慢してしまうこと
- ・ 自信がなくて自分は何をやっても駄目だと思っていること
- ・ 完璧にやりたくて、見通しがもてないと不安になってしまうこと

このような不安やしんどさを泣かずになんとか我慢しようと思って、Aさんは床で寝転んでしまう。寝転ぶ姿は、不安やしんどさの発信であると思えた。

(3) Aさんを育てていく～しんどさを少しでも和らげてあげたい～

Aさんのしんどさや不安をどうしたら軽減してあげられるのかと考えながら、B先生とC先生はさまざまな取組を行った。



① かかわり方を教える、相手の立場に立つことを体験させる

ある時、Aさんは友だちを押してしまう。それを見ていたB先生は危ないので、Aさんを強く叱った。しかし、Aさんは縮こまってしまったものの、「自分は平気だよ」と言い、「僕はやられてもいい」と言う。そんなことが度々あった。

そこで、B先生はトラブルがあると、相手の子に「今どんな気持ちでいるか」を言わせるようにした。すると、今まで

この子は相手の立場を考えた体験がないのかもしれない。みんなも遠慮してこの子に何も言わなかった。本当に相手のことがわからないのかもしれないと思った。
(B先生)

はどうせAさんに言っても駄目だと思って遠慮していた子どもたちが、具体的に「ここが痛い」等と言った。そうするとAさんは謝らないといけないとわかるようになった。

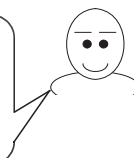
② 感情を見つける～相手の立場に立って考えられることへ～

①のような取組にあわせて、B先生は寝転んで不安を表すAさんに「今はしんどいんだね」等と声をかけ、気持ちを言葉と結んではその苦しさをわかってあげようとした。そうしていくうちに、無表情で何があっても黙って我慢していたAさんが、2学期になると徐々に泣くようになった。友だちとトラブルになった時や、友だちが泣いていたりすると泣くことがあった。

感情が豊かになってきた。無表情だったのが、何を考えているのかわかるようになった。そうすると泣いていてもかわいい、なんかしんどいと伝えているって思えた。(B先生)



泣いてはいけないと思っていたみたい。泣くことをしなかった。図工の時にすごく泣いたことがあって、その姿を人に見られてしまって。感情を出すということのきっかけになった。あれ以来本人も楽になったように思う。(C先生)



③ 認めていく・得意なことを見つけて生かす

Aさんは、絵を描くことが上手だった。しかし、何を描くのか決められなかったり、ちゃんと描けないと描きかけの絵をぐちゃぐちゃにしてしまったりした。



Aさんは自分を認められない。認められるためにちゃんとしないと嫌。それで苦しくなっていた。(B先生)

そこで、B先生は、お母さんから聞いていた「キャラクターを描くことが上手」を生かして、Aさんが考えたキャラクターをシールにしたところ、みんながいいなと言ってくれた。そこで他の子どもたちも自分でキャラクターを考え、それぞれのシールを作った。Aさんから発信したことが、他の子どもたちの楽しみにもつながり、Aさんが認められる機会になった。

また、絶対に正解であるという確信がないと、発表をしたいのにできないAさんであった。そこで、教室の前に立つB先生が集団に指示を出し、C先生が後ろから子どもたちの様子を見ていて、Aさんができているとなるとサインを送った。そして、B先生がAさんに聞いてみて、発表ができた。みんなからできないと思われていたAさんであったが、認められる経験が増えていった。

歌もうまい。私一人では見つけられないことをC先生が、たくさん見つけて教えてくれて。それを明日みんなの前で言おうといつも話していた。友だちからすごいと言われてもらえることがすごくうれしそうだった。(B先生)



④ 見通しをもたせる

Aさんが床に寝転んでしまう場面を考えていくと、全校での活動が多いことがわかった。やったこともない遊びや活動、教室から場を変えての活動は、予想もつかないことが多く、それでAさんが不安になっていることがわかってきた。

そこで、B先生は全校での活動がある時は、することを1から4くらいまで書いて、「こんなことがあるけれどどこまでやる」とAさんに聞くようにした。2と答えていたのに参加すると、4までできることもあった。

3 個と集団を見ていく～B先生（担任）とC先生（支援員）の二人三脚で～

B先生とC先生は、よく話をした。そして、子どもたちの前に立つ時、お互いの役割がきちんと分担できるようになっていった。

B先生は、全体の指示を優先させ、Aさんの不安にはC先生に寄り添ってもらおうようにした。A

さんにかかりきりになって、他の子どもたちを待たせてしまうことがないようにした。B先生が全体をリードし、C先生が不安を出している子、困っている子を後ろから見つけていった。

本当にC先生に感謝している。自分を見てほしい子が多い。できると思われている子もそう。私が誰かにかかわっている時に、今一番必要な子を後ろからよく見てついでくださる。子どもたちは安心する。それでこちらも安心する。笑顔でいられる。余裕がある。それが子どもたちにも伝わる。いい循環が生まれている。(B先生)



4 Aさんの変化、子どもたちの変化～Aさんの成長、周りの子どもたちの成長～

学期が進むにつれてAさんは、感情表現が豊かになり、活動意欲や相手意識が見られるようになった。また、Aさんに対してどこか我慢していた周りの子どもたちも、一緒にトラブルについて考えたり、乗り越えたりする中で、成長していった。

また、B先生は、自分自身がAさんに楽しくかかわれるようになったことも、子どもたちによる影響を与えたのではと考えた。

私自身が、Aさんとかかわることが楽しくなった。周りの子もAさんがいることで楽しくなることがあった。私が楽しくなったら、Aさんの活動意欲も出てきた。相手意識が出てきた。すごく楽しい学級になってきた。涙が出るような学習発表も見せてもらった。あの子たちは本当にかわいい。(B先生)



5 二人の先生を支えたもの

B先生は、「苦しい時もあった」と言い、C先生は「自分は甘やかしているだけかなあと思うことがあった」と言う。そんな二人にとって職員室でいろいろな話ができただことは大きかった。

- 撃沈するようなことがあっても、みなさんが聞いてくれる、出せる職員室。全部聞いてもらえる。そうするといろんな人がアドバイスをくれる。(B先生)
- 甘やかしているのかなあと言った時、「Aさん、成長しているじゃない」と言ってくださる方がいて、頑張れた。(C先生)
- B先生もC先生も子どもが好き。子どもが悪いなんて決して言わない。「子どものためになんとかしたいから助けて」と隠さずに言うから、周りもなんとかしてあげたくなる。(研究主任)

6 B先生が見つけた低学年の子どもたちを育てる工夫

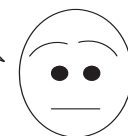
B先生はAさんとのかかわりを考えたこの1年での学びが、翌年新しく担任した1年生の学級経営にも生きたと言う。



(1) 行動については叱る、そして、周りには「気持ちは理解してね」と言い続ける

B先生は、Aさんのしんどさは理解しつつも、間違っただ行動については叱っていた。同時に周りの子どもたちには、「怠けているのではなくてしんどくて不安なんだよ」と言った。この対応はどの子にもするようにしている。誰かを特別扱いすることは、その子を周りの子から遠ざけることにもなるので、どの子にも同じように接することを大切にしている。

B先生は、子どもたちの苦しさを言葉にして分かってあげながら、でも、この行動はダメと繰り返し言っている。子どもたちは大切にしてもらっているから、怒られてもちゃんとわかろうとする。(C先生)



(2) 関係性の中で学ばせる、感情を育てる～相手の立場に立つこと・言葉にすること～

低学年の子どもは、友だち同士の関係の中で自己中心的なことがまだ多い。そこで、B先生はト

ラブルがあった時は、まずは互いの話をできるだけ聞く。そして、最後に必ず「なぜ相手の子は苦しかったと思う」と考えさせ、言葉にさせるようにしている。できるだけ相手の立場に立って考えさせるようにしている。

また、学年の始めの頃は、子ども同士の間でトラブルがあると、みんなの前に出して、周りを待たせて考えさせ、みんなで学ぶ場としている。

「みんなに起きることだよ」と言うと、みんなちゃんと考えてくれる。相手の気持ちを考えようとしてくれる。そうして感情も育っていった。真剣に向き合うと応えてくれる。(B先生)



(3) 行動の意味を教える

B先生は、低学年の子どもはすぐにごめんなさいと言ってくるが、なぜ謝るのか、謝ってどうするのがわかっていないことが多いと感じていた。そこで、誰が困るのか、誰に謝らないといけないのかを筋道を立てて説明するようにし、行動の意味を考えさせるようにしている。

忘れ物をしても先生は困らないよ。謝ってもらわなくてもいいよ。困るのは自分だよ。どうすればいい？ちゃんと教えてやるとわかる。わかると頑張る。(B先生)

【考 察】

○ 本人に関心を寄せて理解することで生まれた、適切なかわり

Aさんに対して、何が苦しいのかと肯定的な関心を寄せて理解したことを基盤にして、かわりが生まれていった。また、複数の教職員でAさんについてたくさん話して、そして考えている。そのことでAさんの理解が広がったり、深まったりしていた。

○ 感情と言葉を育てることで、子どもの力を高めている

感情を言葉と結びつけていくかわりを、日々丁寧に根気強く行っている。そのかわりが、気持ちを押し込めて苦しくなっていたAさんの感情を育てることにつながり、相手の立場を考えて行動するという、集団に適應するための力を育むことにもなっていた。

感情は受けとめてもらって、言葉で他者に共有してもらって、豊かにもなり、コントロールもできるようになるのであろう。また、自分の感情を味わってこそ、相手の感情にも敏感になることができ、他者理解へとつながっていくのであろう。このことが根気よく実践されていた。

○ 子どもたちにとって何が必要なかを明確にしてきちんと教える

場面をとらえて丁寧に具体的に、子どもたち自身に考えさせ、言葉で説明させ、感情、言葉、行動が育っている。わかりやすい言葉で、ぶれることなく繰り返し必要なことを伝えていく、このことが、低学年の子どもたちに、適切な行動を定着させることにつながっている。

○ 職員間のコミュニケーションが生み出す力

B先生とC先生が常にコミュニケーションをとりながら、お互いの立場や持ち味を生かしてかわっていったことが、二人の気持ちに余裕を与え、そして、子どもたちの対応にも好影響を与えるという循環を生み出していた。また、職員室で弱音が吐けることで、支援が練られていくことがあった。職員間のコミュニケーションが充実していることが、実践を大きく支えていた。

○ 保護者の苦しさをわかろうとする

「保護者は苦しいだろうなあ」と思うところから、Aさんへの支援が始まっていった。また、保護者の協力を引き出していくことにもつながっていった。

○ 愛おしんで育てる気持ちで子どもたちの前に立つ～かわりのモデルになる～

Aさんだけでなく、どの子どもも平等に「愛おしんで育てる」。この気持ちが終始実践に貫かれている。また、この気持ちが、子どもたちがいろいろ課題に向かっていく意欲を支えていた。

B先生とC先生は常に笑顔で子どもたちに接している。この二人の先生の姿は、人へのかわりのモデルとして、子どもたちに映っているのではないだろうか。

「見通しをもちにくい子どもへのかかわり」 ～保護者との連携、学級づくりを通して～

【事例の概要】

小学校4年生の学級。3年生のときに、保健室登校をしていたAさんが転入してきた。Aさんは、気にかかることがあると活動に参加できなくなることが度々あった。

担任が保護者と相談しながらAさんにかかわり、また、この学級の子どもたちがAさんを受け入れていくことによって、Aさんはだんだんと登校しづりが減り、学級の中でみんなといっしょに生活を送れるようになっていった事例。

【取組の実際】 ※以下は担任の先生への聞き取りを中心にまとめている。

1 Aさんへのはたらきかけ

(1) 保護者との面談

春休み中に、所属していた学校からいろいろと話を聞いたり、以前Aさんにかかわっていたスクールアドバイザーにも本人の様子について聞いたりした。そして、Aさんの保護者からも話をしたいと学校に連絡があり、会うことにした。

もうお母さんは思いがあふれている感じで、ここまでつらかったことを2時間くらいしゃべられた。私はただただお聞きするだけだった。ただただ「お母さんつらかったですねえ…」「お母さん大変でしたねえ…」と、それが精一杯でした。
お母さんよくがんばられたと思って…。(担任)



担任は、保護者が日々抱えている思いに寄り添うところからスタートした。そして、お互いにだんだんわかり合えるようになっていったところで、「本人にとっていい方法をいっしょに考えましょう」という姿勢で臨んでいった。

(2) 動けなくなるAさんとかかわって

〈音楽の時間〉

4年生最初の音楽の時間。授業にすんなり入ったように見えたAさんだったが、授業が始まると突然かたまって泣き出した。

担任が話を聞いてみると、みんなとリコーダーの色が違うということがいけなかったと話した。その時間は部屋を出て、ずっと泣いていた。「あ～こういう状況になるんだ」と担任は思った。

この後、担任は少し時間をとってAさんの話を聞いた。

次の体育はたまたま合同体育で、他の教員がやってくれましたので、Aさんと話をすることができました。聞くと、リコーダーの色が違うとか、去年不登校だったからリコーダーができるかどうかわからんとか、体育はいきなり100M走だけどみんなより遅いかもしれんというのが気になるとか、いろいろ話してくれました。「あ～いろいろ困ってること言えたんだねえ、じゃあ今日はどうするかなあ～」と言ったら「やらん」と言うので、「じゃあタイム測定の仕事を手伝ってくれる？」って言ったら「やる」と言うから遅れて100M走のところに行って参加しました。(担任)



担任がAさんが動けなくなったそのときに、ゆっくり向き合うことで、Aさんも自分の気持ちを素直に話すことができた。

〈水泳の時間〉

水泳は、Aさんにとって以前から大きなつまずきの原因になったものであった。

担任は、専門機関に「水泳の途中の過程を明確にするようなスモールステップやプロセスを示すようなものを用意して、前もって提示したらどうか、そしてAさんが取り組みやすい個人目標を設定してみるのはいかがでしょうか」と助言をもらい、水泳の学習の内容を具体的に示すカードを作った。また、母親に「Aが困難なのは、着替えてから教室に帰ってくるまでの1時間の流れがはっきりしないこと」と教えてもらい、まず、「教室で着替えます」「並んでプールに行きます」「上ズックを脱ぎます」「トイレを済ませます」「タオルをフェンスにかけます」というような提示カードを作り、Aさん、母親と三者で打ち合わせを行った。

Aさんが、「いや、ここでは靴は脱ぎたくない」などと言うことは可能な範囲で認め、現地へ行ってリハーサルも行った。これはAさんの希望によるものだった。

リハーサルをしたことで、Aさんも水泳の授業に参加することに納得し、水泳は驚くほど順調だった。

〈行事のときに〉

運動会の競技にしろ、応援合戦にしろ、とにかくAさんはリハーサルを必要とした。「こうやれば自分はできる」という確証をつかむと安心して活動に取り組むことができた。

綱引きも、前日に「この綱だよ、これぐらい力を入れたらこれぐらい引けるよ。」と担任がいっしょにやってみると、「ならやる」と言って、次の日は安心して参加した。

音楽会の練習も「ひな壇のここに立つよ」「ここで入場して、ここで退場して、ここでリコーダーを吹くよ」とリハーサルを行うことで、これまで参加できなかった音楽会に全部参加することができた。

2 保護者との連携

担任は春休みの面談の中で、「Aは学校生活のどこにつまずくのか知りたい」という母親の思いを知り、4月は毎日母親に学校の様子を伝えた。それが担任自身の安心感にもつながっていた。

お母さん、Aさんがつまずいたことに対して、すごく上手に対応してくださるんです。できなかったことは家でAさんといっしょに練習してくださるし、とにかく一生懸命なんです。だからお母さんに「頼ります」って言いました。「お母さんにそういうアイデアを出してもらったおかげで今日は図工ができました」って報告してました。だんだんと自分もAさんが困難なことが分かってきて、「お母さん、明日のこれどうしましょう」って、電話での報告といっしょに次の日の相談もしてました。だから、授業で固まってしまうことはあつたけれど、学校を休んだり、遅れたりすることはありませんでした。（担任）



Aさんの母親はAさんがどこで抵抗を感じるかよくわかっており、担任が連絡を密にとることでいっしょに対応を考えることができた。

3 専門機関との連携

スクールアドバイザーの勧めによって、Aさんは以前から専門機関に通っていた。Aさんはそこで週1回、セラピーを受けていた。

担任もこの専門機関に足を運び、WISC-ⅢやK-ABCなどの検査の結果をもとにいろいろなアドバイスも受けた。そして、水泳時の助言や活動時に配慮すべき点等をAさんに対して行っていた。

4 学級づくり

(1) みんなに話す、問いかける

日々の生活の中で、Aさんに対してだけでなく、他にも特別な配慮をしなければならない場面がいくつもある。担任はそのときの状況や、なぜ〇〇さんだけが許されるのか、そうしてもらってできるようになってうれしい〇〇さんの気持ちなどをきちんとクラスみんなに説明した。みんなに分かってもらう努力をしていた。

〇連絡帳を書く時間がなくなると、パニックを起こして連絡帳を捨ててしまう子に対して

- みんなに「なんで〇〇さんは連絡帳を書けなかったのかな？」と問いかける

(子ども)「きっと丁寧に書きたかったけど、書く時間がなくなったから腹が立ったんだと思う」

(子ども)「うんうん、そういうことってあるよね」

(担任)「じゃあ、書けなくていらいらすることがあっても、『悪かったねえ』って言ってあげるか」

そして、

- 「書けなくていらいらしたときにどうしたらいいだろうか？」と問いかける

(子ども)「書いてあげる」

(担任)「なるほど、それも一ついい手だねえ」

と、次の作戦まで考えさせる。

(2) 見つけてその場でほめる

クラスの中には困難を抱えている子どもに対して手をさしのべてくれる子が必ずいる。その子を見つけてその場でほめる、するとその子がモデルになっていくと考えた。

例えば…

- 〇 本を指さして読む子どもには、その子が困ったとき、隣の子が教えてくれる。

それを見つけて、「〇〇さんはあのそっとさりげなく教えるのがいいよね」とみんなの前でほめる。

- 〇 Aさんが、朝日直にスピーチができないときも、もう一人の日直の子が「こんなこと言ったら」とか、耳打ちしてくれる。

その子に「ありがとう、助けてくれたね」と伝える。

こうやって困ったときの助け方が広がっていく。

朝、Aさんと遅れて教室に入るときも誰もそのことについて何にも言わない。あんまり遅いときは自分たちで勉強を始めている。Aさんがなかなか教室に入れなかったときもみんなに話をした。「今日はこうこうでなかなか入れなくて、でもみんなが待ってくれてうれしかったわ」というと、みんなが「当たり前じゃん」みたいな顔をする。

するとAさんがさっと入ってきて、自然にとけこんでいく。

担任は「私が何をしたというより、この子たちがいたからです。」と話した。

このような日々の積み重ねが、だれもが居心地のよい、学級をつくっていった。

5 Aさんの成長

(1) 周りに合わせる

あるとき、Aさんが登校をしぶった日があった。担任が朝、車で送られてきたAさんを昇降口まで迎えに行き、いっしょに廊下を歩きながら「どうしたかねえ〜？」と聞くと、Aさんは「図画展の作品をがんばって描いたのに自分が入選しなかった。それがいやだった。昨日の結果発表のときは自分の心とはちがう笑顔をつくって拍手した。それが昨日いやなことだった」と話した。

結果的に次の日、登校をしぶることになったのだが、「心とはちがう笑顔をつくって拍手」できたことはAさんの大きな成長だと思った。

お母さんとは電話で、「世の中生きていくのにこういうことありますよね、一生懸命絵は描いたけどコンクールで報われなかったってことありますよね。Aさんはここでまた一つ経験して、人生生きていく上でそんなこともあるさってという経験を一つされたから、まあいっしょに乗り越えましょう」と話をした。

(2) 友だちの中へ

休み時間はいつも担任のそばにいたAさんが、教卓から離れて友だちと遊びに行くようになった。

Aさんが友だちの中へ入っていきたくきかけとなったのが、専門機関で教えてもらった折り紙であった。それが「おもしろい！」と言って寄ってきた子どもに、Aさんが教えてあげることができるようになったことが大きかった。

友だちとおにごっことかして遊んでいるとAさんにとっていやなことがいっぱいあると思うんですよ。自分だけタッチされたとか、変なことという人がいたとか、自分だけ足が遅かったとか…。でもそれを経験しても大丈夫だということは、それはすごい進歩だと思います。一つ乗り越えたんだなと思います。やっぱり友だち付き合いは大事。(担任)



【考察】

○ 保護者とつながる

担任は最初に、母親の抱えている思いに寄り添った。2時間、だだひたすらに母親の話を傾聴した。そのことによって、母親は担任への信頼感をもったことであろう。そして担任も、母親に協力を求め、アドバイスをAさんの対応に生かしていった。

そうした、担任と保護者の相互の信頼感がAさんの成長に大きく影響した。

○ Aさんのありのままを受け止め、丁寧に対応する

担任はAさんの思いをや考えをいつもきちんと聴き、受け止めていた。そして、Aさんの抵抗を軽減するため、事前説明やリハーサルなどを行い、Aさんに成功体験を積み重ねていくことができた。

こうして、Aさんが朝登校をしぶったときも、迎えに出てきた担任に、Aさんはいやだったことを素直に話しながら、教室に向かって歩き出すことができた。

○ 学級の子どもたちのかかわり

学級の子どもたちがAさんだけでなく、困っている学級の友だちをしっかり支えていた。これは担任が、子どもたちに語りかけ、問いかけ、考えさせていくといった営みにより、学級の支持的風土や自治の力が育まれていたからである。

「あらかじめ特性を理解し、きめ細やかな対応を行う」 ～子どもが安心できる方法を考え、居場所をつくる～

【事例の概要】

アスペルガー症候群と診断されていたAさんが高校に入学し、学校に適応し充実した生活を送ることができるよう担任が中心となって支援した事例。

【取組の実際】

※以下はAさんの担任の先生からの聞き取りを中心にまとめている。

1 Aさんの状況

小学校の時にアスペルガー症候群と診断されている。一つのことに熱中する傾向があり、他の情報が入らない時があったり、不安が大きく新しい環境に慣れるのに時間がかかったりする等の特性がある。高学年の時にクラスで障がいのことを伝え、中学校でも周りの子どもたちが理解していた。高校では、本人の希望もあり、障がいのことについては周りの子どもたちには伝えたくないと考えていた。

2 入学の前に

(1) 事前に情報を得る

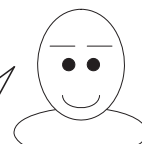
Aさんの出身中学校から、まず、学力検査の時の配慮について依頼があった。入学が決まってからは、Aさんには発達障がいがあるということ、保護者がそのことについて説明に行きたいと言っているという連絡が入った。

入学式前に、保護者が来校し、Aさんの障がいについて説明した。学校からは担任をはじめ4名がその話を聞いて、保護者と対応について話し合った。

中学校の情報を得てから、担任は、発達障がいについて学ぼうと考え、本やインターネットにあたってみている。

(2) 入学式の前にAさんと会う

まずは進級するようにしないといけないな、そのためにもまずは登校してもらうことを第一に考えないといけないなと思いました。(担任)



担任は、中学校の時と通学の方法も道順も変わるし、新しい環境になるので、一度体験してもらうことが必要だと考えた。そこで、入学前に、Aさんに学校に来てもらって、教室の位置や机の場所、体育館までの経路、選択教科の時の特別教室の場所等、全部一緒に回った。これは、保護者の安心にもつながるし、そのときに面識もできるだろうと思って行った。Aさんは、最初緊張していたが、何とか一緒に歩けた。

これは、2年生に進級する時に行った。春休み中に部活動のために登校していたAさんに、「今度登校してくる時の下駄箱はここだよ。教室はここ」というように一緒に歩いて説明した。

(3) かかわりの工夫

① Aさんと話す時に

担任は、Aさんに話しかけたり何かを伝えたりする時には、Aさんにわかるような話し方の工夫をしていた。「Aさん」と名前を呼んでから話し始めることや、「～しなさい」という言い方ではなく、「～します」という言い方をした。これは、保護者から聞いたことだが、ずっと意識して話していた。

Aさんは、話しかけても感情を表にあまり出さないのが、Aさんの考えていることが伝わりにく

かった。そのため、担任は、掃除や教室移動の時などにそばに行って話しかけるように心がけた。

Aさんの登校時間は早かった。担任も朝早く学校に行っていたので、授業前にAさんとよく顔を合わせ関係をつくることができた。

また、生徒面談では、自分から積極的に話さないAさんに、「勉強はどう？」などと漠然と尋ねるのではなく、「今、何の勉強をしてる？」と具体的に尋ね、「それは順調？」と詳しく聞くようにした。具体的なものがイメージしやすい質問をするよう心がけていた。

② 授業の時に

Aさんが、授業中に今何をする時間かが視覚的にわかるようなカードを作った。これは、1年生のどの学級にも置いた。いちいち「考えて」「ノートに書いて」などと指示を出さなくても、そのカードを黒板に貼っておくと、どの生徒にとっても見通しがもててよかったと思う。ただ、Aさんも高等学校の授業に慣れ、次第にこのカードの必要性がなくなっていった。

③ 行事や校外学習の時に

Aさんは、球技大会の時などは、時間も場所も流動的で動きの見通しがもちにくく、集団からはぐれてしまったことがあったので、担任が共に行動するようにし、何時からどこでクラスの試合があるかを文字化したり図式化したプリント（「サポーター計画」）を全員に配布した。

いつもと違う活動日程や、校外での学習の場所への道順や移動方法は、聞いただけではわかりにくかったので、計画表を渡したり、地図を示したりして説明した。うまくいかなかった時は、次に同様のことが起こったらどうするかを話し合った。

④ 他の生徒に対して

担任は、掃除の時などにAさんに話しかけていたが、教科の授業だけでは学級の生徒と話す機会が限られているので、掃除の時間は生徒と話すチャンスだと捉え、掃除に来るどの生徒にも話しかけるよう心がけていた。

Aさんは規範意識が高く生活も安定していたが、Aさんが混乱しないためにも、担任は、他の生徒への指導も一貫するようしていた。

Aさんに対する支援は、結果として、他の生徒にとっても細やかな配慮となった。

ずっとAさんと接していると、だんだんAさんの状態がわかようになってきた。
Aさんの調子がよくない時の反応もわかるようになってきて、対応もできるようになってきた。



（４）Aさんに定着していた力

Aさんには、周囲の人の動きを見てその動きについていくというスキルが身についていた。そのスキルがあるということは、集団生活をする上ではとても大きいことだった。Aさんも、小学校の時には、並んでいる人の列に割り込むということもあったそうだが、高校生活では、そのようなことはなかった。

また、わからないことは担任に聞けばいいという意識があり、実際に行動することができた。担任が話したことで不安に思ったことは、朝礼が終わって教室に担任が残っていると聞きに来たり、職員室にいると聞きに来たりしていた。校外で学習がある時や、急に予定が変更になる時にも聞きに来ていた。それをするので、問題となることが起こらなかった。そうやって聞くと生活していけるということを知っていた。

「学校は行くところ」という意識がAさんの中にしっかりとあったことも、支援をしていく上でプラスになったことだった。

小学校や中学校の時にAさんと同じクラスで、Aさんのことをよく知っている仲間がサポートしてくれていたこと、高校に入ってからクラスや部活動の仲間が穏やかな子どもが多かったということも恵まれていたことだった。友だちは、Aさんの特性を一つの個性として受けとめていた。

(5) 校内の体制づくり

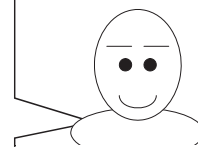
Aさんの障がいについて教職員に理解してもらいたいという保護者の希望を受け、4月の早い時期に職員会議で時間をとって説明した。高校生活において予想されること、あらかじめ知っておいてほしいことを文書にしたが、Aさんの特性やそれに対する対応、これまでの支援の経緯、保護者や本人の考え等を記し、何か気づく点があれば、担任または保健室まで連絡してほしいと添えた。

また、中間試験前に、教科担当の教員から授業中のAさんの様子を聞き取り、6月の職員会で連絡した。

その後も、Aさんの様子について発信していった。

入学時から、障がいがあることがわかっていたので、初めから対応でき、本人の不安を少なくすることができたこと、保護者の不安事項についても事前に話し合えたことがよかったです。

学校に安心できる本人の居場所があることが大切だと思います。(担任)



高校入学前に、障がいのある生徒についてわかっていた方が支援しやすいと思う。Aさんの場合、Aさんへの話し方など、中学校での対応を具体的に知らせてもらったので、高校で対応していく時に参考になった。対応の具体がわかってよかった。生徒の特性や困っていることについて、わかれば対処することができ、本人の傷つきや落ち込みを未然に防げるのではないかと思う。(担任)

【考察】

○ 受け入れる体制を整える

この高校では、中学校からの連絡を受け、保護者と入学前に会って、Aさんの特性の理解と対応について話し合った。この話し合いにより、保護者の願いを受けとめ、Aさんを学校全体で受け入れていく体制の第一歩が整えられたのではないかと。

そして、担任は、Aさんの特性について自分でも調べ、保護者からの情報をもとに、Aさんへのかかわりを開始した。

○ Aさんの特性を理解し、それに応じたきめ細やかなかかわりが継続されている

高校に入学したからには進級すること、つまり登校を継続することを目標に置こうと考えた担任は、新しい環境に慣れることに不安を抱くAさんに対し、入学前に校舎内を案内し、確認させることを行った。その後も、いつもの授業とは違う活動が行われる時は、前もって場所を確認させたり見通しをもたせておいたりすることを常に意識し、実行していた。このような担任のかかわりは、Aさんに安心感をもたせ、活動をスムーズに行うことにつながっていった。

また、Aさんに話しかけたり問いかけたりする時にも、Aさんが聞き取りやすく、答えやすいように工夫した。感情を表に出しにくいAさんによく話しかけるようにもした。担任は、他の子どもにも同様に話しかけており、どの子どもも大切にしている担任の配慮が感じられる。

授業においても、視覚的な支援として、今何をすべきかがわかるカードを用意した。結果的に長く使うことはなかったが、このようにAさんへの支援を考え、工夫していこうとする担任の姿勢は、Aさんにも保護者にも心強いものであったと思われる。

Aさんにとってよい支援になったこと(例えば、行事の時の活動予定表や、掃除の時の会話、授業の時のカード等)は、他の子どもにとっても役に立つものであった。

○ 校内の体制をつくる

担任は、早い時期の職員会でAさんのことを説明し、その後も継続してAさんについて発信した。このような担任の動きは、校内に特別な支援を必要とする子どもの理解を進める役割を果たしている。

3 「学級集団づくりの実践」

3－（1）「学習や生活が成立しにくい 学級への対応」

事 例 名
3－（1）① 小学校 「信頼感を基盤にして学級を立て直していく」 ～授業づくりを柱にして～
3－（1）② 中学校 「安心感のある学級づくりを求めて」 ～学級の基盤を整える・生徒たちに語らせる～



「信頼感を基盤にして学級を立て直していく」 ～授業づくりを柱にして～

【事例の概要】

小学校4年生の学級。3年生のときには荒れのみられる学級と言われていた。集会できちんと並べない、静かにできない、授業中は数名が立ち歩くなど規範意識が低い状態だった。

そんな学級を4年生から受けもった担任が、まずは学級開きの日に、子どもたちとの出会いを大切に、その後、規律や授業を大事にしながら学級をまとめていった事例。

【取組の実際】 ※以下は担任の先生からの聞き取りを中心にまとめている。

1 学級開き～大切にしたい最初の3日間～

(1) 子どもたちへのアンケート

担任は子どもたちと出会う最初の3日間が勝負だと思い、始業式の日学級開きに臨んだ。

まずは黒板に「新しい気持ちでがんばろう」と書き、その後子どもたちにアンケートをとった。

アンケートは「どんなクラスにしたいか」「担任に望むこと」「いいクラスにするために自分に何ができるか」など、担任が子どもたちの気持ちが知るために行った。

すると、女子の方から「厳しくしてほしい」という声が多く出た。

わやわやした、授業にならない感じが嫌だったんでしょう。がんばっている子が報われる、居心地のよいクラスにして欲しいと思って書いたんだと思います。子どもたちも変わりたいんだろうと思いました。(担任)



(2) 先生クイズ

担任はアンケートの後の学級活動で、楽しい「〇×先生クイズ」を行った。

10問程度の内容は「先生は読書が好きである?」「先生は厳しい?」とか、いいことばかりではなく、「先生はおちょこちよいである?」「先生は若く見えるが〇〇歳である?」など、自分はこの人間なんだよということが伝わるクイズであった。子どもたちは先生クイズが初めてだったようで、とてもものってきた。まずは、自分を伝えることから始め、こんな先生だということを知ってもらった。

(3) 子どもたちとの約束

「先生クイズ」の後、担任は子どもたちと「とにかく先生の話聞くこと」を一つだけ約束した。

たくさん言っても仕方ないと思い、とにかく何があっても、言いたいことがあっても、後から必ず聞くから、とにかく自分が「私の話を聞いて!」と言ったら話を聞いて欲しい、ということ子どもたちに強くお願いした。

子どもたちは、私の話を静かに聞いていました。新しい担任や、新しい学年に期待していたのかもしれない。

だから最初に、子どもたちと「どう出会うか」はとても大事だと思います。これが学級開きでした。(担任)



2 時間を守る～まずは規律から～

担任が、始業式の次の日、授業が始まる時に取り組んだのが「時間を守る」ということである。

時間のルール

○授業時間を守る

- ・延長授業は一切しない。
- ・授業の始まりに遅れたら、遅れた分だけ延長する。

やはり最初は、業間、昼休みなどの後の授業は、何人かが授業に遅れてやってきた。担任は時計を見ながら「あっ、最後の人が4分遅れたね、じゃあ4分延長しようね」と学級みんなに話す。

子どもたちは「え～」とは言わなかった。子どもたちは約束だということを理解していた。

逆に、終業のチャイムが鳴ったとき、授業の展開がいいところでも、担任が「はい、終わり」と言うと、子どもたちが「え～終わるの？ほんとに終わっていいの？」と不思議そうな顔をした。担任はいいからいいから、延長しないっていう約束でしょ、次の時間にやればいいの」と返すと子どもたちは「ふ～ん」と言って、だんだんと担任を信用していった。



まずは先生も守るからみんなも守りなさいって。

だからこの時間のことはすぐに守れるようになりました。

まずは規律からやりました。

(担任)

3 授業を学級経営の柱にする

担任は授業で学級経営をしようと考えていた。それは子どもたちが学校にいる8割は授業を受けているという事実に基づいている。

この学級をまとめていこうと思ったとき、どんな生徒指導をしようかではなく、どんな授業をしようかと考えた。そこに一番力を注いだ。

○まず初めは面白い授業から

- ・作文リレー（4人グループで一つの作文を完成させる）
- ・インタビューゲーム
- ・パソコンを使って（NHK学習動画なども取り入れて）

○だんだんと学習そのものの楽しさへ

- ・自分で考えて答えを見つけたり、話し合うことで考えを深めたり
- ・題材そのものの楽しさをわかっていく

最初から深みのある授業をするのは難しかったため、担任は子どもたちが興味を引くような授業を考えていった。

放課後になると、次の日の1時間目から6時間目までの授業の計画を立て、準備をし、シミュレーションを行った。そのことに一番力を注いでいた。



だんだんそんなに特別なことをしなくても、授業の中のやりとりの楽しさとか、題材の楽しさが分かってきました。子どもたち賢いんです。(担任)

学級開きから、1～2ヶ月の間で、子どもたちは落ち着いて授業に取り組むようになった。

4 Aさんへのかかわり

(1) 周りの子を育てる

学級には、授業中に紙飛行機を飛ばしたり、立ち歩いたりして授業に参加しないAさんがいた。

3年のときには10人ほどの子どもたちが立ち歩きをしていたようだが、4年生になり、担任の声かけや授業の楽しさによって、ほとんどの子どもが授業中立ち歩かなくなった。しかし、Aさんはなかなか立ち歩きがやめられなかった。担任は学級の子どもたちに「Aさんもだんだんしないようになるからね」と語りかけ続けた。すると、Aさんが立ち歩いても気を取られなくなり、Aさんが話しかけても紙飛行機を飛ばしても反応しなくなった。その結果、Aさんは一人になってしまい、遊び相手もいなくなった。

(2) 成長を信じる、かわいいと思える

Aさんは授業中に自分の好きなことをしながらも、担任がおもしろいことを言うと笑ったり、発問すると「は〜い」と急に参加したりした。また、歩きながら「それはこうだわ」って答えてみると、かかわって欲しいけれどまだ素直に授業に入れないというところがあった。

だんだんと、「まっいっか」と流せるというか待てるという自分になっていきました。時々こっちを気にして向いているときもあるので、いちいち注意しないで、Aさんが急に答えたら「うん、そうそういいよね」とほめたりしました。今このときの子どものありのままを受け止めるというか、子どもの成長する力を信じるというか、人間を急に変えさせることなんかできないし、でも変わろうとしてるし、成長してるし、と思っていました。それに、授業中は指示を聞かないのに、時々作ったおもちゃを「先生あげる」ってくれたりするのです。にこっとしたときの笑顔がとってもかわいいんです！（担任）



5 保護者の信頼を得る

(1) 自分を伝える

担任はよく「自分はこういう人間だよ」ということを自分から子どもたちに楽しく発信したり、子どもたちの質問に正直に答えたりしていた。

すると、担任が言ったことを子どもたちが家庭で話すようになった。「へえ〜今度の先生は〇〇なんだね」と家庭の中でそのことが話題になったりもした。

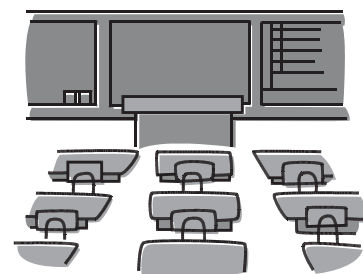
そして、担任の話を楽しそうに話す我が子を見て、保護者が担任に親しみをもつようになった。

(2) 学級だよりで伝える

担任は以前から学級だよりを書くことが好きであった。この学級をもったときにも、9割が子どもたちへのほめ言葉、1割が子どもたちへの励ましの言葉、といった内容で週に2〜3回学級だよりを出していった。

すると、保護者からの反響は大きく、ちょっとした記事にも喜び、声をかけられるようになった。

その後も、保護者を安心させるためにも、「この学級はこんないいクラスですよ」ということを学級だよりで伝え続けていった。



〈最後に…〉

担任は、今の学級の状況をありのままに受け止めながら、認めながら、ゆっくりゆっくり…という1年間だったと振り返った。

11月の研究授業のとき、終業のチャイムが鳴って、担任が「じゃあ終わります」と言ったら、ある子どもが「先生、延長しようよ。もっと言いたい!」と言った。

あとの研究協議で、指導講師の先生が「あの言葉が今日の授業を物語っています」と言われた。

子どもたちは認められたいと思っている。気になる子は、「求めてるよ!」
っていうサインを出してる。
どの子どもも大好き! (担任)



【考 察】

○ 子どもたちの声を聴く

担任が子どもたちと出会って最初に行ったことがアンケートであった。3年生の状況から、子どもたちも少なからず傷つきや不安をもっていたはずである。そして、新しい担任との出会いに期待もあったと思われる。そんな中で、新しい担任が、まず自分たちの声を、思いを聴こうとしてくれたことは、担任への大きな信頼感につながったと思われる。

○ 自分を開く

担任は、子どもたちの自己紹介の前に、「先生クイズ」を通して自分を開いていった。また、その他のときにも、折にふれて「自分はこういう人間なんだよ」ということを楽しく伝えていった。

これは子どもの教師理解である。子どもと教師が本当の意味で信頼関係を築くためには相互理解が必要である。そのために、子どもが教師を理解する場をつくったのである。

また、このことが保護者の信頼を得ることにもつながっていった。

○ 姿勢を示す

担任は、子どもたちの規範意識を高めていくためには、「まずは話を聞いてくれないと始まらない」と思っていた。子どもたちの声を聴き、自分を開いていった担任が、子どもたちに向かって力強い姿勢で「とにかく聞いて!」と訴えた。それが子どもたちの中にずっと入っていったように思われる。

そして、その後、時間の約束を自ら徹底して守っていったことによって、子どもたちの中の担任への信頼感が確固たるものになっていった。

○ 授業を考え続ける

小学校においては、担任が授業の約8割を担当している。よって、授業時間を子どもたちがどう過ごすかが、この学級が立ち直っていく大きなポイントであると担任は考えていた。

担任は最初の頃行っていた「楽しい授業」の工夫だけでなく、次の一手、そしてまた次の一手を1年間を通して考え続けていった。

「安心感のある学級づくりを求めて」 ～学級の基盤を整える・生徒たちに語らせる～

【事例の概要】

授業中に荒れた言動や離席等が見られるAさんがいる中学校3年生の学級。一学期は、Aさんをめぐるトラブルや女子の人間関係のもつれから、学級内に乱れた雰囲気があったが、担任の学級の基盤を整えていく取組や生徒たちの行事への取組等をとおして、Aさんの言動も落ち着き、学級にも連帯感が生まれていった事例。

【取組の実際】

※以下は、担任の先生からの聞き取りを中心にまとめている。

1 一学期の学級の姿

(1) Aさんのこと

Aさんは、明るく元気な生徒であるが、授業中に大きな声を出したり、離席したり、時には友人が怖がるような態度も見せるので、3年生になった時には、周りから敬遠される存在になっていた。そして、周りから敬遠されればされるほど、Aさんは、強気な態度を学級内で見せたり、教室に入らずに、廊下を歩き回ったりするようになった。

(2) 周囲の生徒のこと

周囲の生徒たちは、Aさんを敬遠することが多いものの、中にはその言動に合わせて授業の雰囲気を乱す生徒もいた。

また、女子はグループになって過ごしており、互いに近寄ろうとはしなかった。担任は、学級としてのつながりをつくっていくことが難しい状態であると感じていた。

Aさんの対応に追われる自分を冷めた目で見ている生徒もいたように思う。そう感じると生徒たちにどんな言葉をかけていいのかわかなくなってしまった。また、女子の雰囲気も気になって。でも、真面目に我慢している生徒もたくさんいて、このままではいけない。なんとかしたい。そればかりを思っていた。(担任)



2 年度当初に行ったこと、年間を通じて行ったこと

(1) 学級の基盤を整える

学級に安心感がなければ、我慢している生徒たちとは関係がつかれないと考えた担任は、給食、そうじ、係活動、席がえについてのルールは徹底した。学級の生活の基盤となることから公平が必要だと考え、これらのことの手順や決め方は、年度当初に担任がはっきりと示した。また、これらのことに生徒たちが一生懸命に取り組んだ姿を、必ず見つけるようにして、本人に直接「学級のためにありがとうね」と言ったり、学級通信で紹介したりした。

本当はもっと生徒たちに自主的に決めさせてあげたかった。でも、年度当初はそれはできなかった。そうすると一部の生徒たちに振り回されて、よけいに生徒同士の関係が悪くなりそう。(担任)



また、担任は教室がいつも乱れていることが気になっていた。そこで、終礼後に日直と一緒に教室の掃除と机の整頓をするようにした。しかし、朝礼前に教室に行くとまた机が乱れていた。それで、机を整頓する。その繰り返し、年度当初は続いた。しかし、毎日これを繰り返していくうち

に朝早く来た生徒たちが、机の整頓や黒板の整備をしてくれるようになった。生徒たちは、これを卒業するまで続けてくれた。そうして、この学級はよくそうじをするようになった。担任にはそのことが大きな自慢となった。

生徒たちに助けられるなあと思った。大人をよく見ているんだなあ。(担任)



(2) 子どもたちと話す、語らせる場をつくる

「この学級どうなるのかなあ」と生徒たちは不安げに見ているように、担任には感じられた。そこで、担任はすぐに全員の生徒と教育相談をし、「新しい学級になってどう？」と聞いた。どの生徒もいろいろなことを話してくれ、また、大半の生徒が、「最後の学年だから、体育祭や文化祭を楽しみたい。受験が心配」と語った。

また、担任は「生活の記録」をとにかく毎日提出するように言った。何も書くことがなければ、○△×でもいいから自分の状態や不安を知らせてほしいと伝えた。そして、「生活の記録」には、必ずコメントを書いて返した。するとAさんも「生活の記録」を毎朝提出した。

教育相談では、いろいろと話してくれた。最後に「教えてくれてありがとう」って言うのと、「まあ頑張ってみるわ」みたいな感じになって終えてくれた。それから、生徒たちの思いを知ると、体育祭や文化祭への取組をなんとかしなくちゃと思った。

まさか、Aさんが「生活の記録」を出すなんて思ってもいなかった。もしかしたら寂しかったのかなあ。(担任)

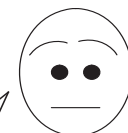


(3) 学級通信を通して考えさせる

担任は、週に一回学級通信を出した。保護者にありのままの様子を知ってもらいたいと考えた。

また、年度当初は学級を落ち着いた雰囲気にすることに必死で、生徒たちに「こうしなさい」と指示を出すことが多かった。そこで、学級通信には、「担任の願い」や「生徒たちが頑張っている様子」をたくさん書くようにした。しかし、残念な姿を見つけた時はそのことも書いた。その際に「私はこんな様子はこういう理由で残念に思う。みんなはどう思う？」という書き方を心がけた。

学級のよいところをみつけて書くのは楽しかった。生徒たちも保護者もよく読んでくれたように思う。残念な様子があった時は、生徒たちに向き合わせたかった。この学級のこと、みんなで考えてほしかった。(担任)



(4) 主役になれる日をつくる

一学期の半ばになってもAさんにはあまり変化が見られなかった。しかし、「生活の記録」を出したり、担任にわざわざ嫌な言葉を言いに来たりと担任の近くにはいた。

また、女子のグループ間での互いを敬遠するような雰囲気も、なかなかなくならなかった。

担任は「どうしたら少しでもお互いを知ろうとしてくれるのかなあ」と考えた。そこで、誕生日の生徒には、その日の終礼でみんなで寄せ書きを贈った。また、学級のカレンダーを生徒たちに作らせ、自分の担当の日好きな言葉やお気に入りのもの等を書かせた。その内容を朝礼で紹介した。生徒たちが平等に注目される日、主役になれる日をつくろうと考えていた。

幼稚だとか言っているわりには、自分の誕生日に寄せ書きが来るのが楽しみだったみたいで、なんだかかわいいなあと思えた。カレンダーも自分の担当の日は、「この日は歴史上ではこんなことがあった」とか語る子もいて。この子たちは楽しい子たちだなあと思えてきた。(担任)



3 体育祭をとおして集団の力を高める

(1) 語り出した生徒たち

一学期末には、体育祭に向けての準備が始まった。応援のリーダーや団長等の役割を一部の発言力のある生徒たちが勝手に決めている雰囲気があった。しかし、このままでは、学級はばらばらな雰囲気のままだと感じた担任は、「とにかく全員が納得するまで話し合いをするように」「お互いの話を聞いてから決めるように」と生徒たちに伝えた。

また、体育祭に対するそれぞれの思いをアンケートに書かせた。大半の生徒が、「こんなことをしてみたい、みんなと仲良くなりしたい」等、人間関係の中で押し込んでいた希望を書いており、それらを学級通信に載せて紹介した。

体育祭に向けての学活の話し合いの時、おとなしく、何事も我慢して過ごしていると思われた女子の数名が、「自分たちもリーダーをしてみたい」と発言した。そこから、昼休み、放課後も使って女子の話し合いが始まった。男子をはじめはそれを遠巻きに見ているだけであった。しかし、女子から「男子も真面目に考えてよ」と言われ、いつの間にかほとんど全員が、昼休み、放課後に教室に残って話し合っていた。担任は、とにかくその場において生徒たちの話し合いの様子を見ていた。

うちの学級だけ、体育祭の準備が始まらなくてどうなるのかなあと正直不安だった。でも、生徒たちが相手のことを思って発言をしていく雰囲気ができてきて。まあ、待つしかないかなあと思っていた。とにかく生徒たちが話し合う場には一緒にいた。口出ししようとする、
「自分たちでなんとかするから、先生は黙って見ていて」と言われたりもした。(担任)



人間関係の中で我慢していた生徒たちは、正直にこれまでの不満を語り、また聞いてもらったことでスッキリしたのか、「体育祭のどの担当になっても頑張る」と言った。結局は、話し合う前から予想されていた通りの発言力がある生徒が、体育祭の中心的な役を担った。

しかし、担任にはこれまでの人間関係とは違って見えた。生徒たちは準備中にこの踊りがよいとか悪いとか、よく言い合いをしていた。これまでであれば、遠慮しあってそんな会話はなかったと思われた。その姿は生徒たちがつながっている姿に見えた。

(2) Aさんを巻き込んだ生徒たち

担任はとにかくAさんを体育祭の準備の場所には連れて行った。しかし、Aさんはなかなか参加しなかった。生徒たちもAさんに一緒にやろうと声をかけ続けていた。運動が好きなAさんに「頼りにしているよ」と言ってくれる生徒もいた。

やっぱり友だちから声をかけてもらうことは大きい。力仕事ならまかせておけとか言
って、いつの間にかAさんは参加していた。(担任)



体育祭の前日の終礼で、団長の生徒がこれまでの感想を話し、「みんなにも話してほしい」と言った。すると座席順に全員が、正直な感想を話した。誰かが話し始めると生徒たちは静かに最後まで聞き、拍手をした。

体育祭で優勝したわけでもないのに、もう終わったみたいに泣いて「みんなありがとう」と言っている生徒がいた。緊張感がある関係だったのに、いつの間にこんなに自由に話せるようになったのかなあと思った。知らない間に仲よくなっていた。ちゃんと友だちの話も聞ける。この子たちの成長に、私はいつのまにかおいてきぼりになっていた。(担任)



体育祭当日、生徒たちは、大きな声で応援すること、競技の集合・解散の時にきびきびした態度を見せることを互いに約束して、その通りの姿で過ごした。充実感の中で、体育祭を終えることができた。

4 受験に向けて

体育祭の成功体験が生きて、その後の文化祭も生徒たちは協力して取り組み、学級の連帯感は深まっていった。そして、受験の 때가 やって来た。この頃、学級は落ちついた雰囲気になっており、朝礼前や放課後の時間に教室に集まって勉強の教え合いをしたりするようになっていた。

Aさんも教室でほとんどの時間を過ごせるようになっていた。しかし、やはり落ち着かない時もあった。担任がどんな時に落ち着かないかAさんに聞くと、「みんなが勉強に集中していると苦しくなる。自分はどこをやってよいのか、何をしてよいのかわからない」ということであった。

また、この時Aさんは、「教室にいない時に配られたプリントがいつも整理して机の中に入れてある。どうせ自分はやらないのに、いつも順番が整えてある」と言った。ある生徒が、Aさんの机をいつも整理してくれていたことを担任はこの時初めて知った。

Aさんは、みんなが優しくしてくれていたことはわかっていた。だから、勉強の邪魔はしてはいけないと思ってくれていたみたい。(担任)



担任は、Aさんに苦しくなったら別室で過ごすこともできると提案したが、本人はそれを了解しなかった。なんとか教室にいたいと思っていたようだった。そこで、本人と相談をして、Aさん専用のドリルを用意して、授業中はそれをするようになった。このことはAさんの保護者にも了解を得た。また、教科担当がAさん用の教材をそれぞれに用意してくれた。

卒業の時に

あっという間に一年が終わって生徒たちは卒業していった。受験の直前にAさんが「先生、勉強の邪魔をする人がいたら、自分がやっつけてあげる。この学級は自分が守るから」と言ってくれた。他の生徒たちが自分を受けて入れてくれたことへの恩返しだったのかなあ。

卒業の直前には、とにかく「社会人としてどうあるべきか、これからは大人になりなさい」等と調子よく語った。よく聞いてくれた。いい子たちだった。Aさんを救ってくれたのも結局は生徒たちだった。

それから、年度当初は、落ち着かない雰囲気でも他の学級にも迷惑をかけたと思う。でも、どの先生も「先生の学級どうなっているの」なんて言われなかった。責められなかった。それがありがたかった。

(担任)



【考 察】

○ 生徒たちが安心感をもつために

担任は学級の基盤を整えるためにさまざまな策を講じたが、その全てにおいて、根底にあったのが「公平性」であった。給食、そうじ、係活動、席替えなどのルールの徹底や、教育相談、生活記録のコメント、誕生日の寄せ書き、行事での役割決めなどに公平性が貫かれていた。

生徒たちが担任に感じる公平性が信頼感となり、そして学級の、生徒たちの安心感につながっていった。また、生徒たちの中に安心感が生まれると、生徒たちが自ら動き出すことができる、それを証明している事例でもある。

○ 担任が出るところ、見守るところ

担任は、教室環境の乱れを直すときなどは、自らが動き、生徒たちのよきモデルとなっていた。

しかし、生徒たちにしっかり話し合わせるときなどは、生徒たちを信頼し、我慢強く見守り続けた。その担任の状況を見て判断する力が、学級の力を伸ばしていった。

○ 学級づくりを基盤にして、みんなを成長させている

信頼できる担任のもとで生徒たちは成長していった。

Aさんが行事に向かうことができたのも、また教室に戻ってきたのも、最後は学級の友だちからの声かけによるものだった。担任はAさんを個別に支え、見守りながらも、学級づくりが基盤であることにぶれがなかった。

3－（2）「アンケートQUを活用した 学級集団づくり」

事 例 名
3－（2）① 小学校 「ルールの定着やトラブルの解決を通して集団を育てる」 ～アンケートQUをきっかけに子どもたちの実態を見つめて～
3－（2）② 小学校 「一人一人の声を大切に聴く」 ～アンケートQUが教えてくれたこと～
3－（2）③ 中学校 「子どもたちとつながって、集団と個の力を高めていく」 ～アンケートQUで見えた子どもたちの世界をきっかけとして～



「ルールの定着やトラブルの解決を通して集団を育てる」 ～アンケートQ Uをきっかけに子どもたちの実態を見つめて～

【事例の概要】

※印の語句は、巻末の資料編参照のこと

入学してから同じ仲間で過ごしている少人数の小学4年生の学級。6月に行ったアンケートQ Uでは、※「ばらばらな学級集団」という結果だった。学級担任は、その結果を受けて改めて学級の状態を見直し、学級集団を育てた。子どもたちに変化が見られ、2度目のアンケートでは※「ルールとリレーションが確立した親和的な学級集団」という結果がでた事例。

【取組の実際】

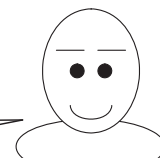
※以下は担任の先生からの聞き取りを中心にまとめている。

アンケートQ Uと向き合う

1 結果を受け取って

担任は、6月のアンケートQ Uの結果を見た時、大きなショックを受けた。文献には、「この担任だといつもこうなる」とも書いてあった。

これまでの自分が全否定された気がした。でも、やらなければならない気持ちがあって、立ち上がりました。（担任）



2 どうしてこのような結果になったのか振り返る

そこで、担任は、どうしてこのようなアンケート結果が出たのか、学級の子どもたちの実態を改めて考えてみた。

子どもたちは、いくつかの保育所や幼稚園から入学してきて、1年生の時からずっと同じ仲間で過ごしており、好き勝手に言えていた。言われた相手が傷ついているのに知らん顔という無遠慮な態度も見られた。馴れ合いになっているので、配慮に欠ける面があり、そんなきつい言い方をしなくてもいいのと思う言い方や態度もあった。そして、そのことにお互い慣れてしまっていて、あの人はあんな態度をする人だという固定観念もあると思われた。明るくて元気で、何か活動するときは大きなパワーを出すのが、子どもたちのもっている負の面が表に出ていると思った。

学級の中にいるAさんは、1年生の時から毎日何回も友だちとトラブルを起こす子どもだった。Bさんとは、ささいなことでよくけんかしていた。

学級には、そんなトラブルに無関心な子どもたちもたくさんいた。また、訳もわからずBさんに加勢してトラブルを大きくしている子どももいた。

このような実態は、わかってはいたこと。でも、改めて自分の中できちっと受けとめました。

（担任）



アンケートQ Uの結果をどう分析していいか、一人一人をどう支援するかについて悩みつつも、一人できることをやってみました。（担任）

取組の様子

1 ルールの定着を図る

担任は、アンケートの結果で「ルールの定着や行動規範の定着が不十分」とあったので、ルールの定着とは何だろうと考え、人とのかわり方で基本的なことである「話を聴くこと・上手に話すこと」から始めてみようと思った。それらは、今まで何も指導せずきたわけではなかったが、きちんと1時間の授業時間を設定して実施した。

(1) 「上手な聴き方」の学習をする

- i) 担任が聞く役、子どもが話す役になってロールプレイを行う
 - 1回目：よそ見をしながら聞く
 - 2回目：話す人に体を向けてうなずきながら聞く
- ii) よい聞き方のカードを示して子どもたちが二人組になって聞き合う

ロールプレイの時、話す役には、トラブルをよく起こすAさんが立候補した。話し好きのAさんは、たくさん話したが、担任に、よそ見をしながら聞かれ、「まだやるんですか」と不満げに言った。2回目は、しっかり話すことができ、笑顔になった。その様子を見ていた他の子どもたちもその違いに気づいていった。Aさんは、「1回目はすごくいやだった。2回目は聞いてもらってすごく嬉しかったです」と感想を話した。子どもたちの中には、1回目のロールプレイの時の担任の姿を見て、「いつもの先生らしくなかったです」と言う子どももいた。

二人組で聞き合う体験をした後の感想から、子どもたちがよい気づきをしたことがうかがわれた。

- ◇ 相手を見るのがよかった。顔を見て真剣に聴き合うのもいいなあと思った。
- ◇ ちゃんと見て聞いてくれて話しやすかった。これからもこのルールを守ってみたい。
- ◇ 笑顔で聞いてくれて嬉しかったので、これからも発表やスピーチの時、こうやって聞きたい。

(2) 「上手な話し方」の学習をする

- i) 教員2人で演じる「3つの話し方」を見て感想を言ったり、「ドラえもん」のキャラクターになぞらえて考えたりする
- ii) 「3つの話し方」やDESC法(※)を練習する
 - ※相手に対し、「客観的な事実・自分の気持ち・具体的な提案・返事に応じた対応」を話す方法

教員が2人で「劇団先生たち」と名をって「3つの話し方」を演じたが、子どもたちは関心をもって見、自分のいつもの話し方を振り返っていた。どの子どもも、自分の話し方を自覚しているようだった。

- ◇ 自分はいけないことをしているのかなと考えて、しているなと思った。
- ◇ 普段は気にしていないけど、この授業をしたので、これから気をつけて話したい。
- ◇ 自分もちゃんと見たことや感じたこと提案することを言いたいと思った。

今まで指導をしていなかったわけではないけれど、学級に共通なものとして子どもたちの心の中に落ちていなかったのかな。一緒のものを見て体験して実感して、それにより、子どもたちの心の中に共通のルールとして感じられ、考える同じ指標ができてよかったと思う。体験を伴うと子どもたちの意識はずいぶん違ってくる。(担任)



(3) トイレのスリッパをそろえることを徹底する

この学年の男子が使うトイレのスリッパは、常に乱雑になっていた。気がついた子どもが直すことはあったが、あまりにもひどい状態だった。

そこで、担任は、「これは、次に使う人のことを考えていない思いやりのない気持ちの表れだ！」と厳しく叱った。それを聞いて、1人の子どもがスリッパを直し、その日はずっときれいだったので、ほめた。次の日もきれいに揃えられていたので、またほめた。そうやってほめ続けた。

他の教員が、きれいに揃えられたスリッパを写真に撮って昇降口やトイレに貼り、「すばらしい」と言ってくれ、校長先生も全校朝礼でほめてくれた。こうして、スリッパを揃えることは定着していった。

先頭に立ってスリッパを直してくれるのは、Aさんで、見事に一列に並べていた。

2 お互いを知り合う～日常の活動を積み重ねる

この学級は、1年生の頃から、終礼時にお互いが交流し合う時間をつくっていたが、担任は、マンネリ化しないように、新しい取組を行った。

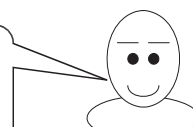
(1)「ほめほめ感謝デー」

毎週1回、曜日を決めて「ほめほめ感謝デー」を実施した。子どもたちがペアをつくって、1分ずつ交代し、お互いにほめたり感謝したりする。それを行う日には、ほめたり感謝したりする材料を見つけておくように指導していた。

(2)「しっかり聞くデー」

子どもたちの「聞いてもらうっていいな」という声を受けて、学校のことで家のことでもなんでもよいので、友だちに聞いてもらうという日を週に1回設けた。子どもたちは、「聞いてもらってほめてもらって嬉しかった」「家ではまっていることや遊んだことなど、その人の“聞かなければわからないこと”がわかってよかった」という感想をもった。

こんな活動もマンネリ化してはいけないと思う。新たなことを考えていきたいなと思いつつやっています。(担任)



3 学級イベントを通して心地よさを体験させる

学級のイベントとして「お誕生会」を行った。子どもたちが、みんなが仲良くなるように・笑顔になるようにどうすればよいかを考える“にこにこ係”をつくったのだが、みんなから一目置かれているリーダー的な子ども2人がこの係になり、この「お誕生会」を計画した。

担任は、せっかくのこの会をめあてをもってやろうと呼びかけた。そして、「みんなが笑顔になるような会にしよう」というめあてをつくり、係の子どもが会の最初にみんなにそのことを言った。

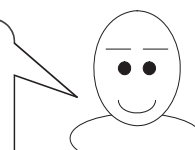
学級には、楽しいことに関しては我先にやろうとする子どもがたくさんいて、トラブルになったこともあった。しかし、この“にこにこ係”の子どもたちは、ゲームの内容も、ゲームの順番もあらかじめ決めており、トラブルになる場面も原因もないようにしてあった。その子どもたちが決めていたことから、それについて文句を言う子どももなく、本当に和やかに楽しく会ができた。

AさんとBさんも会の中で出し物をし、みんなに拍手され、満足感をもって終えた。

Aさんはその日は全くトラブルを起こさなかった。またその日以降も乱暴な言葉や態度は減ってきた。他の子どもたちもAさん自身も、自分たちがおだやかに過ごせていることを実感し、この「お誕生会」の日から自分たちはおだやかになったと考えるようになり、この日は学級にとっての記念日となった。

そして、カレンダーにおだやかだった日に○をつけるようになった。○のない日は寂しいので、その日の様子に合わせて、細い線や太い線で○をつけたり、“はなまる”をつけていったりした。

子どもたちから「今日は“はなまる”！」という声が出ると、自分たちでも、おだやかに過ごすのはよいこと、おだやかに過ごせている自分たちはいい、そんな意識をもっているんだなと思いました。(担任)



4 トラブルから学ぶ

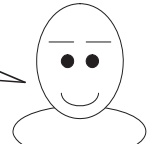
それまでの担任のトラブルへの対応と比べて変わったところは、それまでは当事者同士だけで解決しようとしていたが、学級の子どもたちみんなに、「今あの子はこうしてこうなっている。どう思う？」と投げかけたことである。見ている子どもは「その点ではAさんはかわいそうだと思う」「その点ではAさんの気持ちはわかる」「あんなふうに言われたらやだよ」と答えてくれた。Aさんの気持ちをわかる子どもが出てきた。

「その時悲しかった気持ちはわかるよ」と子どもたちが言ってくれるようになって、「なぜ自分が謝らないといけないのか」と言っていたAさんが涙を見せた。担任は、その時、「Aさん、気持ちが動いたな」と思ったが、Aさんは、初めて自分から、けったりたたいたりした子どもに謝りにいった。また、このような行いが度々見られるようになってきた。

トラブルがあった時は、「みんながAさんの気持ちをいろいろ考えて言ってくれるよね。言ってもらってどうだった？」と問いかけると、「嬉しかった」と答えるようになり、「今、Cさんにこういうこと言ったよね」と確認すると、「ごめんね」と言うようになった。

担任は、担任自身が「プラスを共有するように」という思いをもってかかわった。トラブルがあったら、みんなで上手に解決して、「そのかかわりはよかったね」「これはいけなかったけど、このことはよかったね」と、プラスの言葉かけをするようにしていった。

Aさんは、本当に幼いところがあるが、今、こうして人の気持ちをわかって人とかかわるスキルを身につけつつあるのかなと思っている。(担任)



5 人権集会で自分たちの取組を発表する

学校全体で人権集会が行われ、各学級でどんな取組をしているのかを発表することになった。

子どもたちに、どんなことが発表したいかを尋ねたら、「自分たちが頑張っていることを発表したい」と言った。「聴き方・話し方をみんなに教えてあげたい」「トイレのスリッパのこと言いたい」「僕たちが穏やかだということが言いたい」という意見が次々と出た。

そこで、チームに分けて、聴き方チームは、カードにより聴き方を5個書いて発表した。

話し方チームは、Aさんもいたが、Aさんが担任の先生がやったように、3つの話し方を演じ、劇をした。とても上手だった。

他のチームも、「次の人のことを考えてスリッパをそろえています」「ずっと穏やかに過ごしています」と発表した。全部子どもたちが原稿を書いた。

それに対して下学年から「あんな話し方はいいと思いました」という反応をもらったので、子どもたちは満足して、またがんばろうとすることができたと思われた。

〈実践を振り返って～アンケートQUについて～〉

担任は、このような取組をし、子どもたちが変わったことを実感している。これまで、ルールや友だちとのかかわり方について指導してこなかったわけではない。しかし、どの部分に気をつけたらよいのか、どの部分にかかわっていくとよいのかについて、思い込みやこれまでの学級担任の情報だけに頼るのではなく、客観的に子どもたちを見るためにアンケートQUはよかったのではないかと考えている。

ただ、担任は、アンケートの結果に表されたものと事実が異なる時もあるとも考えている。たとえば、Aさんは、1回目のアンケートでは、自分の言動に対する周囲の子どもの反応を「いじめられている」と受けとっていることが多かったが、2回目のアンケートでは変わっていた。しかし、担任は、Aさんの実際の言動はなかなか改善が図られていないことを把握している。

また、担任は、子どもの気持ちは日々変わっているため、アンケートをいつとるかによって、結果が違ってくるとも思っている。

担任は、これらの点を、子どもたちの思いを理解していく上で大切にしたいと思っている。

どんなことをするかということを試行錯誤で悩んだが、結局どんなことをするにしても、どんな気持ちでかかわるかという私の姿勢が大事なのだと思う。プラスの声かけをすることや、「いいんだよ」と優しく声をかけることで、子どもの受けとめは違ってくると思う。私の思い込みではなく、子どものことをわかろうとすることを日々しています。(担任)

すごく落ち込んだけど、担任としての意識が変わったことがよかったかな。2学期の結果を見ると、自分の意見を言えないということにポイントが低かったり、みんなが上がっているのに、上がっていない子もいる。安心して話せるという項目の点数が低い。これから、誰の意見も肯定的に聴き、誰もが安心して話せ、学級の誰もが「OK」という気持ちを味わわせる授業をしようと思っています。(担任)



【考察】

○ 担任の真摯な姿勢から実践が生まれる～QUを生かす～

一回目のアンケートQUの結果にたじろぎながらも、その結果を真摯に受けとめ、改めて学級の実態を見つめた担任の姿勢から生まれた実践である。客観的に学級を見、子どもたちのありのままの心情を大切にどう指導していけばよいかを示唆するQUは、このような担任の姿勢があって初めて生かされるであろう。

また、担任は、どんな取組をしていく場合も、子どもにかかわる自分自身の姿勢が大切であると感じている。思い込みでなく子どものことをわかろうとすること、マイナスに思える出来事の中からもプラスを見つけ出し、それを伝えること、子どもに届くように優しく声かけをすること等、日常の担任のかかわりがこの実践の根底にある。

○ 明確なねらいと工夫でルールの定着を図る

担任は、「ルールの定着」という課題に対して、人とのかかわりにおいて基本的なことだと考えた「話すこと・聴くこと」に焦点をあてた。これは、集団で学習したり生活したりする学校においてまずは大切にされるべきことであり、また、固定された人間関係の中で、お互いに配慮なく言い合っていたり、逆に無関心だったりしたこの学級の子どもたちにとっては、改めて人間関係をつくっていく点でも意味のあるルールであったと思われる。

そして、一つ一つの実践のねらいを明確にして、授業に臨んでいる。また、その授業には、トラブルを起こすことの多いAさんが活躍したり、教員の演技によって子どもたちを引きつけたりと、子どもが楽しく学ぶ工夫がなされている。「話すこと・聴くこと」について、これまで指導してこなかったわけではないが、子どもたちは1時間の授業の中で体験を通して実感し、それを共有することで、深い学びになっている。

担任は、「トイレのスリッパをそろえる」というルールの定着も図った。「次に使う人のことを考えた思いやりのある行動を」と、意味づけをし、できたらほめ続けることによって子どもたちの行動が変わってきた。行動を叱るべき時には叱り、できたらほめるという指導のあり方の大切さが感じられる。

○ 日常の取組をきめ細やかに行う

担任は、終礼で、子どもたちの心の交流を図る取組を続けている。マンネリ化しないようにと工夫しながら取組を積み重ねることで、子どもたちの関係がよいものになったり、子どもたちの自信になったりしていることがうかがわれる。

また、トラブルを起こしたAさんに対しても、周りの子どもたちにその時の自分やAさんの気持ちを言葉にさせていくことにより、Aさんの気持ちや言葉を育てている。

担任がこのような取組を行った結果、子どもたち自身が自分たちの成長を実感していることが感じられる。様々な学習や日々の生活を大事にし、子どもたちにたち成感や満足感をもたらした取組であったと思われる。

「一人一人の声を大切に聴く」 ～アンケートQUが教えてくれたこと～

【事例の概要】

※印の語句は、巻末の資料編参照のこと
持ち上がりの4年生の学級。担任は学級の状態をうまくいっていると思っていたが、初めて行ったアンケートQUでは※「ゆるみの見られる集団」という結果だった。その結果をすぐには受け入れられなかった担任であったが、子どもたち一人一人との面談から学級の課題を見つけ、その解決に向かって個別に、そして学級全体に取組を行った事例。

【取組の実際】

※以下は担任の先生への聞き取りを中心にまとめている。

アンケートQUと向き合う

1 アンケートQUの結果から学級全員の子どもと面談を実施

6月に1回目の結果が返ってきて、「ゆるみの見られる集団」という結果に唖然とした。持ち上がりの学級で雰囲気もよかったし、活動も活発で特に問題もないと思っていた。だからアンケートの結果に少し腹が立った。でもやっていくしかないと思い、子どもたちと面談をすることにした。（担任）



子どもたちと面談をするときに、特に気をつけたことがあった。「いごちのよいクラスにするためのアンケート」質問項目7「あなたはクラスの人にいやなことを言われたり、からかわれたりして、つらい思いをすることがありますか。」にマイナスの回答をした子どもが数人いたため、その子どもたちには理由を具体的に聞いていった。

2 アンケートQUから見えてきたこと、個人面談から見えてきたこと

※「学級生活満足群」にいたAさんに、あんなことをされた、こんなことを言われたという子が数人出てきた。その子たちは普段から学級のためによく頑張っている子どもたちで、担任としても信頼しているメンバーであった。担任は、その子たちがそう言うのだから、おそらく直接自分に不満を言わないで我慢していたんだと思った。

担任から見てAさんは強い子であった。女子の中では前に出ていく方で、うまくいけばリーダーになれる感じはした。しかし、自分の主張を通そうとするところがあり、活動時にやる気はあるが、みんながついてこないという状態であった。

休み時間等は、Aさんは楽しそうで、他の子とじゃれあっているように見えた。周りの子がやさしくて、じゃれあっているときはAさんを受け入れてくれていたんだと思う。見ていていやな感じはなく、だから他の子たちが不満をもっていることに気づかなかった。見てないときにいろいろあったんだと思う。みんないい子たちなので上手に付き合っていたのかもしれない。（担任）



取組の様子

1 個別にかかわる 学級に呼びかける

まず担任は、Aさんと二人で話す機会をつくった。Aさんに自分をふり返ってもらったり、担任

としての願いを伝えてみたりしようと考えた。

Aさんと呼んで、他の子どもたちにどんな風に接しているかを聞いたり、担任として、友だちへのかかわり方について考えてほしいと伝えたりした。するとAさんは、他の子どもたちの思いもわかったようで、かなり落ち込んだが、「先生はあなたを支えるからね、応援するからね」と励ました。家にも事情を話し、見守って下さいということを伝えた。お母さんも子どもの人間関係のことを普段から気にしておられたし、担任との関係ができていたのでいっしょに考えてくださった。その後はお母さんと顔を合わせる度に特にAさんのがんばっているところを知らせるようにした。(担任)



この後、学級指導として、学級全体には「いやなことがあったら早めに言って、その日すっきりして帰ろうね。うまくいかないことは先生が手伝うから大丈夫だよ。すっきりする方がいいでしょ」と話をした。

するとその後、みんながいろいろなことを担任に言うようになるようになり、担任は、その都度話をしっかり聴くようにした。

そのことによって、他の子どもたちは安心したのであろうか、今までよりもさらにながめる子どもたちになっていき、いきいきと生活するようになった。

その反面、Aさんは浮かない表情で過ごすことが多くなった。担任はそんなAさんの気持ちをしっかり聴いたり、普段のがんばりを認めたりして、Aさんを支えた。

そういった状況の中で、10月にとった2回目のアンケートQ Uの結果は、まだ、「ゆるみの見られる集団」であった。

2 学級での学び

アンケートQ Uの結果をもって研修会に参加したときに、講師の先生から、「今は人間関係がバラバラかもしれないけれど、立て直しのチャンスだと考えてくださいね」とアドバイスがあった。

これをきっかけに、子どもたちに個別にかかわることは続けながら、本当の意味でのよいかかわりを求めて、学級全体への取組も行っていった。

- 人権・同和教育の公開授業ではアンケート（いやなことを言われた経験、自分が言った経験など）から学級の実態を把握し、その結果を使って授業を行った。
- アサーションについての学習（自分も相手も大切に自己表現の仕方）を学活で行い、自分は今までどんな言い方だったか、これからどんな言い方がしたいのかなという勉強をした。
- 『コミトレ』（NHK TV番組）を教材にして授業を行い、自分のものの言い方、伝え方を振り返った。

このような取組を行いながら、Aさんには「そうそう、その言い方がいいねえ〜できるようになったじゃん」などとよく声をかけた。

『コミトレ』などは言い方のモデルがあり、子どもたちはそれをまねしようとする。それがよい効果を生んだ。いいモデルを知ることは大切。そしてモデルになるようなかかわりを見つけて「それいいっ！」とほめるタイミングを大事にした。(担任)



子どもたちの変化

1 自分と向き合い始めたAさん

Aさんと担任が向き合っていたことによって、Aさんはだんだんと自分のどこが悪かったかがわかり、担任と話をするときには自分のいけないところが認められるようになっていった。そして、

しばらくすると、担任に声をかけられる前に、自分が相手を傷つけたことに気づき、相手に直接あやまる姿が見られるようになった。

2 居心地のよさを感じ始めた子どもたち

3学期は女子が全員で遊ぶ様子をよく見かけられるようになった。もちろんAさんも入っている。みんなのことを考えながら話したり、「〇〇さんいっしょにやろう」という声もかけたりしていた。

そして、みんなでおしゃべりという感じではなく、体を使った遊びが多く、安心して遊べる関係になっていった。担任は、「いいなあ～女子がみんなではしゃぐことはこれまでなかった。こんなに無邪気に遊ぶんだ」と感じていた。これまでになかった光景だった。

3学期は学級全体の雰囲気もよくなった。担任は子どもたちの様子を見て、アンケートQ Uをする前に感じていた、まあまあうまくいっているというのは本当にまあまあだったわけで、3学期の光景っていうのが本当にうまくいっているという感じなんだなあと思う。(担任)



3学期の終わり、お別れのときにある男子が「先生、2学期のときって学級最悪でしたよね。でも、みんなの力で乗り越えられて最後はいい仲間でお別れすることができました。さようなら」という手紙をくれ、それを読んで男子も気にしてたんだ、感じてくれてたんだと思いきよかった。女子の人間関係の問題だったが、女子だけへの指導ではなく、全体へ指導をしていったからだろうか。(担任)



女子の関係について直接担任と話をすることはなかった男子であったが、学級全体のこととして、きちんと受け止めていた。

3学期のアンケートQ Uの結果は、担任が感じていたように※「親和的なまとまりのある学級」であった。

〈最後に・・・〉

担任は、Q-Uの結果を見て指導を入れていくことを「これはチャンスなんだ、今そこに向かっている過程なんだ」と思わないと、気持ちがあくじけそうだったと語った。気づかなかったところを掘り返すことで悪い状態になることが予想されるからである。

ここに手をつけると怖いなあということがこれからもあると思う。それなりでいいかなあと思うこともあると思う。けれど、子どもを信じて切り込んでいかないといけないと思う。アンケートQ Uはそういうことを教えてくれる一つのアイテムだった。



【考 察】

○ 子どもたちの声にきちんと対応する

担任は、アンケートQ Uの結果をもとに、子どもたちと面談をした。そして、そこからわかったことについて、Aさん、訴えた子どもたち、学級全員の子どもたちに、きちんと向き合い、丁寧に対応していった。Aさんたちだけの問題としてではなく、学級全体にはたらきかけたことによって、最後には学級の雰囲気がよくなり、「親和的なまとまりのある学級」という結果に結びついた。

○ 子どもたちを信じる

表面化していない問題に気づき、その問題の解決に向かって取り組むことはとてもエネルギーのいることである。しかし、担任は、自身が語った「これが本当にうまくいっているということ」に向かって取り組んでいった。これは「この子たちなら大丈夫」と子どもたちを信じる気持ちが担任の背中を押していたのである。

「子どもたちとつながって、集団と個の力を高めていく」 ～アンケートQUで見た子どもたちの世界をきっかけとして～

【事例の概要】

小学校の時より、ずっと同じメンバーで過ごしている中学校2年生の少人数の学級集団。6月に行ったアンケートQUでは、学級のつながりの弱さや個々の子どもの自信のなさがかげた。そこで子どもたちの苦しさに思いを寄せて全教職員で対応し、子どもたちに変化が見えてきた事例。

【取組の実際】

※以下は、担任の先生、生徒指導主事の先生、校長先生の聞き取りと生徒指導主事が行った教職員対象のアンケートの声等を中心にまとめている。

アンケートQUと向き合う

1 教職員みんなでアンケートQUから子どもたちの世界を理解しようとする

アンケートQUの結果を見た時、担任は、「やっぱりいい結果ではなかったなあ」と思った。そこで、ありのままの姿を校内で知ってもらって、協力をしてもらった方がよいと考えた。そして、生徒指導主事が主になって、アンケートQUの見方等について、校内で研修した後、結果を見ながら事例研究を行った。

なんとなくうまくいっていないなあと思っていた学級。QUをやったらやっぱり。こりゃみんなやっていく 課題だと思わせてもらえた。QUがみんなで考えるきっかけになった。（担任）

2 アンケートQUから見えてきたこと

(1) 見えてきたこと〈学級全体に対して〉

※アンケートQUの結果の大まかな様子は次のようであった

学級の人数が少ないため、全国の傾向と比較して「〇〇の見られる学級」というようなタイプを見出すことはできにくかった。しかし、プロット図では、子どもたちは※4つの群に散らばって位置しており、それぞれの世界を守って過ごしているように見え、つながりが希薄であると思われた。※学級生活不満足群にいる子どももいた。

※「配慮」と※「かかわり」のスキルの定着を見た時に、他者に配慮することはできるが、主体的にかかわっていく、自己表現をしていくことを苦手と考えている子どもがほとんどであった。

※印の語句は、巻末の資料編参照のこと

教職員は学級全体がもつ苦しさを理解し、次のような思いを寄せた。

- かかわり方がわからないから、つながっていくこともできないとわかった。
- 変な気遣いが働いてみんな苦しくなっている。あの人がやらないなら、自分もやらない方がいいと思って過ごしているように思えた。
- あれもできない、これもできないと思っていた。提出物とか、宿題とか。集団としての弱さかも。切磋琢磨ができない雰囲気だったんだ。
- 子どもたち同士をつなごうつなごうとしていたけれど、まだまだそこにはいけない状態だと思った。まずは、教師とつながっていくことだとわかった。〈教職員の声から〉

(2) 見えてきたこと〈一人一人の子どもに対して〉

一人一人の子どもについては、その子のアンケートの回答を追いながら、どんな思いで学校で過ごしているかを考えた。次に、小規模校で全教職員が全員の生徒のことがわかり、かかわる場面があることから、それぞれが自分の立場でできるかかわりを考えた。

※ 次のような流れで事例研究を行った。

- ① 一人一人の回答の中で、評価が低い項目にチェックを入れる。同時に評価が高い項目も見て、伸ばしていけることも見ておく。
- ② ①で行ったことをふまえて、この子はどんなことで苦しんでいるのか、どんな思いで過ごしているのかを考える。(日頃の観察も交えながら)
- ③ ②で考えたことをふまえて、この子に対して自分ができるかかわりを1つ～2つ考える。

教職員は、一人一人の回答の様子を追いながら、子どもたちに対して次のような思いをもった。

- いろいろと悩んでいるのかなあとは思っていた。でも、どの子どもこちらが思っていたよりも、もっともっと悩んでいた。
- どの子ども自己肯定感が本当に低かった。認めてほしいと思っていた。何を感じて、何を想像しながら、マイナスの回答にチェックしたのか、わかりたいと思った。
- どの子どもみんな支援を求めていると思った。
- みんなさびしそう、それに気づいてと言っているよう。
- 自分に対して否定的な思いを表す回答が多い中で、進路に対しての意識は高かった。なんとかしたい、何かを求めているように思えた。 〈教職員の声から〉



※ 共通理解したこと

事例研究をとおして、教職員が共通理解したことは、まずは、「**教職員が子どもたちとつながること**」を意識して取り組んでいくことであった。そして、「**人とかかわることの楽しさや安心感を教職員が発信していくこと**」、「**自信をつけさせていくためのかかわりを工夫すること**」をめざした。

Q-Uの結果を見て、子どもたちの実態をうけとめないといけないとみんなが思った。それで個々の教職員がしっかりと関係をもっていこうとしてくれた。(校長)



取組の様子

1 みんなで心がけたこと、めざしたこと～子どもたちとつながる～

(1) 担任の取組～共に過ごし、共に考える～

① 日々ことから

担任は、一人一人の生徒とつながるために、共に過ごし、共に考えることを心がけた。一緒に時間を過ごすことが多い分、子どもたちをその場その場で具体的にほめることができた。お互いに気遣いをしながら過ごす関係の子どもたちであったので、集団として力が発揮できない面があり、担任は、要求したいことはたくさんあった。しかし、「だめ」と言うよりもほめることを優先させた。

そして、穏やかな雰囲気が集団に生まれ始め、修学旅行や文化祭の準備では、和やかに子どもたちが話し合う場面が見られた。また、担任は自分たちから動いている場面では、そこに一緒にいて雰囲気を後押しするような声かけを行い、できるだけ子どもたちの力で最後までやらせることを意識した。

本当は言いたいことはたくさんあった。でも、修学旅行の準備の時もあの子たちなりにがんばっていた。だから一緒にいてそれを見ていようと思って。「いい雰囲気だね」「頑張っているね」とその場において声をかけていた。(担任)



② 行事をとおして

2年生は、文化祭では、劇の発表や人権学習の成果をまとめた展示に取り組んだ。人権学習では、一人一人が課題を設定し、わからないこと、疑問に思うことを根気強く調べることができた。その際にも担任は、一緒に調べ、一緒に考えるようにした。また、複数の教職員が担任同様に生徒たちと一緒に調べてくれた。そうして、どの生徒も「よく調べている、考えている」と周囲の方たちから言ってもらえる展示を作り上げることができた。このことは、生徒たちに充実感を味わわせたと同時に「調べ方・課題の追究の仕方」を身につけさせることにもつながり、自信をもつことへの耕しとなった。

担任の先生は、人権学習の時もずっと一緒に調べていた。劇の発表ではちゃんとセリフも覚えて子どもたちと同じように参加されていた。子どもたちはうれしかったし、安心だったと思う。子どもたちとの距離が縮まっていったように感じた。(生徒指導主事)



展示はしっかりした内容のものができていた。子どもたちはやりきれた充実感をもっていると思う。教職員が共に考えて一緒に作っていったことは大きかった。(校長)



(2) 各教職員が取り組んだこと～立場や教科の特徴を生かして～

たくさんの教職員が、子どもたちとつながること、自信をつけさせるようなかかわりを意識し、それぞれの立場や教科の特徴を生かして取組を行った。

かかわりの力に自信をもてていない子どもたちであったので、かかわりの機会を増やし、子ども同士の認め合いが大切にされた。具体的な取組は次のようなことであった。

- 出題する漢字を事前に示して練習をさせ、小テストで自信がつくようにした。
- 良さや頑張りを見つけては、直接本人に伝えるようにした。
- 行事等にどう取り組ませるか、教職員間でよく話し合った。
- ペア活動を取り入れ、誰とでも関わり合える機会を増やした。
- 授業以外でも生徒の中に入り、コミュニケーションをとるようにした。

子どもたちの変化

1 自分と向き合い始めた子どもたち

修学旅行等の行事を経て、子どもたちの間の距離が縮まったことを担任は感じていた。成績のことと将来のことを何気なく会話をしている様子が見られるようになった。

また、生徒会選挙の立候補者を決める話し合いの時に、消極的な態度を表す子どもたちが多く中で、ある生徒が「自分もやるからみんなも一緒にやって。助けてほしい」と発言をした。それまで、お互いにあまり影響しないように、あるいは表面的にしかつきあえず、Q-Uのプロット図でもつながりが希薄だと思われた子どもたちが、少しずつ本音で話すようになっていた。

そして、生徒会選挙に3人の生徒が出ることになった。3人の生徒たちは、「自分たちはできない学年だと思っていた」と自信のなさを正直に語り、だから、「自分を変えたい」と思って立候補したと訴えた。自分と向き合い、そして、踏み出していく姿が、立会演説会の時にあった。

そのような演説の原稿を書く過程に、担任も含めて複数の教職員が、それぞれの生徒と対話をしながら、共にいた。

どうせ自分たちはできない学年と思われている。自信がないから、立候補にも踏み切れなかった。でも、立会演説会では、後ろ向きな自分を語り、これを機に変わりたいと言っていた。自分たちはできないということを受けとめ、そこがあって、踏み出していった。(担任)



2 主体的に動くことを知った子ども

秋になると部活動の中心は、3年から2年へと引き継がれる。小さな集団であるので、仕方なくキャプテンになってしまいかねない生徒もいた。しかし、ある生徒（プロット図では、学級生活不満足群にあり、自信のなさを見せていた）について、その部の担当の教員は、本人の覚悟が決まるまで待ち、一ヶ月キャプテン不在という状態になった。この生徒は、一ヶ月の中で決心をつけ、キャプテンを引き受けた。そして、黙々と練習する姿で、チームを引っ張っていると言う。

この子は、あまり表情に出さないけれど、自分がやっていることは間違っていないと確実に思っている。目が変わってきている。じっくり待ってもらったから、覚悟ができた。このことは、主体的に取り組んでいくことの核になること。自分よりも一年生がやった方がいいとも思っていただろう。それを待ってもらった、認めてもらった感じがしたのでは。(校長)



そして、今・・・

Q-Uを今とったら変わっていると思う。多少は自信が出てきていると思う。(担任)



【考 察】

○ 生徒理解の温かさ～みんなでQ-Uの結果を受けとめていくことから～

アンケートQ-Uには、子どもたちの主観的世界が表れる。予想外の結果が示されることもあり、教職員にとっては、向き合うのにエネルギーを要する場合がある。しかし、本実践では、生徒たちが表現した世界を丁寧にひもといて理解していこうとする姿勢と、「自分たちの理解は不十分であったのでは」「子どもたちは苦しんでいたんだ」等と子どもたちの実態に対する真摯な受けとめがある。ここには、生徒を理解する目の温かさがあり、これが本実践の基盤となっている。

○ 小規模校の良さを生かし、小規模校の難しさを越えていく

子どもたちの実態を共通理解した後、小規模校の良さ、全員の顔がわかることを生かし、どの教職員も自らが、子どもたちと「つながっていく」ことをめざしてかかわっていった。

つながるということに改めて、全教職員が意識を向けたことは、子どもたちにとって、学校の中で誰かとつながっている感じを味わわせることができ、学校で過ごす安心感を見出すことにもなったであろう。

また、小規模校では、人間関係が難しくなった時に、新たな関係を作っていくことは難しく、逃げ場を見つけにくい面があると思われる。そこで、教職員が子どもたちとつながっておくことには、大きな意味があると思われる。

○ 「共に過ごす、待つ」ことで自己肯定感を育てていく

本実践では、教職員が子どもたちと時間を共有することを大切にしている。悩んだり、葛藤したりする時間に一緒にいてもらえることは、思春期の子どもが、「自分とは」と考えて一歩を踏み出すためには大きな支えになったと思われる。

また、自信がない子どもたちに、「つきあいながら」「待ちながら」、課題をやり遂げさせることで、個々の充実感を高めていた。

「共に過ごしてもらえた」「待ってもらえた」「一緒に悩んでもらえた」、大切にしてもらった感覚が、子どもたちの自己肯定感を育てていくことにつながっていくのであろう。

3－（3）「学級集団づくり・学年経営で大切にしていること」

事 例 名
3－（3）① 中学校 「中学校1年生を中学生として育てていく」
3－（3）② 中学校 「少人数の学級をもった時に～新しい良さを見つけていく～」
3－（3）③ 高等学校 「普通高校で過ごす子どもたちと細やかにつながっていく」
3－（3）④ 高等学校 「3年間クラス替えのない子どもたちをつなぐ」
3－（3）⑤ 高等学校 「クラスの状態を判断し、子どもたちに考えさせていく」
3－（3）⑥ 小学校 「学年の力で学級を支える～小学校での学年経営～」
3－（3）⑦ 高等学校 「生徒たちをみんなでみる～普通高校での学年経営～」



学級集団づくりで大切にしていること 「中学校1年生を中学生として育てていく」

現在中学校1年生を担当しているA先生は、中学校三年間の基盤となることを学級経営の中で育てていきたいと考え、取組を行っている。



○ 中学校1年生を担当していて思うこと

こちらの言っていることをどう行動に移せばいいのか、その行動の意味は何か、わかっていないように思う。また、いくつかの小学校から入学してくるので、はじめの人間関係をどう築かせるかが難しい。中学生としての行動の定着や、人間関係等の中学1年生での学びが、3年生までの基盤になっていくので、中学1年生をどう育てていくかは大切だと思う。

1 生徒の立場で考えて伝える、行動の仕方を伝える～当たり前のことできるように～

A先生は、「1年生は中学校のことがよくわかっていないから、一斉に指示を出しただけでは、行動に移せず、取り残される子がいる。そして、自己肯定感を下げてしまうこともある」と感じている。そこで、生徒の目線になって、行動の仕方まで伝えるようにしている。

提出物を必ず出させる。保護者あてのプリントは、決まったケースに入れて持ち帰らせる。あいさつ、給食、そうじ等についてもその大切さを繰り返して言う。「1年生だから、丁寧に言うよ。2年生、3年生では当たり前にはできないといけないことだよ。そして、社会で生きていく力になることだよ」と意味づけをして伝えている。

2 生徒とつながる、生徒同士をつなげる～入学時の不安を支える～

A先生は、入学当初の子どもたちの表情から、不安の大きさを感じる。そこで、授業中に複数の友だちと触れ合える活動を意識的に入れている。また、A先生自身がとにかく生徒たちと話すようにしている。

学期が進んでも気になった表情があれば、すぐに声をかける。教科や部活動の担当に「うちの学級の子どうですか」と聞く。不安な子はいないかなあとアンテナを高くしておくことを大切にしている。「生活の記録」のノートも毎日出させるようにしている。子どもたちとつながる場でもあるし、子どもたちが発信する場を多くしておきたいと考えているからである。

3 子どもの成長する姿を保護者と共有する

A先生は、子どもたちの成長の姿、時に反省を促すようなこと等を学級通信に書いて、週に一回配っている。そして、保護者からも「頑張ったわが子へ」等のテーマで一行詩を書いてもらって、通信に載せている。一人では子どもの成長を見つけられないと思っているので、助けてもらって見つけていると言う。成長する姿を見つけることが、担任としての喜びだとA先生は言う。

【考察】

- A先生は、中学校1年生の入学時の不安を受けとめ、意味づけを丁寧にしたり、行動としてどうするかを教えたりしている。そのことが、入学したての1年生には安心感を与えるであろうし、学校に適應させていくことにもつながっていくと思われる。
- A先生は、「できない、わかっていない」と生徒たちを否定するのではなく、「なぜできないのか、わかっていないのか、どう成長させればいいのか」と考えている。そこから、どう教え育てていくのかという対応が生まれていると思われる。

学級集団づくりで大切にしていること 「少人数の学級をもった時に～新しい良さを見つけていく～」

現在少人数の学級を担当しているB先生は、少人数の学級にあわせた経営の工夫を考えながら学級集団づくりに取り組んでいる。



○ 少人数の集団を担当する時に思うこと

人間関係の動きが少ない。それは子ども同士には言わなくてもわかるという良さがあるかもしれない。でも、それは変化に気づきにくいことであり、相手の良さに気づくチャンスが少ないことでもあると感じている。

また、どうしても手をかけ過ぎてしまう。そんな中で、子どもたちの主体性をどう育てていくかが難しい。

1 お互いの新しい良さに気づかせる

B先生は、子どもたちがお互いの新しい良さに気づくチャンスを増やすために、学級独自の行事や体験をしかけている。できるだけ子どもたちに準備をさせて、そこに一緒にいて、B先生がまずは子どもたちの良さを見つけて言葉にして広げていくようにしている。

また、関係が変化しない分、子どもたちは、固定化したイメージでお互いを見てしまう。そこで、「構成的グループエンカウンター」のエクササイズを使ったりしながら、子どもたち同士がお互いを認め合う場面を意図的につくったりしている。

2 情報を共有する・変化を見逃さない

B先生は、以前「人数が少ないからよく見える」と思っていて、かえって子どものしんどさに気づけなかったことがあると言う。また、通知票を書く時に前回と同じ文章になってしまうことがあった。その時に「子どものことをよく見ていなかった」と感じたと言う。

そこで、たくさんの教職員から、いろいろな場面での子どもたちの様子を聞くことを大切にしている。また、教科担当に授業の様子を書いてもらうようにしている。（学校全体での取組でもある）これについては、子どもたちのプラスを見つけての記述が多いものの、気にかかる様子を見つけて書いてもらうこともある。いずれにしても終礼でありのままに読んで子どもたちに聞かせている。

3 待つ～手を出し過ぎないように～

B先生は、子どもたちの人数が少ない分、手を出し過ぎてしまう面があると考えている。そこで、子どもたちに課題を投げかけたら、十分に待つてやるのが大切だと感じている。放っておくのではなく、話を聴いて、その子が自分で悩んで決めていく過程につきあう、それを待つ。子どもたちが自分で決めて動くのを待つことで、主体性を引き出していきたいと考えている。

【考 察】

○ B先生は、子どもたちの新しい良さを見つけていこうとしている。子どもたちは成長していく存在。固定化した見方だけでとらえられていくと、人間関係は苦しくなっていくであろう。だから、新しい良さを見つけてもらえること、それに自分で気づかせてもらえることには、大きな意味があると考えます。また、B先生は、具体場面でもらえたその子の良さを言葉で伝えてるので、実感を伴って子どもたちの中に「自分の良さ」が入っていくことであろう。

○ B先生は、他の教職員から話を聞いたりして、子どもたちのことをよく知ろうとしている。そんな日々の積み重ねがあるから、的確な距離と時間をとって、子どもたちを待つてやれるのではないだろうか。

学級集団づくりで大切にしていること 「普通高校で過ごす子どもたちと細やかにつながっていく」

普通高校で担任をしているC先生は、生徒たちが希望の大学に進学していくことを応援しながら、社会に出ていくための力も育てていきたいと考えて学級経営をしている。



○ 普通高校で担任をしていて思うこと

生徒たちは、成績面で気持ちを大きく揺らす。学習へのつまづきを早く見つけて、細やかに支援していくことは、学校に適應するためにも大切。

早くから希望の大学を絞って勉強に取り組む生徒もいる。それは大切なことでもある。しかし、一つのことだけを見て、視野が狭くなったり、社会に出て働くための力がつかなかったりするのには残念。だから、いろいろな可能性に気づかせたり、社会人としてできて当たり前のことを教えたりしないといけない。



1 全員の子と回数多く面談をする、そのための工夫

C先生は、面談を短時間にして、その分、数多く全員の生徒と面談をすることを大切にしている。その子にあった学習課題と一緒に考えながら、数多く面談をすることで、子どもたちの不安を大きくしないようにと考えている。また、自分の面談がいつ回るかわからない、面談の約束ができない、約束しても守れない状況になると、生徒たちと関係を築いていくことも難しくなると考えている。

C先生が、全員の生徒との面談を短時間で行えるのには、そこに至るまでの準備がある。生活の記録のようなノートを生徒に書かせ、それを毎日提出させている。それを読むことで、生徒の様子や困っていることをとらえているので、面談で話すことが焦点化できていく。また、そのノートにコメントを返すことで、面談の代わりになることもある。

C先生は、面談の内容を毎回簡単に記録している。そうすることで、面談の内容がつながっていき、その生徒に継続した助言や支援ができていくと考えている。

2 解答用紙と一緒に細かく見ていく～できていることに着目させる～

C先生は、テストの解答が返ってきたら、その生徒ができているところにマーカーを引くと言う。そして、面談の時に解答用紙を生徒と一緒に細かく見ていきながら、「ここはできたね」と確認させてから、次は「ここをかんばろうか」と言っていく。特に成績が下がっている生徒には、できているところを見つけて、そこを確実に得意なことにしてやりたいと考えている。

3 視野を広げさせる

C先生は、1年の担任をした時には、生徒たちの視野を広げていくことを大切にしている。勉強に対する目的意識が高い生徒たちであるからこそ、いろいろな選択肢を知ってその中から自分で選ばせたい。そのためには、進路選択にまだ余裕がある1年生の時に多様な進路情報を伝えていくようにしている。

4 あいさつ、そうじ、社会に出て必要な力

C先生は、授業の始めや終わりに誰よりも大きな声であいさつをする。また、身だしなみや清掃についても「きちんとやろう」とよく呼びかける。これらは、社会に出た時、当たり前ができないといけないこと、また、社会で人から一番認められることだと生徒たちに時あるごとに伝えている。

行事で協力してやっていく場面では、集団で何かをやることの魅力や大切さを語ったりもしている。勉強以外での学校生活の楽しさも味わわせてやりたいと考えている。

また、「島根を背負って立つ」というくらいのプライドをもって、自分を高めていってほしいと伝えている。

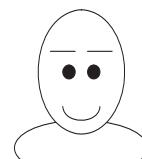
5 教室環境にこだわる

C先生は、落ちついて勉強に取り組むには教室環境が大切だと考えている。掲示物の配置は、年間を通して決めている。生徒たちが、教室のどこを見たら、どの情報があるかがわかるようにしている。

また、黒板がきれいであることには、こだわっていると言う。生徒たちは、毎時間黒板を見ている。その黒板がきれいであることは、勉強に集中するためにも大切なことだと考えている。

〈同僚の方のお話〉

C先生は、細かくどの生徒も見えて、同じ時間かかわっている。それは、とても平等なことだと思う。だから、どの生徒も自分をちゃんと見てくれている、大切にしてくれていると思っている。そのことを家で言うから、保護者からも信頼されていく。



【考察】

○ C先生は、解答用紙から見える姿、日々のノート、面談の様子等から、生徒たちを細やかにとらえている。そこには生徒たちを大切に思う気持ちが感じられ、その姿勢は保護者にも伝わっている。

○ C先生は、どの生徒とも同じように時間と場を共有するようにしている。このはっきりとわかる確かな平等が、生徒たちに「自分たちを見てくれているという安心感」として伝わっている。

思春期の高校生は、気持ちを揺らしやすく、大人の言動に敏感である。そんな時期の子どもたちだからこそ、大人が安心感を与えながら、支えていくことには大きな意味があると思われる。

○ C先生は、学習の課題を生徒たちと一緒に考えながら、大学進学に向けての支援を惜しまない。それと同時に社会生活の中で、当たり前にするべきことを語り、教えている。そこには生徒たちを一人の社会人として育ててやりたいという思いがある。

学級集団づくりで大切にしていること 「3年間クラス替えのない子どもたちをつなぐ」

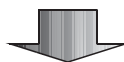
3年間クラス替えのない専門高校に勤務するD先生は、1年生を担当している。3年間同じメンバーで歩いていく子どもたちを、入学段階からどうつないでいくかを意識し取り組んでいる。



○ 専門高校で担任をしていて思うこと

本校の生徒は、卒業すると県内に就職をする子が多い。希望もそうだし、現実的にもそうである。ということは、この子たちが県を支えていると思っている。だからこの子たちががんばって欲しいし、自分にできることは何かと考える。科ごとに入学してくるので3年間クラス替えはない。学級が一つになれば大きな力となってプラスに働くが、そうでないと3年間大変だろうと思う。

だから一つにしたいと思う。



1 入学式

入学式の日には保護者が全員そろう。D先生はこのときが保護者と共通理解をし、同じ方向で子どもたちを育てていくチャンスだと考えている。

まず、保護者と生徒に向けて「自分のことは自分です」ということを伝える。「学校から配られるプリントは、生徒が自分で取って持ち帰ります。私は配ることはしません。一日の予定もホワイトボードに書きますので、生徒はそれを見て、必要なことはメモして、自分で動きます。私は予定を話したりしません。ですからご家庭でも、自分でできることは可能な限り自分でやらせてください。」と話をします。

そして、「週に1回、学級だよりを配りますので、それを読んで学校の様子を知ってください。たよりは一方通行になりますので、年1回、保護者のみなさまからも原稿をお願いします。」と伝える。

この保護者の全員そろった場で、保護者に担任の方針を知ってもらう。生徒は次の日から来るが、保護者がそろうのはこの日だけなので、特に保護者を意識して話をします。

2 学級だより

D先生は、学級だよりは学校と家庭を結ぶものだと考えているが、生徒同士を結びつける手段であるとも考えている。行事のときなどにたくさんの写真を撮り、担任が写真に楽しい吹き出しをつけて学級だよりに載せる。行事のときなどは、普段あまりかかわりのない子ども同士がいっしょに写真に写っていることも多い。そうすると、その写真をいっしょに写っている者同士が集まって、わいわい言いながら見ている。写真を生徒同士をつなげるきっかけとして使っている。

3 面談

学級の子どもたちと授業でかかわる時間が少ないため、個人面談は生徒と関係をつくる大切な機会であり、また、気になる子どもを支える時間でもあると考えている。

2学期の中間テストが終わったときには進級のことも含めて必ず面談を行うが、あとは不定期に行っている。不定期とは、気になる子が出てきた時に、その子だけでなく全員と面談をする。それは、その子が「自分だけ面談された」と思わないようにという配慮からである。

4 関係ができるのをじっくり待つ

D先生は自分の授業のときに、子どもを席を自由にして座らせることがある。これはその時点での人間関係を把握するためである。学級だよりや構成的グループエンカウンターを取り入れたりし、関係をつくるしかけはするものの、同じ出身中学校で固まりがちな1年生を無理にばらけさせたりはしない。基本的に普段の観察を通して関係を把握しながらも、子どもたちがたくさんの人とつながっていくのをじっくり待っている。

2学期の後半になって、新しい関係ができていくという。

「3年間同じメンバーなので、しかけをしながらも見守ってやると、しっかりとしたつながりができていきます。」とD先生は言う。

【考 察】

- D先生は、入学式の日、保護者全員がそろそろこの機をとらえ、自分の方針、保護者にお願いすること等をきちんと説明している。高校入学に少なからず不安を抱いている保護者からすれば、大きな安心感を得ることであろう。
- D先生は、生徒とかかわる時間が限られた中で、よく子どもたちを見て、子どもたちの状態をきちんと把握している。そのため、見守る支援や、しかける支援を的確に行うことができる。
- D先生は1年生の担任として、いろいろな中学校から集まって来ているということ、3年間同じメンバーであることを意識し、3年間を見越した学級づくりを行っている。

学級集団づくりで大切にしていること 「クラスの状態を判断し、子どもたちに考えさせていく」

高等学校で担任をしているE先生は、子どもたち自身にも学級をよくしていくことについて考えさせたり、子どもたちの気持ちを育てるような指導をしたりして、よりよい学級になるよう取り組んでいる。



- 高校生を担当していて思うこと
クラスがよい状態かどうかの状況判断が大事。クラスの雰囲気を感じとってその時必要な指導をしていきたい。
不登校を経験していた子どもが学校を休んだら、家庭訪問をして、しっかりつながっていきたい。



1 教室環境を整え、挨拶を行わせる

E先生は、整然とした環境で学習できるように、教室の机の配置については細かく指導している。また学習に集中できるように、教室の前には時計以外何も置かず、情報は教室の後ろに掲示している。

そして、挨拶をきちんとするように指導している。

2 クラスの状態を自分たちで話し合わせたり、指導を行ったりする

E先生は、今クラスがどんな状態かを生徒に話し合わせることをよくしている。

中学校の授業を見た時、生徒がグループで話し合うことができる様子を目の当たりにし、グループで話し合う活動を取り入れた。6人グループで話し合っているが、生徒はしっかり話ができる。ことあるごとに話し合いを重ねさせて、何回も何回も気づかせることが大事だと考えている。そのような過程を経ると、互いに目配せしてきちんとしようよという雰囲気が出てくる。

自分たちのクラスのよいところ悪いところを話し合うよう問いかけたら、いろいろな意見が出て、行事に向かってどう取り組んでいったらよいかの案が出てきた。そして、本当によい取組をして、生徒も満足する結果が出せた。

クラスの状態を点数化して考えさせたこともある。生徒がつけた点数を見て、「じゃあ、最高のクラスで卒業しよう、満点のクラスにしよう」と呼びかけた。

いじめが起きた時があったが、その時は、「絶対あってはならないことだ」ときちんと指導した。

雰囲気がよくない時に問題行動が出ることがある。そのような時も、話し合いを行ったり、クラスがぎすぎすしていると感じた時は、息抜きが必要だと思い、みんなで楽しみながらものをつくるなどの活動を取り入れている。このように、タイミングを見て指導を行っている。

3 人間の気持ちや話し方について学ばせる

E先生は、人間の感情についてロングホームルームで指導している。ふとした瞬間に感じるマイナスの気持ちを、人を傷つけずにどう収めるかということとはとても大事なことだと考えているので、どこに収めるかという話をしている。高校生とはいえ、自分の気持ちが感じられない若い生徒もいる。自分の気持ちがわかるようになると行動が変わってくるので、このような

指導をしていきたいと考えている。

また、話し方についてもアサーションの考えを取り入れて指導している。

E先生が自分自身を見つめて、「自分は素晴らしい人間でも何でもなくて、ネガティブな気持ちが出てきた時はこんなふうに収めている。ネガティブな気持ちをいい方向に変えていきたいと思っている」と話している。後ろ向きの部分をもちながらも、前向きにやっていくのが大事だと伝えている。

4 家庭訪問を積極的に行う

中学校の時、不登校を経験した生徒もいる。E先生は、そのような子どもたちが1日でも学校を休んだら、すぐに家庭訪問を行う。そして、「今日こんなことがあったよ。出ておいでよ」と声をかけている。高校で心機一転してがんばろうと思っている子どもたちの気持ちを大切に、学校とのつながりを感じさせ続けようと考えている。

【考 察】

- E先生は、教室環境を整えることを大切にしている。学習の場としての教室を整えることで生徒に集中して学習に取り組んでほしいと考えているからである。教室が整えられていることは、学習だけでなく教室での生活も気持ちよく安心して過ごせることにもつながっている
- E先生は、クラスの状況を見て、生徒自身にその状況についてグループで話し合いを重ねさせている。生徒は、自分たちがどう行動していけばよいかを自分たちで気づいていくことにより、主体的によいクラスになるよう行動している。生徒の主体性を育てる取組なのではないだろうか。また、息抜きが必要と感じた時は、クラスで楽しい活動の共有体験をさせている。
このような、E先生の、クラスの状態への的確な判断と柔軟な取組がよい学級をつくっている。
- E先生は、自分の気持ちのありようなどについて生徒に率直に語り、人間の気持ちについて考えさせている。思春期にいる生徒にとって、このようなE先生の姿勢や気持ちのもちかたを知ることは、一つのモデルとして価値あることだと思われる。
- E先生は、不登校を経験した生徒に家庭訪問を行っている。高等学校で、家庭訪問をするのは難しいことも多いと思われるが、生徒とつながることを大切にしたE先生の取組は、がんばろうと思っている生徒の支えになっていると思われる。

取組を通して、中学校で生徒が話し合いを上手に行っているのを見て、高等学校でも話し合いを取り入れたり、アサーションの考えを取り入れたり、よいと感じたことを指導に生かすE先生の柔軟な姿勢が感じられる。

学年経営で大切にしていること 「学年の力で学級を支える～小学校での学年経営～」

高学年で学年主任をしているF先生は、子どもたちに学年意識・チーム意識をもたせることを大切にして学年経営を行っていった。



○ 小学校で学年主任をして思うこと

小学校では、子どもたちがほとんどの時間を担任と過ごしている。学級がうまくいくのもそうでないのも担任次第となってしまうがちである。しかし、子どもたちに学級の一員であるという意識をもたせると同様に学年の一員であるという意識をもたせることによって、学級を越えて子どもたちが助け合ったり、よい意味で競い合ったりすることができ、どのクラスも共に成長していけると考える。

1 学校のリーダー・下学年のあこがれになるという意識をもたせる

高学年の学年主任だったF先生は、1学期の始業式後、学年集会を開き、子どもたちに「どういう〇年生になりたいか」と考えさせ、学年全員の前で意見を出させた。そしてその意見をもとに学年目標を決めていった。学級目標を決める前に学年目標を決めることにより、チーム〇年生という学年意識をもち、〇〇小学校を引っ張っていくリーダーとしての自覚をもって欲しい、下学年のあこがれの存在になって欲しいという願いがあった。

そして、定期的に学年目標の振り返りを学年集会の中で行っていった。

2 かかわりのモデルを見せる

F先生は、チーム〇年生として子どもたちがまとまっていくためには、学年部の教員のまとまりが必要不可欠であると考えた。また、子どもたちは大人が思っている以上に教員同士のかわりをよく見ており、気にかけていると感じていた。そこで、ちょっとした打ち合わせをクラス前の廊下で行ったり、意識してお互いの教室に顔を出し、教員同士が笑いながら雑談をしたりした。ときには学年集会の中で教員同士が真剣に議論している姿を子どもたちに見せたりもし、子どもたちに団結することや話し合うことのモデルを示していた。

3 学年の力で学級を支える～横割り活動～

ある学級の雰囲気が悪くなった時、その学級の中だけでそれを解決していくのは難しい場合があった。そんな時は行事の準備を利用したり、総合的な学習の時間の合同学習を使ったりして学級を解体し横割り活動を行った。そこで他学級から刺激をもらったり、学年のチーム意識を再確認したりすることによって、学級を立て直そうとする意識が子どもたち自身の中に働いていった。また、学年意識が根底にあると、互いに高め合おうとする気持ちが生まれ、よい意味での競い合いとなって、子どもたちの成長をより大きなものにしていくとF先生は考えている。

【考察】

- F先生は、子どもたちがどのように成長してほしいかという明確な願いをもち、学年当初から継続した手立てを行っていった。それが、子どもたち自身の学年目標の意識化を生み出している。
- F先生たちのモデルは、人間がお互いを信頼し、仲良くしたり向上したりしていこうとすることの素晴らしさを、思春期に入ろうとしている子どもたちに伝えており、その意義は大きい。
- 学年の中で助け合い高め合った経験は、子どもたちに自信と誇りを与えたと思われる。

学年経営で大切にしていること 「生徒たちをみんなでみる～普通高校での学年経営～」

普通高校で学年主任をしているG先生は、学年を一つのチームであると考え、先生も生徒もつながることを大切に学年経営を行っていった。

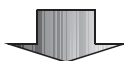


○ 普通高校で学年主任をして思うこと

高校生は社会性を育てないといけないと思う。生徒たちには誰に対しても同じ行動がとれるようになって欲しい。生徒たちにそれを求めるならば、担任は自分の学級だけよければいい、成績が上がればいい、という考えにならないようにしなければならない。

だから、学年の教員は学年全生徒の担任であるという意識をもって欲しいと考えている。

100点より100%を目指す子どもを育てる。



1 全員の担任であるという意識 学年集会 学年目標

学年主任だったG先生は、学年部の先生方に、「直接のお世話は自分の学級が中心だけれど、学年全員の担任だという意識をもって欲しい」と話した。

そして、定期的に学年集会を開き、学年全生徒に向けて、「挑戦すること」を伝え続け、毎月学年目標を立てて各教室に掲示した。このことによって、誰もが自分たちの学年を一つのチームだと考え、生徒と先生が学級の枠を越えてかかわっていった。

2 May I help you?～よき大人のモデルとして～

どの学級の先生も自分たちにかかわってくれるという姿を生徒たちは「よき大人のモデル」としてとらえ、生徒たちの中にG先生が言う「May I help you?」（周りに気遣いができる）の精神が生まれてきた。自主的に昇降口の雪かきをしたり、募金活動をしたり、下学年の活動を手助けしたり。そしてその姿は、やがて下学年のモデルとなっていった。

3 信頼の糸を紡ぐ

G先生は「先生と生徒が1対1の関係でつながっていることは基本だが、学年で学級で、困難に直面したとき、それを乗り越えるためには生徒同士ががつながっていることが不可欠である」と言っている。この学年のつながりの力が、学力も大きく伸ばしていった。

【考察】

- G先生の教師も生徒もつなげていこうとする取組が、学年全体の力（社会性、学力など）をつけていくことにつながり、また、それが個々の力を大きく伸ばす結果となった。
- 思春期にある子どもたちにとって、どんな大人と出会うかはその後の成長に大きくかかわっていく。G先生の取組によって、生徒たちは「よき大人のモデル」に出会うことができた。そしてその後の生徒たちの動きから、モデルを示すことの大切さを改めて感じた。

4 「校内体制を整えて 生徒指導にあたっている実践」

事 例 名

4－（1） 中学校

「全教職員で子どもたちを支えていくために」

～丁寧に着実に取組をつなげ、組織を活性化していく～

4－（2） 中学校

「生徒指導に学び合いを生かし、子どもを成長させていく」

～かかわる前よりもよい関係になることを目指して～



「全教職員で子どもたちを支えていくために」 ～丁寧に着実に取組をつなげ、組織を活性化していく～

【事例の概要】

「全教職員が全員の生徒にかかわる」という方針のもと、生徒指導上の課題の解決あるいは予防に向けて、組織で動いて対応することが定着している大規模中学校の事例。

【取組の実際】

※以下は、生徒指導主事の先生、教育相談担当の先生、養護教諭の先生、校長先生からの聞き取りを中心にまとめている。

1 同じ歩調で組織で動くために～全教職員が全員の生徒にかかわるための工夫～

「担任が一人で抱え込まず、全教職員が全員の生徒にかかわる」ことを生徒指導の方針の一つにしている。そのためには日ごろから生徒たちの様子を、みんながよく知っていることが大切だと考え、それに向けての取組が日々なされている。「協働の精神が取組の基盤になる」と管理職が、日々伝えている。

(1) 生徒の様子を共有すること

毎回の職員会で、各学年部、保健室、相談室の様子が、15分程度で報告される。「事前に学年の生徒指導担当が様子を把握しておく」「保健室や相談室は簡単な記録を示せるようにしておく」等の準備がある。時間の短縮、記録の簡略化によって、報告の場を継続させることができ、教職員全員が生徒たちの様子を共有する場が保障されている。

(2) 情報の共有～早く正確に～

生徒指導上の大きな課題が出た時等、情報共有が必要なことが起きた場合は、様式に従って記録をし、関係の教職員に報告することを徹底している。その記録をはさむファイルを他のことよりも優先して確認し、「学年主任、生徒指導主事、管理職」と回していくことが教職員に意識されている。

報告のもれがなくなる。わかっておかないといけないことがわかるようにしておく、未然防止とはならなくても課題が大きくなるはならないと考えている。

(生徒指導主事)

(3) 多様な立場の方とつながること、生かすこと

1年生には学級への支援員、相談室にはそこで中心となってかかわってくれている支援員がいる。休憩時間を生徒たちと共に過ごしてもらうこともあり、支援員が気づいたことから、生徒たちへ早期に対応できることも多い。そのため、教職員が支援員とつながり、情報交換がタイムリーにできることを大切にしている。また、記録を書いてもらっており、そこに書かれたことにどう対応したかを支援員に返していくようにしている。

- 報告書(記録)に書いてもらったことは、該当の学年部で見えすぐに対応できるようにしている。支援員さんには助けられている。自分たちが気づかないことにも気づいてもらうことが数多くある。(生徒指導主事)
- 支援員さんが、こうしてほしいなあと言われることを大切にする。相談したことが無駄ではなかったと思ってもらう。そのことの積み重ね。校長室に話しに来てくださいと言っている。(校長)
- 支援員さんとはとにかくよく話す。一緒に笑う。生徒たちのことで一緒に「うまくいかなかった」と言ったり、一緒に感動したり。(相談室担当)

(4) 動きがある組織にする

〇〇部会のようないろいろな組織があり、どうしても会合が多くなってしまふ。そこで、必要最

小限の会合で機能するために、どの会も「誰がどの対応をするか」を決めて終わる。それを主任や管理職が、「どうなっているのか」と確認するようにしている。そうすることで、組織に動きが生まれるようにしている。また、会の記録を関係の教職員に回すことを大切にしている。

何かあるとすぐに報告があがってくる。それが次の動きを見据えていくことにつながる。次のステップを生んでいくための動きを先生方がよく考えてくれている。それがこの学校の良さ。(校長)

2 課題を大きくしないことをめざして～日々の中で～

(1) 課題に気づく～アンケートQUの活用～

① 早期に対応する

全学年、年2回(6月、11月)アンケートQUを実施している。生徒たちが抱えている課題や学級の課題に早くに気づけるように、アンケート実施後の動きを校内で次のように明確にして、時機をとらえた対応を心がけている。

- Q-Uの回答の様子を集計に出す前に、担任が対応すべきことがないかを確認すること
- データが返ってきたら、※プロット図の※「要支援群」にいる生徒には、すぐに面談をすること
- プロット図の左側(※「侵害行為認知群」※「学級生活不満足群」)にいる生徒は、いじめられている可能性があるため、そこに配慮して観察や面談をすること
- 個人票は個別面談をしながら生徒に返すこと

※印の語句は、巻末の資料編参照のこと

② 学年部で学級の様子を共通理解する・支援する～K13法での事例研究の実施～

学年部が中心となって、学級の様子を※「K-13法」で事例研究をして、対応を考えていくことにしている。また、「K-13法」についての研修も行い、全員がそのやり方を理解できるようにしている。

学年で日にちを決めてもらって、どの学級も1時間くらいでできるようにと考えている。時間がかかると続かないので、いくつかの具体策が見つければいいことにしている。どの対応に効果があるかはわからないけれど、アクションにつながればいいと思っている。(生徒指導主事)

(2) アンケートの実施で安心感と抑止力を

アンケートQUとは別に、学校生活の中で困っていること等を尋ねる校内作成のアンケートを全校で実施している。また、日記(生活の記録のノート)にいじめられている等の訴えがあった時や、嫌がらせのような行為があった時等にも、該当の学年だけでなく、全校にアンケートを実施している。全校の問題としてみんなで考えることで、自分の訴えが受けとめてもらっているという安心感をもたせることができ、また、問題行動の抑止力にもなると考えている。

日記に安心して書いて、訴えてくれることが大きい。担任との関係ができてから日記に書いてくれる。早期に対応ができる。(生徒指導主事)

(3) 学校生活に向かう意欲を支える～生活のリズムを整えるために～

生活のリズムが整っていることが学校に向かう意欲につながると考え、小学校と連携した取組を行っている。中学校では、自分の生活をふり返って、自分の生活が見えるようにした個人カードを作成している。それを個々に記録させて学期に一回提出させている。

まずはカードを書いて、生活をふり返らなければ改善もないと考え、担任が丁寧に声がけをして、とにかく書いて提出させるようにしている。その結果、一学期に比べて二学期はほとんどの生徒が提出することができた。

どの学級もカードの意味を担任が理解して、頑張って回収してくれた。生徒たちも規則正しい生活に向けて意欲があるから、書いてくれたと思う。(養護教諭)

3 相談室経営の工夫～どの子も卒業式で巣立っていくために～

課題を抱えて、教室に入れなくなってしまう生徒もいる。その子たちを相談室を居場所として支えている。どの子も卒業式に参加して巣立ってほしい、学級に帰っていききたいという願いを基盤に相談室経営案を作成し、その案に沿って経営がなされている。また、相談室経営においても生徒指導の方針である「みんなで生徒にかかわっていくこと」が生きている。

(1) 相談室経営の柱～教室復帰をめざす場所として～

相談室は、「教室に入れない子の心の支えとなる場」。そして、目標はあくまでも「教室復帰をめざす場」であることを相談室経営の柱とし、そのことを全教職員で共通理解している。

相談室担当になった頃、相談室に対しての先生方の意識も気持ちもいろいろで、基本となるものがあると思った。いろいろな人の意見を聞いた。教室復帰をめざす場であることを柱として、どうしたらこの子を教室に帰せるのかを考えることにした。(相談室担当)

(2) 生徒・保護者と目標を共有する～教室に帰していくために～

① 保護者への説明

保護者に、相談室はどういう場かを説明して、理解してもらってから相談室登校を始めるようにしている。

保護者に相談室を理解してもらってから。適当にどんどん生徒が入ってきて、勝手に帰るような無秩序な場では、担任の理解も得られないし、出欠の確認、何かあった時の管理もできない。(相談室担当)

② 教室へと後押しをする時にすること

教室に戻っていけそうだと思う時に、生徒自身と相談をして、教室に入る時間を増やしていくことにしている。「朝礼は行こう」「給食を自分で取りに行こう」等と、集団に入る場面を本人の様子を見ながら少しずつ提案していく。

約束をしたら守らせる、守ったら「やったね」と言う。集会にはできる形で参加させるようにしている。集団に適応する力を高めておくことを意識している。卒業式に出席させたいという願いがある。(相談室担当)

(3) 担任とのかかわりを切らさない

教室復帰をめざす場所という相談室のあり方が徹底されているので、担任もその目標に向けて、「やっぱり自分の学級の一員」という思いで相談室登校の生徒にかかわっていくという意識が生まれている。また、相談室担当も担任の思いや願いを生徒たちに伝えるようにし、学級とのつながりを切らさないようにしている。そして、相談室にはどの担任も頻繁に来てくれ、教科担当の方からテストやプリントを相談室に届けてくれることが定着している。

一番心配しているのは担任の先生。願いももっておられる。担任が相談室に来ると生徒がぱっと明るくなる。だから、担任には相談室に来てくださいねと言う。(相談室担当)

プリントがちゃんとどの子にも忘れずに渡っていく。これは子どもを大切にしていくこと。(校長)

(4) こまめにケース会を開く

こまめにケース会を開くようにしている。タイムリーに開けるように集まれるメンバーが集まって、少人数でケース会を行うようにしている。該当の生徒の学年主任が相談室担当と連携をとって呼びかけている。

4 取組の基盤となること

(1) 保護者とつながる

保護者とつながることが、生徒たちを支える上では大切なことだと考え、「何かあれば電話ではなくて会って説明をする」「保護者が学校に来たいと言えば時間を相手にあわせる」等の姿勢が、教職員に広がっている。

また、機をとらえては学校の考えや方針を説明することを心がけている。特に1年生の保護者会では、中学校について知ってもらうため、「説明を丁寧にする、質問に丁寧にこたえること」を意識している。どの学年も学年だよりを出して、学校の様子を伝えている。

問題行動が少ないのは保護者が一生懸命に子どもたちを見てくれているからだと思っている。
(生徒指導主事)



(2) 日々子どもたちを育てる

いじめや不登校を防止するのは、生徒間に「受容」する雰囲気があることが大切だと考え、どの学年もお互いを認め合う雰囲気づくりをめざした取組を行っている。生徒会活動では「人権にかかわること」等をテーマに生徒たちが主体的に考える姿が見られる。

(3) ミニ研修の実施

職員会でミニ研修のような形の場を数多くもつようにしている。内容としては、子どもの発達課題の理解とその時々大人のかわり方等、子どもたちの健全な成長のために必要な知識であったり、教育用語の理解、アンケートQ Uの見方等であったりする。研修をとおして、生徒たちを理解する目を養っている。

教職員の力を高めておくことが、生徒たちの課題の予防や解決につながると考えている。

【考 察】

○ 生徒指導の方向性が共有されている

「全教職員が全員の生徒にかかわる」という方針が掲げられている。このことを具現化するために情報の共有の仕方、各部会の運営の仕方等がよく練られており、そしてそれらが、教職員に定着している。また、この方針は、相談室経営にも生きており、教室に入れない生徒をみんなで支えていく雰囲気へとつながっている。

方針がぶれずに共有されることで、教職員は同じ方向に向かって力を発揮していける。また、みんなで課題を抱えてもらえることの安心感は、教職員の取組を後押しするものと考えられる。

○ 相談室経営の方向性が共有されている

相談室の経営について、担当者が、校内のいろいろな声を拾い、方向性を示している。また、プリント等がきちんと生徒たちに渡り、担任も生徒の顔をよく見に行っている。子どもたちには大切にされている感覚が伝わっていくであろう。

相談室の経営において、秩序が大切にされている。秩序の中での生活を体験させておくことは、集団に適応していくためには大切なことであろう。

○ 支援員等を大切にしている、人材を生かしている

支援員等、非常勤で勤務している方の声をよく生かしている。多様な立場から生徒たちを見ることは、生徒理解が広がることにつながる。共に働く人を大切にする気持ちが、人材を生かすことにもつながっていた。

○ 保護者と共に生徒を支えていく

保護者に説明すべきことをきちんと発信している。保護者にあわせて、時間設定をして会う等、保護者と共に生徒を支えていくという姿勢がある。

○ 教職員の力を日々高めている

校内研修をとおして、教職員の力を高める努力をしている。そのことが、生徒理解や適切な対応につながり、いろいろな課題の未然防止になると考えている。

「生徒指導に学び合いを生かし、子どもを成長させていく」 ～かかわる前よりもよい関係になることを目指して～

【事例の概要】

教育委員会が全小中学校に「学び合い」を導入。その意向を受けて実践した。

その「学び合い」は、学習だけでなく生徒指導にも取り入れなければ本当の意味での実践にならないと考え、生徒指導に「学び合い」の考え方を取り入れていった。同時に、校内の人的な体制も整え、生徒にとって居心地のよい学校をめざした結果、問題行動や不登校が減っていった事例。

※「学び合い」の考え方とは

学校の存在価値は仲間とともに学び合うことにある。教師も子どもも、人やモノやことと「対話」し、多様な経験をもつ仲間と絆を深めながら様々な課題の解決に向け、共に助け合い、「協同」する。

佐藤雅彰 『中学校における対話と協同 「学びの共同体」の実践』(ぎょうせい)より

※具体的には

- ・グループで行う学習を全学級全教科で行い、1時間の授業に1回以上はグループ活動を取り入れる。
- ・グループは、男女二人ずつの4人組で、男女を斜向かいに座らせる。
- ・教師は、子どもと子どもをつなぎ、子どもと教材をつなぐ。教材を媒介にして子どもにかかわる。
- ・グループで話し合うことによって、自分の考えを深める。グループで話し合った後も、答える時も自分の意見(個人の意見)として述べる。

【取組の実際】 ※以下は校長先生と生徒指導主事の先生からの聞き取りを中心にまとめている。

1 教職員の配置と活用

主幹教諭の配置があり、その主幹教諭が特別支援教育コーディネーターをしている。特別な支援を要する子どもたちやいじめを受けた子どもなど、様々な配慮を要する子どもにかかわっている。

生徒支援加配推進者が1名おり、人権・同和教育にかかわることを行っている。

養護教諭の複数配置校であり、1人の養護教諭が通常の保健室経営を行い、もう1人がゆとりをもって、子どもにかかわったり、担任と共に家庭訪問をしたり、保護者と面談したりしている。

他に、1年生のクラスサポートティーチャー、教室に入れない子どもの学習支援をする学びいきサポートティーチャー等があり、これらの教職員の活用がうまくなされている。

2 生徒指導にも学び合いを

授業に学び合いを取り入れたのは大きな変革だった。そして、本当に学び合いをやろうと思うと、生徒指導も変えていかなければならないと考えた。

(1) 起きた出来事が、子どもが成長するための学びになるには

どのようにすればよいか考える

起きたできごとを解決することを目的とするのではなく、そこで起きたことを材料としてみんなで学ぶ姿勢を大切にしている。教職員は、その子どものために何が一番よいか、その子どもの何を伸ばしたいかを考えていく。そうすると、問題行動の一つ一つが学びの場になる。

〈例1〉けんかがあると、仲直りさせて終わりではなく、そのけんかが起きたことで、今までより一層、教職員とその子の関係が深まるように、その子同士の関係が深まるように、保護者との関係が深まるようにということを目指している。そうすると、どのようなかわりをしていくかが見えてくる。問題が起きたことがすべてプラスに転じるようにと考えていく。

〈例2〉学校内のある場所で問題行動が起きた時、罰としてその場所を子どもに使わせないようにしようとするのではなく、今よりも少し子どもの意識を上げるために何ができるかを探していく。

それを、一人一人の子どもに応じ、問題行動が起こるたびに一つ一つ全て考えなければならない。時間がものすごくかかる。単発的なことを解決するのではなく、半年くらいすると何かが変わる。(生徒指導主事)



(2) 教職員は子どもにどうかかわるかを吟味する

問題を起こした子どもに対して、このようなかわりをしていこうという一つの方針が決まれば、それを1週間1ヶ月と実行していき、その子どもがどう変わったかを見る。そして、結果が出なければ次の方針を考える。何度裏切られても根気強くその子どもにかかわっていく。

子どもたちが教職員が求める姿にならなければいけないという考え方でなく、その子どもが少しでもステップアップするようにと考える。全員がただ規律を守っているからよしということではなく、一人一人の子どもがどう成長しているかが大事になってくる。

何よりも、「先生って信じられる」と子どもが認知してくれることが大切である。そのためには、子どもの側に立った指導が必要である。子どもがある行動をとるには必ず背景があるので、その背景を知る努力をしなければならない。

子どもに対応するときは、例えば学習を教えてほしいと言ってきた子どもに対しても、学習を教えるという事柄を媒介にして、子どもとの関係をよくしていくことを第一義としている。

〈例1〉教室で不応を起している子どもが登校してきた時、「よく来たね」と自分の嬉しさを伝えていく。また、授業中子どもが教室から出てきた場合、つい自分の思いを口にして「教室に戻りなさい」と言ってしまうが、この子どもに何をしていくかを考えると、声のかけ方が違ってくる。

〈例2〉担任であれば、こころの教室(後述)に行っている子どもに、朝会いに行って挨拶をしたり、帰りに行って「明日も元気で。待ってるよ」と挨拶したりする。それを半年続ければ子どもは変わってくる。そんな小さいことをしていくことが大事である。根気強く続けるしかない。そのようなかわりをせずにて、教室に戻るように言っても子どもは戻らない。

「静かにしてください」と生徒会役員が言うと、すーっと静かになる。それが自然の姿だと思ふ。ぴしゃっと静かになるのは怒鳴られるという恐怖心があるから。教員が「静かに」と怒鳴ることで生徒会役員のメンツをつぶしている。教員に言われなくてもなくても仲間の声に耳を傾ける子どもが育ってほしい。(生徒指導主事)



人間関係は相互作用だと思っているので、教師だけが子どもを変えて、自分は変わらずに影響を受けないなんて考えられない。生徒へのかかわりに困った先生が相談にくると、いい勉強をしたねと伝える。どうかかわろうかと考えることによって自分が変わっていく。そして、かかわることによって子どもが変わっていく。お互い影響を受け合って変わっていく。教師が変わらずに子どもだけを変えるなんておこがましい。苦勞した分だけは教師は生徒から何かをもらっている。何とかしようと思ふでかかわって子どもがよくなったのなら、それはあなたの宝物でしょうと伝えている。(校長)

このような取組を重ねていった結果、極端な言い方をすれば、教職員の大きな声が聞こえなくなったという。学び合いの授業をして、授業の反省をする時は、子どもの学びの様子を中心にすえる。どう学んでいたか、どんな発言をしていたか、隣の子ともとどんなかわりをもっていたか、誰がそこにどういう支援をしたのかということを見ていく。そういうことを繰り返していくうちに、教職員全体が穏やかになっていった。

生徒指導全体の方針は、そう変わるものではないけれど、一つ一つの問題の解決に向けて動き出す方向が徐々に変わっていったと思う。

授業を通して、教師が柔らかくなってきたことは実感している。子どもも教師に敵対的ではなくなってきたし、表情が明るくなった。教師と生徒、生徒同士、柔らかい関係が大切だと思う。(校長)



教員の要求レベルは高い。例えば、レベル2のところにいる子どもは、教員の要求するレベル7まで行く間はずっと怒られっぱなし。この子は今どのステップにいるか分析して、一つでもステップが上がれば成長だととらえ、ほめていきたい。

1年生はまだ未熟。人への配慮などを知らないので、いろいろな問題の度に問うていく。3年生になると、人への小さな配慮ができるようになっていく。「学び合い」が積み重なって、3年生が一番よくなる。(生徒指導主事)

3 こころの教室の運営の工夫

不登校の子どもや教室に入れない子どものための部屋（「こころの教室」）を作り、一人の教員をその部屋の担当にした。普通なら、授業の空いている教員が入れ替わり立ち替わり入っていくが、その部屋にいる子どもたちは情緒が不安定であるがゆえに、その部屋に在るのであり、次々と入れ替わる教員と人間関係が簡単には結べない。そこで、担当制とした。

当初「そんなことをしたら二度と教室に戻れない、二度と立ち上がれない」という声があったが、2年3年経つうちに誰も文句を言わなくなった。その部屋で過ごし、教員が一生懸命かかわった子どもたちは、教室に帰ったり高校に行ったりしている。不安定になっている子どもには、居心地のよいところを提供することによって、自らの力で変わっていくのではないかと考えてやっている。

4 保護者へのかかわり

家庭へのアプローチも積極的に行っている。年度当初に、校長が、保護者にかかわる時は、最後に「ありがとうございました」と保護者に言ってもらえるかかわりをするようにと話している。かかわる時には「傾聴・面談・迅速」を大切にしている。できたら教員二人で、とにかく家まで行って、保護者の思いを聴くようにしている。そして、子どものよい点も伝えている。

〈例〉問題行動のあった子どもの保護者に、「お母さんにはお母さんの思いがあるでしょう、聴かせてもらえませんか」と語りかけた。お母さんは、泣きながら今までの思いを語られ、面談の終わりには、「ありがとうございました」と言われた。ここから、学校と保護者の連携が生まれた。

もう一つは、学校で取り組んでいることを保護者に伝えることを大切にする。「今、子どもさんのこんなこともいいです、今、学校でこうやっています」ということを伝える。小さなことだが、それを積み重ねれば保護者が学校と歩調を合わせていくようになる。

保護者には、「こういうことがあってけんかをしました」「こういうことがありました、ご指導ください」という報告ではなく、「こういうことがあって今がんばっています。今、こうしています」というよい報告、希望の報告、ケアをしていく報告をするために、足を運ぶ。

「学び合い」のやり方は「問題解決」ではない。自分とその子をどうつなぐか、自分と保護者がどうつながるか、保護者とその子どもをどうつなぐか、そう考えたらやることが必ずある。毎日1回話をするとかだったらできる。それを続けたら、何かが見えてくる。(生徒指導主事)



5 学年部で取り組む

何か問題が起きると、生徒指導部に判断を仰いでその指示に従うのではなく、学年主任がこのよ

うに子どもを育てたいという思いをもってリードし、学年部で検討してかかわるようになった。そうすることにより、一人一人の教職員の力量もアップしてきた。

6 継続していくことの難しさ

毎年教職員の異動がある中で、このような学習指導や生徒指導を継続していくことは、簡単なことではないという。これまで述べてきたようなかかわりや、ニュアンスを伝えていくのが難しいという。生徒指導の会で学校全体の方針を伝えているが、実際に生徒へのかかわりで困ってみて初めてわかるのではと考えている。

学び合いに対しても様々な考えの人もいる。先進校にいた方のアドバイスは必要だと思われる。

〈まとめとして〉

思春期のこの時代、男女で語り合うということはこの時期の子どもたちがクリアしなければならぬことで、それができるとしてストレスが下がるのだと思う。卒業生も、「自分にとって4人グループで話すのはよかった。それがなければ絶対に話すことのない人と話せた」と言っていた。

結局、教室の中で、関係の輪が広がるのだと思う。それは、過ごしやすさにつながっていくのではないかと。そして、それが、問題行動の歯止めになったり、積極的な生徒指導になっていたりするのではないかと。 (校長)

学校で不適應になって教室に入れなくなる子どもがいると、教室に入れたいというのが教師の心理。しかし、そこで無理をして傷つくことによって、その子どもたちが中学校を出て行った時に、引きこもりになるようなことは絶対したくない。

中学校の時に、子どもがかかわるのは、父親・母親・教師しかいない。その大人とかかわってみて、自分のことをしっかりよく見てくれるとか、居心地がよくなったとか、「ああ、大人って信頼できるなあ」ということを感覚的にもって中学校を卒業してほしい。

もし、大人への不信感をもったまま職場で大人とかかわると、常に不信感で見てしまう。大人に可愛がられるために、大人との信頼関係を築かないといけないと思っている。(校長)

【考察】

○ 生徒指導に「学び合い」の考え方を徹底して取り入れ実践しようとしている

この学校では、問題が解決すれば終わりという生徒指導ではなく、その問題を通して生徒に何を考えさせるのか、何を学ばせるのかということ徹底して考え、そのために教職員はどのようにかかわっていったらよいかを模索している。このありかたは、即効性のあるものではなく、地道で時間のかかるものであるが、本質的な生徒の成長を導くものとなっている。また、教室に生徒同士の関係の輪が広がって、それが生徒の過ごしやすさや問題行動の抑止力になっている。

○ 全てのかかわりは、生徒と教職員、保護者と教職員の関係をよりよいものにするために行う

学習をする時であっても、問題について話し合う時であっても、それらを媒介にして、かかわる前よりもかかわった後の方が、教職員と生徒、教職員と保護者の関係がよくなることを目指している。そのためどのようなかかわりをしたらよいかを考えられている。このような姿勢により、この学校では生徒や教職員の表情が明るく柔らかくなり、結果として問題行動や不登校が減ってきている。

根底には、学校での安心感や居心地のよさが生徒の成長力を引き出すという考えや、大人への信頼感をもって社会へ向かってほしいという願いがある。

○ 校内の人材を有効に有機的に生かしている

校内に支援員等たくさんの人材が配置されているが、それらの人がそれぞれの役割を適切に果たしたり、生徒に関するそれらの人の気づきを的確に指導に生かしたりして、組織的な活用がなされている。

5 「保護者との関係づくりの工夫」

事 例 名

5-（1） 高等学校

「自らも動き、何度も言葉を交わして、心を通わせる」

～人を大切にする姿勢は自^{おの}ずから伝わり、信頼感を生む～



「自らも動き、何度も言葉を交わして、心を通わせる」 ～人を大切に^{おの}する姿勢は自ずから伝わり、信頼感を生む～

高等学校の管理職であるA先生が、日々の学校運営の中で保護者との連携を図っていった実践。

1 迎えること・送ることを大切にする

A先生は、いつでも部屋のドアを開けている。誰でもいつでも話しに来てよいように迎える気持ちを表している。また、訪れた保護者を自らも玄関まで出て、姿が見えなくなるまで送るようにしている。A先生自身が会社訪問をした時、その会社の担当者がずっと送ってくれた経験から、誰に対してもそのようにしている。

もし、保護者が電話で抗議するようなことがあれば、学校に来ていただくよう話す。何回も何回も来ていただいて丁寧に学校の考えを説明する。そのうちに、抗議をしていた保護者も気持ちがほぐれ収まってくる。何回も会っていると、家族のような気持ちになってくる。

いろいろなことは毎日起こるが、会う回数を重ね、言葉を交わせれば、よい関係ができてくると考えている。

2 機会を捉えてあらかじめ学校と保護者の在り方を示す

A先生は、保護者が集まる研修会や地区会の折に、「子どもが目指す目標に向かい、子どもを真ん中にして、子どもと保護者と学校と三人で歩きましょう。学校と保護者は向き合うのではなく、一緒の方向を向いて歩きましょう。向き合うのは親子でしてください」と必ず話す。あらかじめ、同じ方向を向いて手を携えていくという学校と保護者の在り方を示している。

3 対応すべき時はすぐ動く～判断の基準は“生徒”～

A先生は、何か問題が起きた時、対応すべきと判断したらすぐに動くようにしている。出かけた方がよいと判断すればどんなに遠くてもその日のうちに出かけることにしている。足を運ぶ、誠意を示す、必要があれば謝罪する。そうすると、多くのことは大きな問題にならないと考えている。

判断は、自分の経験によって鍛えられた直感を信じるが、その判断が難しい時は、マイナス思考になりがちな一人での夜の判断は避け、朝考える。それでも、難しい場合は、専門家に知恵を借りる。

生徒にとって意味があるかどうかを考えると、悩んでも解決への道筋が見えてくると考えている。

4 自分を知ってもらおう

A先生は、自分の考えを学校だよりに書き、またそれをホームページにアップしている。始業式や終業式などで生徒に話したことも学校だよりに載せている。また、保護者に見てもらいたい文書は色のついた用紙に印刷して配布している。

5 生徒の様子を知るために足を運び～行くことは“最大の肥料”、行けば見えてくる

A先生は、部活動の大会や発表会に足を運び、保護者と一緒になって声が枯れるまで応援することにしている。子どもの部活動の応援に一生懸命な保護者と心を通わせることができる時であると考えている。

また、生徒の家が災害に遭った時なども、その場へ行って、自分の目で確かめたり話をしたりする。生徒や家族のつらさを肌で感じたり、生徒がその地域でどのように過ごしているかを確かめたりすることができる。このような時に、管理職が来たということは人づてに伝わり、保護者や地域からの信頼感を生む。

【A先生の心に残る言葉や出来事～今の思い～】

- ◇「どんな子も一生懸命だから、声（肥え）をかければ育つ」「農作物の最大の肥料は農夫の足音だ」
- ◇「包帯のような嘘で守っている子ども」
～嘘をつく、その心の奥にある悲しみを取り除いていきたい。
- ◇「カーリングでストーンを投げた後、何もできないがずーっと見ている」
～教職員は『見守る』ということしかできないかもしれない。他校へ行った生徒もそのように見守りたい。
- ◇「私への恩は、あなたにしか救えない人に返して。そうして歴史は動いている」
～今、自分がやっていることは、恩をくださった方に“返して”いることだと思う。
- ◇「不安な気持ちで異動先に向かった時、『待っていたからね』と迎えてもらった嬉しさ」
～新しい先生や新入生を「待っていたよ」と迎える。自分がしてもらって嬉しかったことを人に返していきたい。

【考 察】

- A先生の実践は、A先生自身がこれまでの経験の中で得た貴重な学びや、心に深く刻まれた喜びを、保護者との関係づくりに生かしているものである。平素から人を迎え送ることを大切にしていること、課題への対応のために動くこと、生徒の様子を知るために動くこと、自分を知ってもらうこと等、自身の体を動かし、自らの心を開いてかかわりを生み出しており、それが大きな信頼感を生む結果になっている。

- 課題に対応する際に支えとなること
～多くの実践の中で
大切にされていたこと～

- 事例を自分の取組に生かす
～事例集を活用した自己研修
・校内研修のプログラムの提案～

〈巻末資料〉

～事例集の中で使われている
アンケートQUの用語について～



「課題に対応する際に支えとなること」 ～多くの実践の中で大切にされていたこと～

今回実践を紹介して下さった学校や先生方が、共通して大切にされていたことがありましたので、紹介したいと思います。

◇ 取組の基盤となっていたこと

- 学校が、子どもたちにとって安心・安全な場所であるための取組が日々行われていた
- 教職員が子どもたちとつながること、子どもたちからの信頼を得ていた

- ・ 学級集団づくりにおいて、多くの実践が教室の環境を整えることに力を注いでいた。教室の美化、備品等の整備という物的基盤を整えることと、子どもたち同士をつなげ、互いのよいところを認め合わせる等を通して、人的基盤を整えることの両面に取り組んでいた。そこから子どもたちにとって学校が安心・安全な場であろうとしていた。
- ・ 登校しにくい子どもたちに、教職員が粘り強く少しずつつながっていき、学校は安心できる場であることを伝え続けていた。
- ・ 自信がもてない子どもたちや自己表現が苦手な子どもたちと時間や体験を共有することで、教職員が子どもたちにとって安心できる存在であろうとしていた。
- ・ 教育相談、個別面談等で、子どもたちの話や思いを聴くことが大切にされていた。また、生活の記録、連絡帳をとおして、一人一人の子どもたちとのつながりを深めていた。特定の子どもだけでなく、どの子どもとも日々つながり続けようとし、子どもたちからの信頼を得ていた。

◇ 教職員の姿勢、担任の姿勢～子どもたちの見方・子どもたちへの思い～

- どの子どもも愛おしむ、行動の背景を知ろうとする姿勢から、かかわりが生まれていた
- 学級の実態を受けとめ、真摯に自らの指導をふり返る姿勢から、かかわりが生まれていた

- ・ 「成長力を信じる」「みんなかわいい」「子どもたちってすごい」「子どもたちは成長の途上にいる」これらは、実践の中で聞かれた言葉であり、実践を提供してくれた教職員の子どもの見方の根幹となっているものであると思われた。どの教職員も一貫して子どもたちを「愛おしむ」姿勢から、かかわりを生み出していた。
- ・ なぜできないのか、何が苦しいのかと子どもたちの行動の背景を知ろうとすることが、不安や抵抗感の理解につながり、適切なかかわりが生まれていた。
- ・ アンケートQ1を活用した実践では、客観的に示されたデータをもとに学級の実態をありのままに受けとめ、自らの指導を真摯にふり返る姿勢があった。その結果、子どもたちの実態と「ずれない指導が生まれた」と語った担任もいた。

◇ 教職員の姿勢、担任の姿勢～子どもたちのモデルとなる・子どもたちと対峙する～

- 教職員が見せるかかわりが、子どもたちのモデルとなっていた
- 受けとめつつ、対峙していくことで子どもたちを成長させていた

- ・ 複数の担任が、子どもたちの行動の背景を理解したり、思いを受けとめたりしながらも、伝えるべきことはきちんと伝えていた。子どもたちを大切にしながらも叱るべきことは叱り、教え育てていく姿勢を示していた。
- ・ 教師が自らの動きで、子どもたちに行動としてのモデルを示し、それを見て学んだ子どもたちが、同級生や下級生に適切なかわりをしていった実践があった。
- ・ 担任が校種を問わず、子どもたちによく語っていた。社会人としてどうあってほしいかという願いや自らの失敗した姿を語り、自己開示する姿が、子どもたちには信頼できる大人として映っていた。

◇ **今の子どもたちの課題に視点をあてたかわり、成長を引き出すためのかわり**

◇ **発達の段階をふまえてのかわり**

- 感情の理解、言葉と行動の育成に着目することで、子どもたちの苦しさを支援していた
- 行動の仕方を繰り返し伝え、規律のある集団を育てていた
- 子ども同士の認め合いで自己肯定感を育てていた
- 登校しにくい子どもたちの成長を引き出すかわりが工夫されていた

- ・ 自己肯定感が低いと言われる昨今の子どもたち。自らの感情を受容する力が弱いことも一因と言われている。そこで、プラスの感情だけでなく、マイナスの感情も含めて自らの感情について考えさせる取組が、各校種で発達の段階に応じて行われていた。
- ・ 感情を言葉とつなげる、自分の気持ちに向き合わせる取組で、感情をコントロールする力、他者を理解する力を定着させている実践があった。これらの実践はいずれも根気強く、繰り返し場面をとらえて、子どもたちに考えさせていた。
- ・ 行動の仕方がわからず、集団に適應できない子どもがいる実態から、子どもたち自身に自らの課題に向き合わせ、どう行動するかまで考えさせ、行動の仕方を教え育てていた。
- ・ 授業の中で、「時間を守る」「人の話を聞く」ことに徹底して取り組んでいる実践があった。そこから、規律のある集団が生まれていた。
- ・ 教師が子どもを認めることは大切、しかし、それ以上に子ども同士の認め合いによって、教室で過ごすことが不安な子どもの学校生活が安定していった実践があった。また、認め合いが生まれる、どの子も大切にされる雰囲気、安心感のある学級をつくっていた。
- ・ 登校しにくい子どもにかかわる際に、本人の自己決定が大切にされていた。しかし、ただ決めなさいと言うのではなく、十分な理解をした上で、本人の成長を引き出せそうなことがらを具体的に提案し、そこから選ばせる等をしていた。
- ・ 登校が始まってからも少しずつステップアップさせるかわりをして、継続的に成長を引き出していた。

◇ **複数の教職員による連携、組織づくりの工夫**

- 教職員のコミュニケーションの充実が、児童生徒理解を深化させていた、教職員の取組への意欲を支えていた
- 複数で連携して取り組む、組織で対応していくための工夫がなされていた
- 多様な立場（専門機関、各支援員等）の取組を生かす工夫がなされていた

- ・ 同僚と話すことで、子どもたちの理解を広げたり、深めたりして、その時にあった対応が柔軟に生まれていた。また、話すことが、役割を分担して取り組んだり、チームで取り組むことにもつながり、教職員の取組への安心感となっていた。
- ・ 情報の共有が継続して行われることが、複数の教職員の連携や組織の活性化につながっていた。また、その仕方については、各学校の実態にあわせて工夫されていた。

- 子どもたちの課題が複合化しており、学校では専門機関や各支援員等からの支援を受けることが多くなっている。多くの実践が、これらの人との情報の共有の仕方に工夫がなされていた。また、相手の話を聴くことに心を砕き、それが校内での働きやすさにつながり、人材を生かしていくことにもなっていた。

◇ 記録の効果

- 記録をつけることで、教職員の連携が図れていた
- 記録をつけることで、子どもたちのその時の実態にあったかかわりが生まれていた
- ・ 気にかかる子どもについてのかかわりの様子、その時に感じた子どもの様子等を記録し、それを共有している実践が複数あった。複数の教職員がかかわる場合、その記録が継続的な対応やその時にあった対応を生み出していた。また、対応をした後の子どもの様子をとらえることにもつながり、対応のふり返り、修正が生まれていた。
- ・ 支援員やスクールカウンセラー等と時間の共有が難しい面がある。そこで、かかわりの様子や子どもたちの様子を記録してもらい、そこでわかったことを早期対応につなげていた。
- ・ 担任が、面談の日時や様子を記録している実践があった。子どもたちの変化を的確にとらえることにつながっていた。

◇ 管理職のリーダーシップ、リーダーとなる教職員の存在

- 教職員の声を聞き、生徒指導の体制等の方向性を定めていた
- 管理職のリーダーシップが取組を支えていた
- 校内研修を企画して、日々教職員の力を高めていこうとする意識があった
- 管理職に人材を育てていくという意識が見られた
- ・ 校内の声に耳を傾けながら、生徒指導の体制や相談室経営の方向性を定め、それを管理職や主任の立場の教員がはっきりと示していた。このことから、組織での動きが生まれ、教職員を孤立させないことや子どもたちに多様なかかわりを提供できることにつながっていた。
- ・ 複数の実践の中で、「管理職に支えられた」という言葉に出会った。また、子どもたちの状況を管理職がよく把握しており、その時その時で適切な助言を与えていた。
- ・ 「みんなでがんばっていこう」「職員会を学びの場としよう」「保護者には自分が会おう」等、管理職の積極的な働きかけや雰囲気づくりに支えられた実践があった。
- ・ 管理職や主任が、校内研修を企画して、教職員の力を高める努力をしていた。
- ・ 管理職が、生徒指導主任・主事や学年主任の力を高めていくことで、校内体制を充実させようとしていた。校内の人材を育てていくという意識が見られた。

◇ 保護者との関係づくりの工夫

- 保護者からの信頼を得ていくために細やかな工夫がなされていた
- 受信と発信の両面をすることで、保護者とつながっていた
- ・ 保護者の不安を否定することなく聴き、受けとめていく姿勢があった。また、保護者の都合に合わせて話し合う等、相手の立場に立って考えようとする姿勢があった。
- ・ 学級だより、学校だより等が頻繁に出され、日頃から、保護者に学校の様子を伝えて、信頼を得ていく努力がなされていた。また、入学式等の学校行事や学年会の場面をとらえて、学校運営や学級経営の方針がきちんと説明されていた。出会いの時から、保護者の信頼をどう得ていくか、よく考えられていた。
- ・ 連絡帳を通じて、保護者と日々つながっている実践があった。

「事例を自分の取組に生かす」 ～事例集を活用した自己研修・校内研修のプログラムの提案～

ここでは、校内で、あるいはご自分でこの事例集をもとに研修していただく方法を提案していきたいと思います。



ひとりで行う 自己研修のための研修例		複数で、校内で行う 校内研修・ケース会等の研修例	
〈力を高める〉	〈課題への対応を 考える〉	〈力を高める〉	〈課題への対応を 考える〉
研修プログラム例① 研修プログラム例②	研修プログラム例③	研修プログラム例 ④-1、④-2 研修プログラム例⑤	研修プログラム例 ⑥-1、⑥-2

☆ ここから提案するプログラムでは次のワークシートを使用するものがあります。

ワークシートA

事例を読んで

i) 「いいな」と思ったこと・ヒントになりそうなこと〈理由もあれば〉

ii) 「これはやっている!」と思ったこと

iii) 「やってみたい!」と思ったこと

ワークシートB

今後やってみたいこと

【課題と感じていること】

【教師の願い】

【こんなかわりをしてみたい(大切にしたいこと)(誰が/いつ)】

〈ひとりで 自己研修のために〉

研修プログラム例① (自分のペースで)

- 興味がある実践を選ぶ
- 実践を読んで、ワークシートAを記入する

研修プログラム例② (自分のペースで)

- 「課題に対応する際に支えとなること～多くの実践の中で大切にされていたこと」(第一集P67～P69、第二集P72～P74)のページを読む

研修プログラム例③ (自分のペースで)

- 今、抱えている課題に対応している実践を選ぶ
- 実践を読んで、ワークシートAを記入する

〈グループで、みんなで、校内研修で〉

研修プログラム例④-1 ～付箋を使って～(40分程度)

☆研修のねらい

- 生徒指導、学級経営上の課題への取組のポイントを知り、課題対応の力を高める

☆準備物

- グループ分け(事前に同じ事例を選んだメンバーごとにグルーピングしておく)
- 模造紙(グループに1枚)、付箋(人数×5枚)、マジック、タイマー
- とりあげる事例(選んだ事例)のページを人数分印刷したもの
ただし、考察のページを印刷せずに話し合うこともできる

研 修 の 流 れ	時 間	留 意 点・備 考
1 研修のねらいと内容を知る	5分	○ グループのリーダーが流れを確認する。
2 事例を読む 付箋に書く	15分	○ 事例の中から「この取組はよいな」という点に絞って記入する。
3 付箋を出し合う	20分	○ 一人ずつ簡単な説明を付け加えながら付箋を貼っていく。その際、全員に発表の機会が保障されるように、一人一枚ずつ順番に貼っていくようにする。 ○ お互いに聴き合うことを大切にする。 ○ 出された付箋をグルーピングしてまとめをする。
4 感想を伝え合う	5分	○ お互いに聴き合うことを大切にする。



研修プログラム例④-2 ～ワークシートを使って～ (45分程度)

☆研修のねらい

- ・生徒指導、学級経営上の課題への取組のポイントを知り、課題対応の力を高める

☆準備物

- ・事前に選んでおいた3つ程度の事例を人数分印刷したもの
- ・ワークシートA (人数分)

研修の流れ	時間	留意点・備考
1 研修のねらいと内容を知る	5分	○ グループのリーダーが流れを確認する。
2 3つの事例から一つを選ぶ	10分	○ 事例を選んだところから丁寧に読み始める。 ○ リーダーは時間配分を板書しておくといよい。
3 ワークシートAを記入する	10分	○ 事例から参考になるポイントを見つけていく。
4 選んだ事例ごとにグループをつくり話し合う	20分	○ ワークシートAをもとに自分の考えをグループのメンバーに伝えていく。 ○ お互いに聴き合うことを大切に、自分の考えを確かめたり、他のメンバーの考えを参考にしたりする。

研修プログラム例⑤ (1時間程度)

☆研修のねらい

- ・生徒指導、学級経営上の課題への対応を支えることを意識する

☆準備物

- ・事例集「課題に対応する際支えとなること」
(第一集P67～P69、第二集P72～P74)を人数分印刷したもの

研修の流れ	時間	留意点・備考
1 研修のねらいと内容を知る	5分	○ グループのリーダーが流れを確認する。
2 「課題に対応する際支えとなること」の7つテーマ(第一集)、8つのテーマ(第二集)から一つを選び、テーマ別にグループに分かれる	10分	○ 7つ(8つ)のテーマから「自分が今、特に大切だと思っていること」を一つ選ぶ。
3 グループ別に協議する	30分	○ 「このテーマを選んだ理由」「コメントを読んで感じたこと」「日頃から自分が大事にしていること」「今頑張っていること」「自分の課題」等を一人が5分程度話していく。話し終わったら他のメンバーは感想を伝える。質問があってもよい。 ○ お互いに聴き合うことを大切に、自分の考えを確かめたり、他のメンバーの考えを参考にしたりしながら聴く。
4 各グループが協議内容を全体に広げる	15分	○ 各グループでの学びをお互いに共有する。



研修プログラム例⑥-1 ～付箋を使って～（1時間30分程度）

☆研修のねらい

- ・生徒指導、学級経営上の課題への取組のポイントを知り、自分たちの取組に生かす

☆準備物

- ・グループ分け（事前に同じ事例を選んだメンバーごとにグルーピングしておく）
- ・とりあげる事例（選んだ事例）のページを人数分印刷したもの
ただし、考察のページを印刷せずに話し合うこともできる
- ・模造紙（グループに2枚）、付箋（3色×人数×5枚）、マジック、タイマー

研修の流れ	時間	留意点・備考
1 研修のねらいと内容を知る	5分	○ グループのリーダーが流れを確認する。
2 事例を読む 付箋に書く	15分	○ 事例の中から「この取組はよいな」という点に絞って記入する。
3 付箋を出し合う①	20分	○ 一人ずつ簡単な説明を付け加えながら付箋を貼っていく。その際、全員に発表の機会が保障されるように、一人一枚ずつ順番に貼っていくようにする。 ○ お互いに聴き合うことを大切にする。○ 出された付箋をグルーピングしてまとめをする。
4 自分たちの事例について考える	15分	○ 自分たちの事例について、「似たような取組をしている」「自分たちの頑張っていること」と「自分たちにもできそうだ」「やってみたい」ということを色のちがう付箋に書いていく。
5 付箋を出し合う②	30分	○ 3と同様にする。
6 感想を伝え合う	5分	○ お互いに聴き合うことを大切にする。

研修プログラム例⑥-2 ～ワークシートを使って～（1時間程度）

☆研修のねらい

- ・生徒指導、学級経営上の課題への取組のポイントを知り、自分たちの取組に生かす

☆準備物

- ・事前に選んでおいた3つ程度の事例を人数分印刷したもの
- ・ワークシートA・B（人数分）

研修の流れ	時間	留意点・備考
1 研修のねらいと内容を知る	5分	○ グループのリーダーが流れを確認する。
2 3つの事例から一つを選ぶ	10分	○ 事例を選んだところから丁寧に読み始める。 ○ リーダーは時間配分を板書しておくといよい。
3 ワークシートAを記入する	10分	○ 事例から参考になるポイントを見つけていく。 ○ ワークシートAをもとに自分の考えをグループのメンバーに伝えていく。
4 選んだ事例ごとにグループをつくり話し合う	20分	○ お互いに聴き合うことを大切にし、自分の考えを確かめたり、他のメンバーの考えを参考にしたりする。
5 ワークシートBを記入する	10分	○ 3・4を手がかりにして、これから取り組んでみたいことを考えていく。

巻末資料

～事例集の中で使われているアンケートQUの用語について～

ここでは、アンケートQUの用語で、事例集の中で使っている用語についてのみ説明しています。

1 アンケートQU (QUESTIONNAIRE-UTILITIES) の構成について

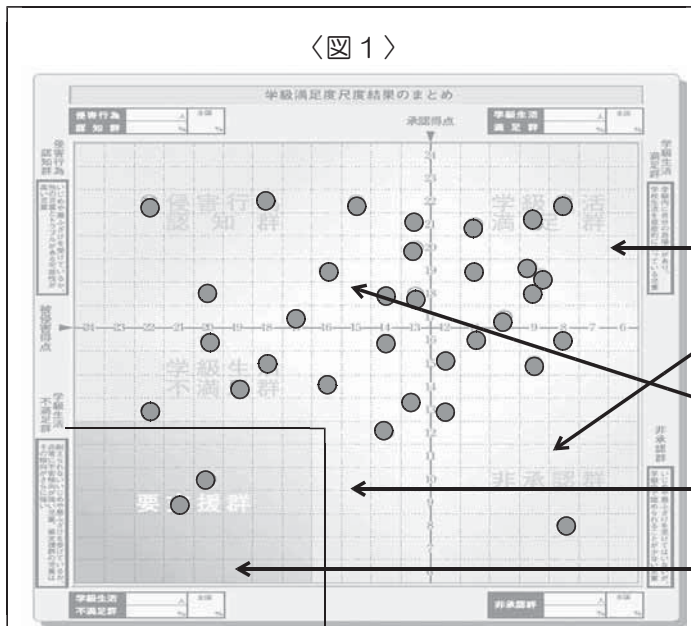
○ 3つのアンケートから構成されています・・・高校は4つのアンケート

- ① 「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」(学校生活意欲尺度)
- ② 「いごちのよいクラスにするためのアンケート」(学級満足度尺度)
- ③ 「日常の行動をふり返るアンケート」
- ④ 「悩みに関するアンケート」・・・高校用のみ

※各アンケートの名称は校種によって、若干違ってきます

2 プロット図とは

②「いごちのよいクラスにするためのアンケート」(学級満足度尺度)の結果は、次の〈図1〉のようなプロット図に表されます。縦軸は、「承認得点」、横軸は、「被侵害得点」の高低を表します。この2つの得点から、プロット図に子どもたちの位置(●)が示されます。



3 「〇〇群」とは

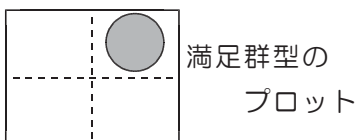
事例集の中で「子どもは『〇〇群』にいた」等の表現があったと思います。それについては次のとおりです。

- ア 「学級生活満足群」
承認得点→高、被侵害得点→低
- イ 「非承認群」
承認得点→低、被侵害得点→低
- ウ 「侵害行為認知群」
承認得点→高、被侵害得点→高
- エ 「学級生活不満足群」
承認得点→低、被侵害得点→高
- ◇ 「要支援群」
特に承認得点が低く、被侵害得点が高い

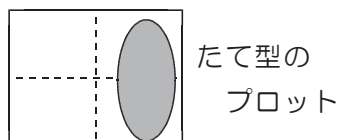
4 「〇〇の見られる学級」とは

事例集の中で「〇〇の見られる学級」「〇〇の学級集団」という表現があったと思います。アンケートQUではプロット図の子どもたちの位置の様子から、学級の傾向を次のア～カのように表現します。

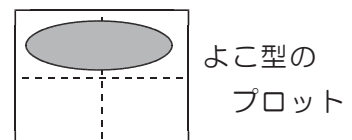
ア 親和的なまとまりのある
学級集団

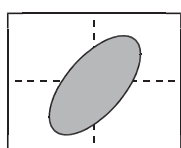


イ かたさの見られる
学級集団

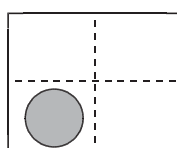


ウ ゆるみの見られる
学級集団

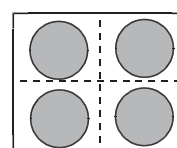




ななめ型の
プロット



不満足群型の
プロット



拡散型の
プロット

※ ア～カの表現は、『Q-U式 学級づくり』河村茂雄編著 図書文化」を参考にしています

5 「配慮」と「かかわり」のスキルとは

アンケートQUの中にある「日常の行動をふり返るアンケート」では、ソーシャルスキルの定着を「配慮」と「かかわり」の2つの側面から示します。（ただし、小学校4年生以上のアンケートQUの場合です。）

6 「K-13法」とは

河村茂雄氏が考えたアンケートQUを使った事例研究のことです。おおまかな流れは次のとおりです。

〈事例提供者による事例の発表〉

- ① 学級のリーダーを説明する
- ② 配慮を要する子ども、予想外のプロット位置の子どもを説明する
- ② 子どもたちのおもなグループについて説明する
- ④ 学級の問題と思われる内容を説明する
- ⑤ 参加者が事例提供者に疑問点、確認したい点についての質問する

〈アセスメント〉

- ⑥ 参加者が、問題発生・維持の要因をできるだけたくさんカードに書く
- ⑦ 全員のカードを出し合い、似た内容のもの同士を集めて画用紙に貼り、小見出しをつける
- ⑧ ⑦でできた画用紙を、重要だと思う順番に並べる。そう考えた理由を発表し合い、協議をして、一応の統一見解・仮説をつくる

〈対応策の検討〉

- ⑨ ⑧で考えたことに対する解決法をできるだけ多くカードに書く
- ⑩ ⑦と同じように整理する
- ⑪ ⑧と同様に順番をつけ、話し合っって統一の対応策を考える
- ⑫ 事例提供者が不安に思う点、懸念される問題点を確認し、対処策を確認する

〈結論と決意の表明〉

- ⑬ 事例提供者が、取り組む問題と、具体的な対策をみんなの前で発表する
全員の拍手をもって終了する

（『学級づくりのためのQ-U入門』 河村茂雄著 図書文化 より抜粋）

※ 詳しくはアンケートQUに関する書物でご確認ください。